寄松懐
歌かくとて

年經ても心は和歌のうらに生ふるまつのみさほはかはらさりけり
かきおかはなき後までもおろかなる名や流れけん水くきのあと
心にもすまぬことのみかきつめてのこすはおろか水くきのあと

川立春
麥のそぶてふ病をはらふ歌よみてよとありければ

山川の氷もとけてあらたまの年たちかへる水のしら浪
これもはたたみをやしなふ麥くさにかゝるやまひをはらへ神か勢

寄松述懐
旅宿にて

梓弓はるたつ日より千世かけて君にひかれん子の日をそまつ
たひ衣君かなさけのふかきゆへかへさわすれて日數へにけり

御寺にまうで、
御法拜聽して

わけくれは袖こそぬるれ秋ふかみ御法の山のみちし芝のつゆ
昨日までおもひかけきやあひかたきけふの御法にあはんものとは

扇に歌かくとて

ふくからにくさ木もなひく大君の御世をあふきの風の涼しさ

眞福寺開山眞福長者の入定の池の
奉納

たちよりていさやむすはん御佛のめくみもふかきのりの池水
ひと筋にいのるまことは梓弓八幡の神もうけや守らん

てひはつする人によみてつかはす

墨染に心を染めようへにきるころものいろはとにもかくにも

天保九年二月六日の日、いつくともなく僧きたりて、宿をこひければ、一夜とめけり。その夜きるものをとりにければ

きてわたるおもて計は墨染の袖に似あはぬうらはしら浪
くるしみの海にしつまんたち所より所なき沖つしら浪

歌こふ人によみつかはす

瀧邊納涼

かきやらは世にも流れてあらはれん心はつかし水くきのあと
涼しさは何といはねの松風にみたれておつる瀧のしら糸

花盛

野も山も盛なるらんそことなくふきくる風も花のかそする

海邊擣衣

夕されは鹽風さむみ海士衣なみとともにや打あかすらん

待花

梓弓春たちしよりみよしのの山のさくらをまたぬ日そなき

鈴鹿山にて

きくからにふりすてかたきのるこまの鈴かの山に鳴ほとときす

寄虫述懐

何こともにすむ虫のわれからとおもひしらはや人はうらみし

年内立春

ひとせにふたたひ春はたつた山雪けなからにかすむのとけさ
長閑けさは氷もとけて青柳のいとまなみよる春の川かせ

をはらめかいたたく柴に、花をなりそへてかへるをみて

磯の女かいたたく柴に折そへし心ゆかしき山櫻花

鶯いまだなかすといふ題を

梓弓はるともしらて鶯は雪のふるすに冬こもるらん

三月盡

色ふかき霞の衣ぬきすてて春はいつくにたちかへるらん

三六、春の詠草

——天保十——

天保十一年さいふとしの正月十日あまり六日の日、瀧山にまうでゝ

すみそめの袖にもかけてむすふらん御法の山の瀧のしらいと

たちよりていさやむすはん音たかく世にきこえたる瀧のしらいと

正月十八日、青龍院様あつまへかへらせ給ふ御名殘をしみて、よみて奉る

をしむかなまたよふかきに鳥かなくあつまにかへる君かなこりを

春かすみたちなへたてそ君かゆくみかけあふかんあつま路のそら

みな人のをしむもしらすからころも君はあつまにたちかへるらん

さく花の雲の上野の車さかゆくりあひみん春をこそまて

眞福寺にまうでゝ、「やくしふつ」といふ五もしを、句の題におきてよみて奉る

やま風にくもふきはれてしらつゆのふかき木の間のつきのさやけさ

ある行者の筆子たちの、竹の杖をきりてめくみ給ふによめる

春松と題をとりて

竹のこの君かめくみの杖なれはつくともつきぬよはひをそおもふ

時雨にもつゆにもそまぬやままつのみとりも春はいろそまされる

ある上人より長崎へおくり給ふとて、歌よみてよとこひ給ふに

長崎の長きわたりもへたてなくかよふは心ことの葉のみち

もろこしの人にみせはやすはやま心のことの葉の花

いさゝらはもろこしまてもたねまきてこと葉の花のはやしとやせん

山寺にまうでゝ

松風にうき世のちりをはらはせてかゝる山邊にすみそめの袖

永井の里に草の枕をむすぶとて

たひ衣草の枕の夢とのみなかゐの里に日數へにけり

永井の里なる御社まうでゝ

御しめ繩なかゐの里の神かきにかけていのらん千世萬代を

ある人年三十あまりにして、出家し給ふと聞きてよみてまゐらす

から衣すみの衣にぬきかへてきみは御法のみちもとむらん

ある上人より、ほん字といふものをかきて、歌よめとありければ

敷嶋のやまとにしらぬ鳥のあといつわたりきてふみのこすらん

われはまたみなれぬ鳥のあとなれはとめてかくへきことの葉もなし

敷島のみちよりほかはしらなみのよする磯邊にわふる身なれは

みなれさほさしておしへよのりの道ちかひの海をわたるふな人

春の色のいつくはあれと又たくひ難波わたりのあけほののそら

名にしおふ月ゆき花のほかに又よしのゝ山の春のあけほの

孝行

いかはかり守ますらんたらちねの親をおもはゝ神も佛も

ある人乳出る歌よみてよとこひければ

出よかし親のめくみのちくま川なかれをくみてそたつ子のため

ふすまに鶴の畫けるを見て

千年ともかきりしられぬうつしゑのつるとともにや君はすむらん

岡崎の里のしるへの方にて、ふるきぼくのよく蛙に似たるを見て

なかねともなくにまされる姿こそを田の蛙におとらさりけれ

なからの橋といふ題をとりて

いつしかとたえてなからの橋はしら名のみはかりはきゝわたるとも

宮田君の庭のけしきことなるをみて

花もみちよしの龍田の面かけをにはにうつして君はみるらん

かへし

たくひなき吉野龍田の面がけを君かこと葉のいろにこそみれ　藤原則成

又別店をみて

これやこの月ゆき花を友としてうき世をよその住家なるらん

宮田みね子の君のひき給ふ三つの緒のことを聞て

みな人もよりてきくらん三つの緒のいとも妙なるこゑにひかれて

磯丸翁の我庵に宿られける夜、かと田の蛙のなきければ

我やとのかと田の蛙君かためなくさめとてやよたゝなくらん　則成

かへし

夜もすからを田守蛙なくこゑをたひねのとこにきくもめつらし

植田屋三千子の君のもとにて、三月三日祓の盃の歌よめる

くむからに君か名におふ三千年のよはひやのひんもゝのさかつき

めくり來て汲そ嬉しき三千年のよはひのふてふもゝのさかつき

とは千の君のもとへよみてまゐらす

伊勢のあまの小舟のつりのいとまなみよらて過にしことをしそ思ふ

名にしあふとはにさくてふことの葉のはなみかてらに君をこそとへ

花の露ちりは袖にもとまらんとたかき梢の本にこそよれ

名にしおひていつきてみてものとかなる春の心の花のさくら屋

赤坂の里なる櫻屋にて

谷文笠ぬしのもとめにふりて

時をえて世にこそ出れ谷川のきよきなかれをくみてすむらん

千世ふともつかひはなれすむつましくちきりかさねよ鶴の毛衣

寄鶴祝

杵と柳の畫かけるをみて

くりかへし君はみるらん千世かけて松にかゝれる青柳のいと

ふかき山邊に人家をかける畫をみて

治まれる御世をもしらてあはれかくふかきみ山にすむ人やたれ

山ふかみうき世のかれて谷川のきよき流れをくみてすむらん

都鳥の畫かきたるすみ田川やきの盃をみてよめる

さかつきにかけをうつして都鳥すみた川原に名をとゝむらん

柳をみて　御佛の法の手ひきのいと柳よりくる人のかきりしられし
杵を見て　あけくれの御法のころにふきそへて琴の音かよふ庭のまつ風
朝鶯　あけぬとてねくらをしむかくれ竹のよをこめてなく鶯のこゑ
朝またきねくらの竹のよをこめてなく鶯のこゑそあけゆく
旅宿にて鶯のこゑを聞て　かさねてもきてやきかましたひころもうらめつらしきうくゐすのこゑ
蛙　いひ出ぬ池のかはつもわかことや身をうき草のねのみなくらん
氷爲し水もぬるみてあらを田をかへす〳〵もかはつなくなり
を田にひく苗代水にこゑたてゝよむか蛙のなみのうたかた
磯丸主の紙のうらにものかゝんとするを見て、人々わらひければとりあへす　何ゆへに人わらふらんはま千鳥ふみおくあとはうらにこそあれ　正廣
かへし　磯千鳥おもては浪のたかけれはうらにふみおくあとなとかめそ
ふみのこすあとなとかめそ友千鳥うらの眞砂の數ならすとも
ふみのこすあともはつかし磯千鳥なみ〳〵ならぬ君かみきはに
たのむとてのこすはおろかかくはかりわれさへすまぬ水くきのあと
寄夢述懷　うしと思ひ嬉しとみるもさめぬまの夢のうき世の迷なりけり
うつゝとは何をいふらんねても夢さめてもおなし夢のよの中
いとはしなよきもあしきもうたゝねのうとろむうちの夢とおもへは
ある人病にて身のはれなるとて歌よみてよとありければ　大そらとおなし心のあきらかにはれたるみにはさはりあるまし
心月といふことを　いつとても月は心に住のえの松ふく風の雲しはらへは
暮春鶯　をしまるゝ花さへちりて鶯のなけとも春はとまらさりけり
三月盡　みな人のをしむもしらすゆく春をなきてとゝめよそのゝうくひす
竹の内の里のしるへにゆきて　をしめともひきとめかたきさほひめの霞の衣はるのわかれ路
名にしおへはうれしきふしもありなんと竹の内なる君をこそとへ
心あらはひとよ宿かせ名にしおふたけのうちなる竹のこのきみ
名にしおふちよをこめたる竹のうち君をうれしきふしはかそえん
をしみつゝたちかへるともたひころもかさねて君をとはんとそおもふ
かへるとて　かゝるとてなとわらふらん名にしおふこれもこと葉の花のしたつゆ
歌かく紙の上には、な雫のおちければ、人々わらひ給ふによめる
大崎の殿の御舘にてよみて奉る　かへるとも日數經ぬまにたひころもたちかさねきて君をあふかん
御かへし　わかるゝはうの花衣おるはたのひをもへすしてとひ來れかし　藤功公
ある御かたりたび〳〵の御めくみのほとをかんして　ことの葉によむともつきしたひころもかさね〳〵の君のめくみは

くりかへし經なんとそ思ふ千世八千世まさ木のかつらたまの緒にして

壽

卯月九日の朝、戸田淡路の守様、宮の里よりくわなへわたら給ふ御船出を祝奉りて

君かためわたるふな路のおひてよくあらくなふきそいせの神風

三七、月の泉

—天保十一年—

月の泉
早春月
春月
名所春月
夏月

よよかけてすみわたらなんうつしおく月のいつみの水くきのあと
春を淺みかすみもあえすそらはなほのこるゆきけにさゆる月かけ
たちわたるかすみのころも春の夜のおほろ月なるかけののどけさ
名ところはいつくもあれとよしのやまはなのくもまの春の夜の月
わけくらしおもひかけきやよしのやま花のくもまの月をみんとは
いろふかみ世にもてはやす花のみが月もよしのゝ春のあけぼの
吉野やま花のさかりは久かたのつきもおほろにほふのとけさ
さしのほる月のみふねもよしのかは浪の花にはさはらざりけり
のとけさは月もかすみにこもりくのはつせの山の春のあけほの
眞木の戸もさゝてみるまにあくるかな月につれなき夏の夜のそら

濱月如雪
夏月
浦夏月
船中夏月
旅泊月
水邊夏月
松間夏月
浦夏月
秋月

をしみつゝなかむるほともなかそらに月をのこしてあくるしののめ
涼しさは夏ともさらにしらはまの眞砂をゆきとみする月かけ
中そらに月をのこして夏の夜はまたよひなからあくるわひしさ
涼しさもきて日みぬ人はしら浪のよるの衣のうらの月かけ
いとまあらはきてもみなゝん夏ころもうらのとまやの夜半の月かけ
ふな人はあつさわすれて梶まくらうきねなからに月やみるらん
夏ころもあつさわすれて月みつゝいく夜海邊にたひねしつらん
夏ころもうら涼しさは名にしあふ月すみよしの松のしたかけ
涼しさは軒はの露にうつりきてしのふにあまる夏の夜の月
生ひ茂るこのまもりきて谷川にうつるも涼し夏の夜の月
なかめつゝまつの下風ふくからにもりくる月の影のすゞしき
涼しさは夏ともさらにしら浪のよるのころものうらの月影
あきらけきみよてらしますゝ鏡哉ちりもくもらぬもち月のかけ
雲間よりくる月の影みれはあきのあはれもふかき夜のそら
うきこともおもひわすれてみる月をかなしきものとたれかいひけん
そらの海の雲のなみ間をこき出る月のみふねのかけのさやけさ
なかむれはものそかなしき秋の夜の月はおもひのますかかみかな

野秋月　むかしよりつもれは老となるかけもわすれてそみるあきの夜の月
江秋月　秋ふかみ軒はの露のたまたれのひまもる月のかけのさやけさ
海邊秋月　秋の野の千草の露のかす〳〵をたまとみかける月のさやけさ
磯秋月　うら風も心してふけしらつゆの玉江のあしに月やとる夜は
旅宿月　心ある人にみせはやすみあれしうらのとまやの秋の夜の月
十五夜　うら浪のよるともみえぬ月かけにあまのをふねもこきや出らん
故郷月　さやけさは玉とみるまてあらいその岩にくたくる浪の月かけ
名所月　露ふかみあはれとひきてくさまくらかたしく袖にやとる月かけ
關月　久かたのひかりもみちてひとゝせをまちしかひあるもち月の影
對水月　むかしよりなかむる人のますかゝみちりもくもらぬもち月のかけ
山居月　ふる里の軒はもりきていにしへしをしのふの露にやとる月かけ
殘月厭雲　うら浪のよる〳〵ことにすみのえのまつにかひある月をみるかな
松間月　いまも夜月は夜なく清見かた戸さゝぬ關をもりあかすらん
　くるゝより出るをまつのした水にさしそふ月のかけのさやけさ
　山ふかみむくらかやともらさしと月は夜な〳〵すみわたるらん
　天の戸はあけてものこる月かけをしはしたにみん雲なかゝりそ
　山風に雲ふきはれて軒はなるまつにかひある月を見るかな

山秋月　ふくからにかゝるうき世の雲はらふ嵐の山の月のさやけさ
露如玉　とくさかるその原山におく露を玉とみるまてみかく月かけ
九月十三夜　秋ふかみ照りこそまされ長月の月のかつらもゝみちしぬらん
旅中月　露ふかみあはれとひきてたひころもやつれし袖にやとる月かけ
獨見月　たのもしなうき世のかれてすむ月をひとりみ山にいほしむる身は
瀧月　いはなみのよるもみよとやおりはえて月にさらせるぬのひきの瀧
山秋月　さやけさは萬代かけて龜の尾の瀧のしらたまみかく月影
名所秋月　さやけさはあま雲晴てさしのほる三笠の山の秋の夜の月
九月十三夜　さす汐に光もみちて名にしあふあかしのうらの秋の夜の月
海邊秋月　梓弓まゆみつき弓ひきとめているまてもみん長月の影
冬月　うら風に雲さへ晴てあかしかた浪にうかへる月のさやけさ
川寒月　冬ふかみ雲のなみ間もこほるかとおもふばかりにさゆる月かけ
冬庭月　まはらなるこのまもりきて山川にうつるもこほる冬の夜の月
湖冬月　谷川の水のそこまてすみわたる月のこほりや鏡なるらん
　出て見れはそらに雪けに風さへて庭に露おく夜半の月かけ
　名にしおふ鏡の山にすみのほり水海かけてこほる月かけ
　水うみにうつるもおもき石山のかけさへこほる冬の夜の月

湊月　みなとえの芦間をわけてさし出る月のみふねのかけのさやけさ

三八、ほふぐの中よりかきぬきし歌ども

—天保十一年—

神送によめる

十月つもど　けふといへは御社ことにかよふらし出雲の國へわたる神かせ

御社をはらひ清めて出雲よりたちかへります神やむかへん

落葉道をかくす　出雲より立かへります神風にぬさとたむけてこの葉ふるらん

わけのほる道みへぬまてあらしやまあたらもみちをふきちらすかな

ゆきならでつもるもみちに柴人はなれし山路もふみまよふらん

朝熊山に住給ふ、龍雲禪師にふみて奉る　ねかはくは遠き麓も照せかし朝熊山の峯の月かけ

田原の里なる間瀬春川君のもとにて、よみてまゐらす　榮えゆく庭のまかきに咲き匂ふなれも千世ませしら菊の花

春のころ田家にやとりて　軒ちかきを田のかはつの歌枕夢もむすはてきゝあかしけり

山家雪　月花にとはれし道もうつもれてゆきに人めもかゝる山里

澤士書かけるをみて　よる浪にうきつしすみつうきめかる海士の姿はゑにもかきうき

ある人より　梅か香のにほはぬ宿もへたたすはなれてとへかし春のうくひす

伊勢國山田の里なる、荒木田神主久老先生の卒給ひしは、八月十日なりとき、その法事をいとなみ給ふとも

しらす、たちよりて、よみて奉る　たちよれはみぬ面かけのしのはれておもひこそやれけふのむかしを

浦に數々船のうかびたるをみて　ちりうきしこの葉のことくみゆるかななきたるうらの千船百ふ船

岡　葛　風さわくをかの葛原わけゆけはうらみかほなるつゆそこほるゝ

御世を祝ひて　四方の海山てふ山のおくまてもおさまる御世はなみ風もなし

ある歌人のもとにとふらひて　長閑なる宿をとはすは冬かれにことはの花もしらで過まし

梅柳渡江春といふ題をとりて　難波江や岸の柳のいとはやも梅さきにほふ春は來にけり

春　川　鈴鹿川やそせの氷とけぬらしはるたちかへる水のしらなみ

春のころ都にのぼりて　のぼりきてあふそうれしき名にしおふ雲のうへなる花の盛に

ある時鈴鹿山をこゆるとて　鈴鹿山しくれのあめのふることにもみちのいろもふかくこそなれ

鈴鹿川にて　音たてゝ時雨ふりくる鈴鹿川八十瀬の浪もたかくこそなれ

正直

鈴鹿山ふりかへりみておもふかなふりすてかたきふる里のそら
あるかゆえにをしやほしやとつみおきてかねのばんする人の愚さ
おしなへて國のたからを手にとれはわかものとのみおもふおろかさ
正直のふくをきらひてよこしまのびんぼふまぬく人のおろかさ
わけてみよ直なる人は世におふきあさの中なるよもきなりけり
治る御世の常盤のま木はしらふとしきたつる宿そ榮えん

新宅を祝ひて

ある人の、酒のよきほとにのめる歌、よみてよとありければ

酒はたゝよきほとほとにのむもよしのまぬにしくはあらじとそ思ふ

ある人の、わがさかやきをすり、髪ゆひ給ふに、よみてまひらす

かしらすり髪ゆひ給ふゆひの長きよはひを君もへぬへし
ねかへたゝかゝる御法の時をえてこの世のゆめのさめさらぬ間に

御法拜聽して

世を照す御法の山の月かけを君とともにやゆきてあふらん

西國めぐりに行くとて

錦ともいはねのつゝしかけ見えてから紅にはふ池水

池の邊の岩つゝしみをみて

豊川稲荷明神の御札をいたゞきて

わか宿に御かけうつして稲荷山よよにかゝけん三つのともし火
まよふみの心の闇を照せかし稲荷の山のみつのともし火

夕立

なる神の音もひゝきて高砂の尾の上にかゝるゆふたちのくも

祝言

暮秋虫

松風如秋

松風近秋

人丸明神の　像　拜奉りて

産安歌

人のあざてふものなほる
みもすそ川にて

出生千祝ひて

ある人耳の近くなる歌、こひければ

あまくものたひくまてにつもれがしちりよりなるれやまとことの葉
秋もやゝふけ行のへの露しもによはるの虫のこゑそかれゆく
涼しさはさなから秋の心ちしてなるをよそなる軒の松風
きくからに心涼しくなりにけり秋にかよへる松風のこゑ
あふくかなこゝにうつしてほのほのと明石のうちの神の御影
みつ鹽にうみ安かれといのるかなはらめる人はあまにあらねは
うまれよりしろきは人のちかほにてあざむくいろはゆきと消なん
ふちとせのへたてはあれと人はみなみもすそ川の流れなりけり
さかえ行ふたきは本に生ひ出てなひく子まつも千年をやへん

きくためのの耳にはちかく音つれてかよへことはのはなのしたかせ

ある人かたのはるとて、歌こひければ

やめたまへおしてそいのるあつさ弓はるといふなるかたのやまひを

髪のしらかにならぬ歌、人こひければ

名にしおふくろ髪山のふかみとりとしはへぬとも色なかはりそ

ある人風ひゝたるとて、歌こひければ

人のみにやとるはおろか風ならは空をふくこそならひなりけれ

竹子にかはりて磯丸ぬしのもと　　河竹のひとよふたよとへたつともあたなふしとそおもひくたすな　　献之

かへし

河竹のひとよのふしもなきものをいかてあたなる名の流れけん

柳齊先生によみてまゐらす　名にたかき君をとはすはたまほこのみちのひかりもしらで過まし

ある人髪のちゝむと、歌といひければ

名にしおふ髪はすぐなるものなれはをくしにかけてとかはのびなん

田家

いか計さひしかるらんおしねかるかと田の庵の秋のゆふくれ

夜をさむみ秋のかりほのいねかてにもりあかすらんを田のまずらを

月とうさぎをかける詩をみて

照る月にうかれ出てやあそふらんうさきも草の露をはみつゝ

たのもしな君かこひ茶のこひ中に水さす人はあらしとそおもふ

富士山に朝日のさしそふ嵩かけるを見て

久かたの天の戸あけてあかねさす日かけに匂ふ富士のしらゆき

庭菊

咲しよりまかきの竹のよをこめておくつゆふかくにほふしら菊

木につもれる雪をみて

冬こもる木々の梢もさく花のおもかけみせてつもるしら雪

閑庭雪

つもるとてたれかはとはんいたつらに年をふるやの庭のしらゆき

庭雪

とへかしな月花よりも庭の面の雪には人をまつのしたいほ

朝顔

月にとひ花にとはれしならはしにゆきにも人をまつのした庵

みたれ髪とくおきてみんしら露のひるまをまたん朝顔の花

御世を祝ひて

朝なさく朝顔の花かつらくりかへしつゝ君はみるらん

又ある時歌かく紙のうへに、わかはなのしつくのおちけれは人々わらひ給ふによめる

たちはさや弓は袋におさまれる御世にすむ身はたのもしきかな

地獄極樂

かゝるとて人なとかめそ名にしおふこれもこと葉の花のしたつゆ

みなもとをたつねてみれはわか心にこれは地獄すめは極樂

かゝるとてなと笑ふらん名にしおふこれもこと葉の花のしたつゆ

ねかはねは地獄計がちかよりて遠くこそなれ極樂のみち

つくみ

世の中の人の心のうちにこそ地獄もあれは極樂もあれ

寄鈴述懐

つくるなよつみはその身に老の坂おひのほりなはくるしからまし

世中の人はゑきろの鈴のことふりより心ねこそをしけれ

鬼

心から心の鬼にせめられて身のおき所なき人もあり

いつくそと鬼の住家をたつぬれはおのゝ心のうちにこそあれ

たつねてもかくれかもなきよの中に鬼の住家はいつくなるらん

ある人小兒のかんの虫の治る歌、よみてよとこひければ

人の身にやとるはおろかかんちかひむしてふむしは秋にこそあれ

光門主の餅をめくみ給ふ　みな人にもちゐられよといはひつつ餅をたまはることそうれしき
ある時女のはぎを見て　わけいりていつかたをらん名にしおふ君かすそのゝしらはきの花
ある女のもとへ　いろふかき君かすそ野の萩の花くさきをわけてたれたをるらん
きてみすはしらて過まし戀ころも君がすそ野のしらはきの花
瀧の川といふ所に住み給ふ上人によみて奉る
あさころも君は住らん瀧の川うき世のあかをあらひ流して
ある人の出家し給ふとて歌よみてよとありければ
うらやましすみの衣にたちかへて君はみのりのみちもとむらん
梅　梅の花たをることこそかたからめかをたに袖にうつしてしかな

三九、旅ころもの巻

——天保十一年——

大保十一子年十月晦の日都のかたへまからんとて
旅ころもたつや鹿嶋の神かけてつつかなかれといのりつゝ行
たのもしな花の都の空たかくゆくもかへるも敷嶋のみち
旅衣けふたつ袖はうすくとも都の錦たちやかさねん
岡崎の里より芝山様御殿へ鳥を送り奉るとて
及ひなき空のうへまてあかるかなあさき三河にすめる水鳥
奉る　照る月の都のそらに吹あけよかせをたよりにおくることの葉
矢走の渡し船にて　梓弓矢はせのふねのはやけれはいるかことくにわたる水うみ
都にてよめる　たひ衣冬きてみても名にしおふ花のみやこはのとかなりけり
霰　玉あられねる屋の板間のいたつらに音のみたてゝおとろかすらん
雪ならは木にもとまりてあすもみんよはのあられの音計して
山雪　さえ〳〵し夜半の嵐の音たえてけさはと山につもるしらゆき
橋上霜　さむしろにかたしく袖やこほるらんしもおきわたすう治の橋姫
水上雪　このまもる月のかけかとみゆるまて霜おきわたす人のたなはし
山川やむすふ氷をよすがにて水のうへにもつもるしらゆき
霜夜月　ゆく水のよとみもとめてうき草のかれ葉のうへにつもるしら雪
峯古松　出てみれは庭の眞砂も我袖もしもにさえ行夜半の月かけ
とうじはい折句　千世ふりしたか山住の跡そともとはは峯の松はしるらん
御舘の松を見て　とくさきてうくひすさそへしら梅のはなの盛のいろさめぬ間に
冬神祇　常盤なる松のかけそふ御館守君も千年をかけてさかえん
宮人のたむくるぬさもしら雪のふるの社は神さひにけり

竹雪
いか計ふりつもるらんくれ竹のよふつきそらに雪をれの音

夜雪
久かたの空にしられぬ有明の月とみるまてつもるしら雪

松間冬月
山松のこの間もりきて下草のかれ葉のしもにこほる月影

寒月
谷川の水はこほりてよとめとも流るゝ月はかけもとまらす

冬月な
ひさかたの天の川水こほるかとおもふ計にさゆる月影

待雪
しら雪のふらはや人もとひこんと空なかめつゝまつのしたいほ
なかめやるそらはそれともしら雪をまつにつれなくしくれふるなり

故郷雪
ねかはくは高根につもるしらゆきをわかまつ庭にさそへ山風
老らくのおのかかしらもかく計としふる里につもるしら雪

社頭雪
ふみわけてとふ人もかなふか草のあれにし里につもるしらゆき

松雪
稲荷山み雪つもりてこのころはなのみなりけりあけの玉垣
昨日まて空なかめつつふらはやとまつにかひあるけさのはつ雪

名所雪
名にしあふ櫻の宮にふるゆきはさなから花のちるかとそ見る

早梅
咲そめて雪のうちにものとかなるはるまちかほに匂ふ梅かえ

爐火似春
かきおこし友としすれは春めきてのとかなりけりうつみ火のもと

野雪
久かたの月とみるまてふりつもるゆきもはてなき武藏ののはら

冬岡
冬かれてわけくる人もかたおかの松さえゆきにうつもれにけり

屏をめくみ給ふに
あふきても猶大空をあふけとてあふきたまはることそうれしき

寄道述懷
ふみわけていれはいるほとおくふかしかきりしられぬことの葉の道

四〇、大崎の御館にて

—天保十二年—

竹と虎をかける畫をみて
もろこしにありときくなる虎だにもすくなる竹のかけにこそすめ
いさゝらはもろこしまてもわけゆかん虎よ千里のみちにいさなへ

寄虎戀
わけいりて君とすまはやもろこしの虎ふみ野へもいとはさりけり

獅子
みてもしれいかなる獅子のいきほいもやはらく國のやまとことの葉

武内宿ね
名にしおふたけのうちにやよをこめてなゝよつかへし君はこの君

手向山
春あきの花や紅葉の手向山うけやまもらん神のまに〳〵

雲水
あはれかく行えさためぬ雲水のついの住家はいつくなるらん

石地藏といふことをよめとおほせことかうぶりて
たのめたゝたのむ衆生をすくはんとちかひはおもき石のみ佛

述懷
うたゝねの今目かさめておこたりをおとろく計ことの葉もなし

庭鳥の霄鳴すとてうたこひけれは
—大崎の御館にて—

庭つ鳥家の榮えをつくるかなよひなきこゑと人はいふなり
いりあひの鐘はふもとに聞すてゝ月にこえゆく佐よの中山
天地のつくりなしたるあらみたまみかゝて過しことをしそ思ふ

佐夜中山
述懐

四一、贈答の歌　—天保十二年—

磯丸ぬしのとふらひけるをよろこびて　老の友かたらふ冬のよもすがらふくるもしらぬ埋火の元　正陳

返し　おもふとちおきあかしつゝ夜もすがらかたるにつきぬうつみ火の元

又　かきおこしかきおこしてもあかぬかな老の友なるねやのうつみ火

又の日雨ふりければ　大そらもこゝろありてや村しくれふり出て君をひきとゝむらん　正陳

返し　ぬるゝとてしくれの雨はいとはねとふり捨かたき君のことの葉

庭の梅のはつかにさき出けるを手折りて　まれにとふ人まちかほにまたさよりひもときそむる庭の梅かえ　正陳

返し　おもふ哉折て給るうめかえのいろよりふかき君のめくみを

おくりもて見せすはしらて過なましいろふかくさく宿の梅かえ　正陳

残る菊を手折て　おきわたす霜の下にもうつろはて咲残りたる庭のしらぎく　正陳

返し　匂ふ哉秋のかたみとませのうちにちよをこめてや殘るしらゆき　正陳

残る紅葉を手折て　まれにとふ人も見よやそ染つくす紅葉のにしきちり殘るらん

返し　きてみすはしらて過まし旅ころも君かみたらの木々のにしきを

當座夜落葉　窓をうつ時雨にかよふおとすなりよはの嵐に木の葉ちるらん

嶺松　みし秋の露さへ霜に置かへて月もやとらぬ庭の淺ちふ

窓前竹　とはゝやな千代の昔のふることをみねに木高き松はしるらん
いとはしな月にはしはしさはるとも葉風すゝしきまとのくれ竹
みとりなる葉風もすゝしよゝかけて月みるまとになひくくれ竹

披書知古　ふみみすはしらて過ましいにしへの直きまなひの道のをしへを

琴　聞からにこゝろもそらにすみのほるつきのみやこの玉ことの聲

衣　年を經ておもひこそやれから衣かさねゝのあつき惠みを

四二、生ひ茂るの巻　—天保十三年—

天保十三年といふとしの卯月十日旅へたつとて

生ひ茂るむくらか宿をたち出ていさわけゆかんことの葉の道

—生ひ茂るの巻—

述懷

ぬるかうちも月と花との歌枕あたなるゆめはむすはさりけり

古里夢

思ひねの夢にはちかくみゆれともさむれは遠きふる里のそら

旅宿にて

草枕むすふ夜ことにふる里のわかとこなつの花をしそ思ふ

卯花

木の間もる月とみるまて夏山の青葉のかけに匂ふ卯の花

海邊郭公

をふねこく沖つしら浪よるかけてなくか磯への山ほとゝきす

川端氏の母の、初春のころみまかられしときゝて、卯月の半のころとふらゐはへりて

あわ雪と消てかへらぬあとゝへはうき卯の花のつゆそこほるゝ

たちよれは袖こそぬるれかれてなき人のはゝその森の雫に

榮え行こすゑの花のさくも見でなとかれつらん人のはゝ木々

たちよれは袖こそぬるれかれてなきわかはゝき木におもひくらへて

たひころも思ひかけきやたちよりてことはの花のたむけせんとは

寄菖蒲戀

あやめ草ひき手もかなと袖ぬれて池のみきはによらぬ日そなき

いかにせんひくことかたきあやめ草ねさしもふかき池に生ふれは

岡崎の里なる人の庭に咲みちたるつゝしの花に夕日のかけのうつれるをみて

たをやめのはたおるをみて

咲にほふ庭のつゝしの紅にうつる夕日の影そこかるゝ

櫻田にて

みてしよりつまこひ衣おりひめのはたのいとまもわすれやわする

青葉にも面かけにほふ櫻田のはなの盛にとはましものを

熱田の御社にまうて

あふきてもあふけもろ人世にひろきめくみあつたの神のみやしろ

神鏡

八百萬千神のます鏡くもらぬ御世にみかけうつして

ある人初老の歌よみてよとありければ

寄松述懷

若松の常磐にならへ今年よりおひその森の名にはたつども

旅宿蚊遣火

花の咲くためしもあれはとかへりのまつにちきらん老の行末

御世を祝ひて

都出てたひねをすれはいふせさもこのころなるゝ賤かかやり火

寄竹祝

たのもしなうきふししらぬくれ竹のすくなるみよにすめる國にみ

乙女子か舞をみて

ふして思ひおきてもあふくくれ竹のすくなるみよのかけにすむ身は

名古屋の里なるある御館にめされて、八重路といふたをやめによみてまゐらす

みせはやな天の乙女もうらやまんこのまひ姫のみやひすかたを

えにしあらはおくふかくともわけいりていつかたをらん八重の山吹

わけいりてうつろはぬまにたをらなん君をこそまて八重の山吹　八重路

かへし

名古屋の里なる野村氏の生日の祝の歌、よみてよとありければ

千世かけて生出し君かたまかつらくる年ごとにいはふけふかな

ある御館に、軒の玉すたれのひまより、月もり〳〵るをみて

おもふとちまとひしをれは玉すたれひまもる月の影のすゝしさ

寄雲述懷

をり〳〵にうきむら雲はかゝれとも心の月はくもらさりけり

寄水述懐

元よりも根さしなければうき草の水にまかする身こそやすけれ

能見の里にて郭公のこゑ聞て

あしひきの山時鳥名にしおふ里をとひきてねをのみそなく

草花先秋

をみなへし人のあき風たゝぬまにまつめつらしくさきにほふらん

磯丸ぬしの眞直なるを

をみなへしまつ咲しよりすゝしさは夏の末野にかよふ秋風

あかへし　八千またの道にまとはぬ君なればやそまがつひの神もさはらし

寄道祝　玉日成武

めくまるゝ君かことの葉八ち又のち又の神もうけやまもらん

寄風述懐

天地のあらん限りは榮えまし神のわけけんことの葉の道

かと子の君のもとへ

いつくとも行えさためぬ我みこそ風にまかするこの葉なりけれ

かへし

敷島の道にみそめし若草をおひの枕にむすふ世もかな

蓮露如玉　歎嶋の道にはかねて若草のおひさきかけて契りしものを　かと子

津島の里なる守身君のもとにて淺野清實君の古今のかうさくを聞て

はちす葉のにこりにしまぬ心よりおくしら露を玉とみすらん

わけいりて君しるへせよおくふかくふみみるみちのあらんかきりは

名古屋の押切町京屋信成君のもとにて吉野川といふ菓子の名をよめる。

名に高きなみ〳〵ならぬよしの川流れくむ身も限りしられし

かくふかく面かけにほふよしの川花の雫の流れなるらん

月のかけ花の露そふよしの川なかれとめきて汲そ嬉しき

櫻にもまされるものは世中のうきふしいはぬ口なしの花

千世かけてうきふししらぬくれ竹のすくなるかけに君はすむらん

時鳥山路こえきてふく風もなこやの里をすぎかてになく

天津神國津神みなつとひ來て八百よろつよもさかゆこの宿　田鶴麿

みしめ縄かけてそいのる天の神國つやしろのあらん限りは

師走二日の夜磯丸うしととゝに、周魚亭の許にもとめて、終夜ことのかたりしけるに、

青によしならふ夜床をしきたへの枕なりけりかたるいにしへ　七十五翁　田鶴麿

友もよしならの都のふる言を夜半の枕にかたりあかさん

ある御館にめされて、よみて奉る

年をへて思ひかけきやたまくしげふたゝひ君をあふきみんとは

御庭の池の岸の紅葉をみて

池水にきしの紅葉のかけみえて錦をあらふ心ちこそすれ

櫻の紅葉したるをみて

春は花あきはもみちに染かへてめかれぬものは櫻なりけり

あつまにまかり給ふときゝて、馬の花むけによみてまいらす

旅衣けふたつ袖に武藏のゝ花の錦をかさねてよきみ

天にまかすといふことを

つとむれは身はいとやすしけふはけふあすはあすなるそらにまかせて

いたつらにわれとはなさし何こともたゝ天地にまかす身なれは
いさりするをふねのつりのいとまなみ袖にかけつゝうみわたるらん
夢にたにまたみぬなすの初なりをうつゝに君か惠むうれしさ
ふきあけしこちのかへしもありなんとたゝ大空をなかめてそまつ
春雨のふるもいとわすうぐいすのうめの花笠きつゝ鳴なり
ふる雨にいつぬいおきてうくいすの梅の花笠きつゝなくなり
盛なる園の鶯雨ふれはうつろふ花をおしみてやなく
色かはる秋の末のをわけゆけは虫のこゑさへかれてさひしき

渡船
なすの初なりを惠み給ふに
○
雨中鶯
暮秋虫
もとのせになほりて、田はたてきたるときゝて
五月四日
又
旅宿菖蒲
石部の里なるより子のもとへ
稲葉につく虫をはらふ
くきかくし折句

いのるそのまことを神は水にせて元のせとなるめぐみをそ思ふ
立よれは袖にもちりてかほるかなあやめかりふく軒の下露
けふといへはみやもわらやもかほるかなあやめかりふく軒の下露
あやめくさ今宵は宿のつまにみて心ゆかしき旅ねおそする
千世かけて根さしもかたく石部なるまつとともにや君は榮えん
露ならていとふ稲葉につくむしをはらへ水穂の國つかみかせ
くにたみをきよくみかけるかゝみかなくもらぬ御世のしきしまの道
くもはれてきよくみかけるかゝみ山くまなきかけをしはしたにみん
年ことに千世萬代といはひ鶴亀のよはいを君もへぬべし
軒端もる月の影さへたえ〳〵にくもりみはれみ時雨ふるなり
玉あられねやの板間に音たてゝいく度夢をおとろかすらん
冬ふかみ人まつ風の音さへもたへてつもれる雪の山里

寄鶴亀祝
夜時雨
霰
山家雪
かやの木のかれたるとて歌こいければ
心なくかるゝはおろかめも春のみとりにかへれ宿のかやのき
連山雪
けさみれは富士あしからもあし高も山又山につもるしらゆき
或人へのかへし
みちわかぬむくらか宿をふみわけてとひこし君かなさけおぞ思ふ
春駒
かすみたちこのめも春の若くさにのかいの駒もいさむころかな
若草
けふよりは手なれの駒にかりかはんこのめも春の野への若草
家ことにけふはむかへて祝ふかなくさもこのめもはるの若駒
あまのりてぶものを奉るとて
あら磯の浪間にかつく海士のりをさゝけものとは心はつかし
あつまにまかり給ふときゝて
あつま路の花みんとてや春霞たつこと安く君はゆくらん

四三、都の家つと

—天保十三年—

天保十三年秋都へのぼるとて

雨ふり出しければ
ゆきてみん花のみやこの高雄やま紅葉の錦そめてまたなん

ふるさとの夢
おりしもあれたひのそらなるむらさめはふる里しのふ涙なるらん

熱田の御社にぬかき奉りて
よな〳〵の夢にはちかくみゆれともさむれは遠きふる里のそら

藤浪の里にて
かしこしな蓬か嶋の神かきに浪のしらゆふかけぬ日そなき

津島の御社にまうて、
たひころもいつきてみてもむらさきの面かけにほふ藤浪のさと

ふる川といふ所の御寺に、五日はかりとまりてなりしも、七回忌ないとなみ給ふによみて奉る
百ふねの津島の神のひろ前になみのしらゆふかけていのらん

たひころもおもひかけきやたちよりてけふのみのりにあはんものとは

十年あまりはやなゝとせのいとなみによりくる人も袖ぬらすらん

ふる川の里より、船にのりて、桑名の港にて
神かせのふくにまかせてあまをふねきよきなきさによるそうれしき

四日市にてよめる
ふる里を出し日數をかそをれは四日一日いつかへにけり

秋富士といふ題とりて
久かたの雲も及ぬ富士のねをいかてあききりたちのほるらん

道分にて
しのはるゝ心ひとつをいかにせん伊勢と都の道分のさと

石薬師にていしやくし折句
いそかしなしくれの雨はやますともくもはるゝまてしはしやとらん

關の里なる保行大人の庭の菊の花をみて
みても猶千世をのふてふ菊の花をりよく君をとふそうれしき

都路に行かふ人をとむるかなこと葉の花を關もりにして

鈴鹿明神の御社にまうで、
あふきてもあふくにたかき鈴鹿山音にきこえし神のみやしろ

神鏡にむかひて
あきらけき神の鏡にうつしおくかけはくもらし萬代までも

筆捨山にて
音たかく四方にきこえて世々ふるすゝかの山は神さひにけり

鏡山にて
ものかゝはうつしてゆかん家つとに筆捨山のあかぬけしきを

野路玉川にて
むかし人書にもかけしと筆捨てゝ山の名たかく世にのこりけり

矢はせのわたりにて
むかひみる鏡の山はむかしにてうつる姿はかくやつれけり

とくちりていろなる浪はたゝねとも面かけうかふ萩のたま川

梓弓まこと矢はせのふねならはいるかことくにこきわたせかし

あふ坂の關にて
あふみなる八つのけしきを矢はせなるふなちにみつゝわたるうれしさ

又こんと契りおきにしかひありていのちあれはやあふ坂のせき

都にて
めくみあれは雲のうへなる長月の月のみやこにのほり來にけり

芝山様の御舘にめされて
來てみすはしらて過まし九重の庭のちくさの花のにしきを

御庭の菊の花をみて

九重の庭のしら菊千世かけてきみかかさしにさきにほふらん

禁中菊

みかきもる人つてにのみきくの花八重九重にさきにほふらん

久かたの天津ほしかとみゆるかなくもゐの庭のしら菊の花

芝山國典樣、御歌めゝみ給ふありがたさのあまり、によみて奉る

ことの葉の雲のうへよりちりくるはいかなる風のめくみなるらん

ちりてこそ袖にもとまれ及ひなき雲のうへなることのはのはな

芝山國典樣より、まわたてふものをめくみ給ふありかたさのあまりに

めくまるゝ君も千年の秋やへん此長月の菊のきせわた

御ふれひなりければ、御壽命をいのり奉りて

ことしとしより千年をかけて松の尾の神にいのらん君かよはひを

九月十三夜

かしこしな雲のうへなる長月のそらよりめくむ月のさやまめ

雲晴れて雲のうへなる長月のつきのみかけをあふくかしこさ

長月の月のかつらも露しもにそめてやこよひてりまさるらん

北野天幡宮にまうで、

みやこなるたひのころもてはる〳〵ときたのゝ神をあふくかしこさ

嶋原へ行て

出口なる柳の糸にひかされていとゝたちうきしま原のさと

田家月

嶋原や出口の柳いとまあらは又もよりこんわれなわすれそ

いねかてに君はみるらん山田もるいなはのなみのよるの月かけ

ふる里へかへるとて御名殘をしみて

をしめとも身はわけられぬ雲のうへに心はかりをのこしてそゆく

ふる里へかさねてゆかん九重の庭の千草の花のにしきを

石部の里なるより子の君のもとへたちよりてよみてまゐらす

よそにひく音をきゝてもつまことのおよりこひしき君の面かけ

かへし

ひくことのおよりこひしといふことはまことにあらぬ君がそらこと　より子

又

そらことゝおもふはおろかひくことのこひしといふはまことなりけり

より子の君のもとより、人々にいさなはれて、みかみ山にのぼるとて、横田川をわたるとて

よこた川名にもにすして流れ行水はすくなるものにそありける

龜かふちといふかふちにて

君をおもふ心はふかき龜かふちよろつ代までもあせしとそ思ふ

みかみ山にのぼりて

昨日まて雲井はるかにみかみ山けふはのほりてあふくかしこさ

かへりきて又もあふみのみかみ山やまもる神をたのみつゝ行

茶屋なるたをやめにまみえて

おもはすも君にあふみのみかみ山みすはおもひもまさましものを

めくみあらは又もあふみのみかみ山年へぬるともわれなわすれそ

かへるとて名殘ををしみて

なみかゝる袂をみてもおもへ君をしむ名殘はふかき水海

かへし

水海の深き心もくみしらてあさせの涙にかへる君かな　より子

久しくとふらひはへらさるに、おりしも都にてたよりを聞て、なつかしさのあまりに、ひで子の君のみもとへよみてまゐらす

おもふそよ君と難波のことはかりわするゝひまはなみのよるひる
たひ衣君しまたはや難波なるあしにまかせてゆかんとそおもふ
夏ころも君もきてみよいらこさきすゝしきなみのよるの月かけ
とふ人もなきさに生ふるそなれ松まつかひもなく年をふるかな
とへかしないらこか崎のそなれまつ千世のふること君にかたらん
もろともにあはれとはみよそなれまつかひもなきさに年へぬる身を
ひく潮のあとよりつもるしらゆきはよせてかへらぬ浪の面かけ
君しまたゆきてからましつの國の難波のあしの名にはたつとも
おりはへて君もかさねよ難波なる芦まにたてる鶴の毛ころも

海邊雪

又ひで子の君のもとへ

寄鶴祝

ある御寺にて高唱といふことを

影高く千世も榮えんあけくれにのりのこゑきく庭の松かえ

久しくとはさりける人のもとへ

とへかしな明暮軒に音つれて君まつ風のふかぬ日そなき

旅宿なるとなりにて、さみせんをひきければ、よみてまゐらす

みつの緒のこゑに心はひかるれとよることかたき老の身そうき

とよみてやりければまねかれて

港屋にて

寄草戀

末にあらはるゝ戀

たをやめのしらへたへなるみつの緒のこゑにひかれてわれはさにけり
こひ風をまほにまかせてあまをふねこのみなとやによるそうれしき
あまをふねうき港屋にひかれきてとけぬそつらきこひのともつな
わけいりていつかむすはんくさまくらうき世のなかの名にはたつとも
いまははやふちさへあせてあさきせにうきて流るゝ名をいかにせん
おもひきや身はうもれ木の末の露本の雫にあらはれんとは

名古屋の里なる紫川にて

春戀

名にしおふ人のむかしをしのふかな紫川のなかれこひしき
梓弓はるやいくはるかそへつゝ君とねの日をまつそ久しき
みぞのゝ里なる草薙氏を

熟田の里なるかち屋をいはひて

萬代に茂り榮えんかしこくもかみのまきけん草薙のたね
こつちもてかなとことはにうちのはすかねはゆ水のわくかことくに

月前擣衣

久かたの月にすみ行音すなりたれかよさむのころもうつらん

秋の富士をよめと人のこひければ

久かたの雲も及はぬ富士の根をいかてかきりのたちのほるらん
たちこむるふもとは霧の海のうへにうかひてみゆる雪の富士のね

四四、いかにせんの巻

—天保十四年—

更衣

いかにせん後のかたみと花の色に染し衣はかへまくもをし
たちかへて名殘もなつのしらかさねひとえにかよふ風の涼しさ

ある人のもとめによりてよめる

暮春鶯

尋ねてもおくにはなにもなむあみたその口もとかすくに極樂

餘花

暮て行春ををしむか日にそひてうつろふ花にうくひすのなく
めつらしな又初花の心ちして春もこかけにたちやとまらん
夏ころも青葉わけきておもひきやかゝる梢の花を見んとは

寄碇戀

おもへともよることかたきあまをふねかゝるいかりの綱しとけねは

冬懐舊

そらみつゝ時雨の雨のふることを思ひ出ては袖ぬらすかな

寄鐵砲戀

音たてゝ戀にあたなるたねか嶋たまにあふ夜もおとろかすらん

寄鬼戀

わけいりて君とすまはや大江山鬼の住家もいとはさりけり

行路花

この本にたちこそとまれ咲にほふ花にはいそく道もわすれて

四五、宮崎の里詠草

—天保十四年—

宮崎なる亀穴の里にて、御亀石を拜みてよめる

かしこしな萬代までもうこかしと宮崎まもる神の亀石

宮崎の里にて

いのりつゝ此宮崎の神かけて君にあふとてわれはきにけり
をと川の音をきゝつゝ來て見れは神さひわたる宮崎の里
昔より音にきゝつゝきてみれは岩うつ浪もたかきをと川
をと川のをとをきゝつゝ來てみれは心もすみてすゝしかりけり
をと川のをとをきゝつゝ浪枕今宵は夢もむすはさりけり

奉納

名にしおふ豐宮崎の神かけて里のさかえをいのることの葉
うつろはてこと葉の花もにほへかし神の井垣のあらんかきりは
いなり山みつのともし火かけふけて月にみかけるあけのたま垣

石原の里なる石座大明神へ奉納

みな人のいのるまことはいはくらの神もあはれとみそなはせかし
名にしおふ此いはくらの神かたく守ますらん里の榮えを

四六、津の國の巻

—弘化三年—

ゆえありて難波のかたへ

津の國の難波のことはしらねともあしにまかせてわれはきにけり

御館の庭の櫻をみて

御館もる世々をふるきの山さくら花はむかしのいろにこそさけ

梅の花をみて

いまも猶むかししのべと難波江にさくやこの花いろもかはらす

難波なるそのよしあしも住の江の神のめくみのほとをこそおもへ

春風にくもりははれてなにはかた霞はうらのけしきなりけり

難波江のあしのかりねのよをこめててむすひしゆめの名殘をそ思ふ

あまをふね難波わたりのあしわけてことも浪路をかへるうれしさ

四七、久かたの巻

—弘化三年—

「磯丸が八十三歳の時折本に書したるものである」

立春

久かたの天のかく山かすむなり神代のまゝの春やたつらん

立春

たまくしけあくるふたみの浦らかに霞わたりて春はきにけり

落水

かとことにひくしめ縄もあら玉のとしをむかへていはふもろ人

雪中鶯

はつ春の松のした井の若水に千年のかけをうつしてそくむ

雪中若菜

けさはやや氷もとけてむすふ手に心も清し春の若水

峯殘雪

さへかへり猶白雪のふる里にこのめはるとやうくひすのなく

木殘雪

かきわけてつめとたまらすしら雪のふるからを野に生ふる若菜は

餘寒雪

春を淺み猶さえかへりきえあえぬ雪まの若なつめとたまらす

ねかはくは花まつほとのなくさめにさくまてのこれ峯の白雪

所からまたき梢の花とみてたをれは袖にかゝる白雪

みよし野の山の春風さへかへり猶ふる里につもる白雪

さほひめの霞のころもたちそめて山てふ山にかけぬ日そなき

四八、鷲の尾山の巻

—天保十年—

天保十年三月八日、遠藤但馬守樣御供をかうぶりて、鷲尾山に登るとてよみ奉る

君か行鷲の尾山の櫻花けふはひとしほいろやまさらん

雨ふり出しければ　鷲の尾山けふわけのほる君かためあま雲はらへ峯のまつ風

めくみあれはつはさもあらて大鳥のわしの尾山にのほるかしこさ

花さかり山の名におふわしの尾のなかき春日もあかすこそみれ

わしの尾山けふの花みの跡とめて又こん春もわけのほるらん

をしまるゝ花さえちりてしけるかな月たにもらぬ庭の葉さくら

新樹

名所春のあけほのといふ題をとりて　名所はいつくもあれと吉野やまはなの雲まの春のあけほの

へたてなくうき世の中は照せとも心のやみは月も及はし

寄月述懐

ひめこまつといふことを折句　ひたちおびめくりあはんとこひころもまつにつれなくつき日へにけり

やむことなき御もとより、位山なる一位の木もてつくれる枝折をめくまれけれは　みちしあれはわけのほれとて位山峯のしをりをめくまるゝかな

友鶴といふたをせめのもとへ　たのもしな年こそへぬれえにしあれはけふより契る千世の友つる

又はつのといふ女のもとへ　名にしおふはつのにおふる若草をあひの枕にむすふよもかな

林呼子鳥　おほつかな林にしけきこゑすなりわれかあらぬかたれよふこゑ

四九、二一　柱の巻

神祇

五十鈴川にて

ふた柱たちてもゐてもあふげひと神ありてこそ身あれ國あれ

たゆみなくかけていのらんひと筋に心たゝすのもりのしめ縄

うけえたるわかたまかきをみかきなはよその社の神もまもらん

つきせしな世々ふりぬとも水かきのうちのみ神のふかきめくみは

これやこの天のしたなるふた柱たちてもゐてもあふけもろ人

萬代にくむともつきじいすゝ川神のめくみのかきりなけれは

かしこしなわかみなかみも五十鈴川遠き流の末をこそくめ

ねかはくは心はほそく長くもて心ふときはわさはひのもと

なにふそくなき世の中にうまれきてたらぬはおのか心なりけり

手にとれず目にもみえねと天地をうこかすものは心なりけり

心から人は神にも佛にもなせはなる身をしらぬおろかさ

何ふそくなき世の中にすみなからたらぬはおのか心なりけり

人はみなたからの山に住なからたらぬたらぬとなになけくらん

○

ある人福の神をむかへる歌こひければ

たることをしれはその身かふくの神たることをしれたることをしれ
ふく德は心のうちにみちのくのこかねの花のさかぬ日そなき
おのつからたからのあめのしたなれはふりかゝるらん身に餘るまて

五〇、くもりなきの巻

落葉似時雨
寒草
寒林孤亭
閑居時雨
遠山雪
炭竈
海邊雪
行路雪
川水
高山時雨

くもりなき空に時雨の音すなりちるか軒端の山のもみち葉
冬されはまれにとひこし人目さえかれてさひしき庭のあさちふ
冬ふかみこの葉はちりてよそめにもあらはにみゆるもりのひとつや
ふりすてゝ世の音つれはのかれても時雨をいとふかくれ家もなし
けさははや雲さえはれてみゆるかな遠のたかねにつもるしらゆき
かゝるとも世にはしられし山たかみふりたてすはみねの炭かま
うちよする浪かとみれはひく汐のあとよりやかてつもるしら雪
たひころもきのふは富士の山にみしけふはたもとにかゝるしらゆき
岩浪の音さえたえてたえたえになかれもあえすこほる山川
高根には時雨ふるらし雲かゝるふもとの里も風さはくなり

人々ふることまなびのものかたりし給ふ夜、時雨のふりければ

水鳥　音たてゝ時雨のあめのふることをまなひのまとにきくもめつらし
雪中千鳥　さゆる夜はうきねわひてや霜はらふ羽風にさはくかもの川なみ
松風入琴　ふりつもる雪をかさねてしろ妙の衣かうらに千鳥なくなり
　　さ夜ふけてわかつま琴のねにかよふ心ゆかしき軒の松風
山居　つれもなき軒の松風いかにしてわかつまことのねにかよふらん
　　山ふかくのかれすむ身の友なれやたにの水音峯の松風
　　水の音松のあらしを友としてすめはすみよし谷のかくれ家
ある人子の出來る歌よみてよとありければ
　　ねかはくはいのれはゝ木々そのはらにはらめる種を神にまかせて
心　はゝ木々のそのはらにまく種なれは出んことはあらしとおもふ
寄松戀　姿こそうつりゆくともかはらすにあらまほしきは心なりけれ
　　たちよりてこかるゝ袖はしくれても色さえつかぬ松のつれなさ

五一、もとの淵の巻

天龍川のあれけるとて歌よみてよとありければ

もとの淵もとの瀬をゆけひと筋に水も道ある御世をまもらは

まさもち主妻むかにんとて、ほき歌よみてよとありければ

この宿にけふひくま野の姫小松君と千年をかけて榮えん

なく書はくたくしけれしるさす

かへし　君ならで誰かとはまじ夏來てもほとゝぎすたに鳴ぬ山里　種比子

ほとゝきすきかまほしさに尋きてこと葉の花をみるもめつらし　嶺石

樹陰蟬　涼しさは露さへ深き梢より亂れて落るの蟬もろ聲

山家夏月　吹風に雲さへはれてみよしのゝ花の跡もる月のさやけさ　嶺石

山のしけき木かげにたちよれば心涼しき蟬のもろ聲

夏ところもけふきてみれば山里は木の間よりもる月のさやけさ　同

村雨の露もまたひぬ木の間よりもれてすゞしき蟬の聲々　種彦

汲てしれ夜なくく月の影とめて涼しさまさる山の井の水　同

かへし　千とせども限しられす動なき鶴のひなちの山の下いほ　種彦

また　千世かけてしめてしなれは君もとへ鶴のひなちの山の下庵

君ませは鶴のひなちの山もとにけふよりちよもかけてとはまし

ちよかけて君はきくらむ名に高き鶴のひなちの山ほとゝきす　種彦

ちよかけて來まするいへば足引の山ほとゝきす一聲もかな

君なくばいらこか崎による波の音も雲井に聞えさらめや　同

又　恥かしないらこか崎による波の音にのみたつ名をいかにせん

伊良湖崎おとにのみたつ波ならば世にはかくまて聞えましやは　種彦

かへし　おもふとちあかぬ圓居は入相の鐘さへうきに蜩のなく

日くらしの聲な恨みそみしか夜のあけぬともふしあかす語ん　種彦

又　香にゝほふ宿の軒端のたちはなをとはて過にしむかしをそおもふ

とひ來ます君かこと葉の花なれや匂ひいやます宿の橘　同

又　しのふとも過しむかしはかひそなき花橘よ末を契ん

いぶせくも花橘に宿しめてとはぬ昔をなくさめよきみ　種彦

又　さらぬたに露けきものをたひ衣ほすひまもなき五月雨の空

我せこか千代さかけつる橘は二葉なからもたのまるゝ哉　種彦

又五月雨のいたく降ければ

かへし　君ならは折つゝたかむ庭のまつしはしは露の袖もほすかに　種彦

旅郭公　ほとゝきす哀れとひきてなのるかな草の枕の夜半の寢覺に

納涼

吹かよふ木の下風のすゝしさにたちそかねつる衣手の森　種彦

寄雨戀

稀にたに逢夜は月もいとはれて雨の夜な〳〵來ませ我せこ　同

かれすなく宿としきかは郭公たひの衣や幾夜重ん

立よれはおもはす露もいとふ哉秋すゝしき松の下風

はれやらぬ雨雲よりも戀しくていとと重る我思哉　同

磯丸君の山住へものせし時

神も猶君か船出は心して波はなたてそ天のたつ川　種彦

加へし

惠まるゝ君かこと葉に神かけて天の龍川安く渡らむ　種彦

おなし時

日數ふる天のたつ川早けれは歸る袂に波そかゝれる　同

秋葉へものしたまふ時

道のへのさきくあれやと浦川の波のしらゆふかけていのらむ

かへし

今はまた名のみなれども秋葉山登る心や涼しかるらむ　種彦

秋葉のやとりへおくる

いかはかり涼しからまし夏衣秋葉の神をかけてのほれは　同

かへし

たのもしな君かなさけの言の葉を秋葉の神もかけや守らむ

かへし

月もよし露のおきゐの涼しさに君のあたりをおもほゆる哉　種彦

磯丸君歸り給ふうれしさに

のほりこし此神山のあけくれはたふときのみそことの葉もなし

わかことくなれもや君をまつむしのなきこそあかせ宿の草むら　種彦

吹風のたよりにきくもなつかしなわれまつ宿の松虫の聲

ふく風のたよりもかなとなかめても霧さへ山をかくすつれなさ

いを安く今宵こそねめまち〳〵て幾夜か夢もむすばさりしを　種比古

情ある宿にかへりてわれも猶今宵は安く夢やむすはむ

こゝもまたわかふる里の心地してなさけのほとに日數へにけり　種彦

われたにもはうき里をあかて猶日數へにしといふそうれしき

出る日も天雲おゝひかくせかし明なは君のたちやかへらむ　種比古

わか宿は遠つあふみの遠くとも月雪花にととひ來ませ君　同

かへし

出る日によし雨雲はかけすともをしむ涙に空やくもらむ

遠くともとはんとそおもふことしより月雪花のをりをすくさて

霧深く立のほれるな、高根よりみやりてたちこめて麓は霧の海なれやのこる高ねは波のうきしま

五二、いかばかりの巻

霜月十日餘一日、鳳來寺にまうてて

いか計心すむらん山たかみ御法の水の流くむ身は　滿獻上人

あけくれにのりの流はくみなから心の水のすむ時もなし

かへし

いかてかくすまぬ心と朝な夕なれの鏡にうつしてそ見る　同

十二日おくのいんへ登るとて、道のみへはかちかたければ

みえぬかなみのりの道もおろかなるむねにまよひの雲し晴れねは

あやうさもわけしみのりの道なれは佛のかこにまかせてそ行く

御寺につかえまつれるみ子たち歌、よみてよとこひ給ふに

たのもしなかかる御寺の法の井の清き流れをむすふゆく末

伊良湖の里なる真良うし始て竹の扉に訪ひよりて歌よみて出されけるに

もろともにすめる伊良湖のさと人もいさここの中のこかねとやみん　湛獻

御かへし

衣手にかけてみんとはおもひきやのりのこと葉の露の光りを

同時に鐘の音を聞て

まよひぬる夢さませとやあけくれにひゝくみのりの山寺のかね

又

山たかみかゝる御寺の鐘のこゑ聞里人はゆめさますらん

夢の世をつきをとろかすかねのねもよそにのみきく人のおろかさ　湛獻

かへし

新域の御家中岩田氏の御許にて、はかま着の歌よみてよとありければよめる

けふよりは君につかふる始めとて着ますはかまのすそもゆたかに

白雲てふてきものの治る歌をよみてよとこひ給ふに

心あらはは（五）らえまつのせ人草の緑にかかるみねのしら雲

浦千鳥

人草のみどりにかかる白雲をはらえたかまの原の神風

野初雪

日にそへて浦かせさむくなるみかたゆふ波千鳥たちかへり鳴く

村千鳥波のよるよる風さむみ衣かうらにたちかへりなく

かり衣うらめつらしなあさちふのかれ葉にかかる野への初雪

寄竹戀

くれ竹のよことにものをおもひ出て露のおきふし袖そぬれける

吉田の御城内松平氏の許にて、御常座にて

水鳥

霜はろふ羽音も絶へて波枕をしやうきねの夢むすふらん

雪

きのふみし姿もけふはかはるまて鏡の山につもるしら雪

關路雪

冬ふかみあくまて雪のふりしきて波にそつつく川口の關

雪

ふる雪に心なき身もゆきやらてしはしとどまるあしからのせき

浦千鳥

心あらはきてもみよかし白妙の衣の浦につもるしら雪

ある人、弓のあたる歌よみてよ、とこひ給ふに、

ひと筋にかけていのらはあつさ弓石に立つ矢もありとこそきけ

豊橋の元近ぬしの許にて、川の落葉といふ題を

大井川木々のもみちの流れきてあやおりかくる瀬々の岩波

橋上霜

もろ人の渡りと絶て橋の上におく霜しろし夜やふけぬらん

遠江國濱名の橋本の里なる何かし許にて、濱名の橋の歌よみてよとありければ

くちぬれとたかきその名はよよかけてのこるはま名の橋本の里

又關路雪といふ題を

戸ささねと心そとまるふる雪に清見の關のあけかたの空

海邊雪といふ題を、たかしの濱にてよみてよと人のいひけれは

松かせの音はたゆみてよる波のたかしのはまにつもるしら雪

西村氏の御許にて、海邊の雪といふ題を出されければ

さす汐のひかたにつもるしら雪はよせてかへらぬ波かとそ見る
ふりしきて岡も渚も白妙の雪にそつつく袖のうら波

寄煙戀

こひしなんけふりとならは及ひなき雲のうへにもたちやのほらん
くらへみはいつれまさらんあさま山絶ぬおもひにもゆるけふりを
朝な夕なたゆるまもなくもゆれともむねのけふりは人もとかめし
我戀は鹽やく海士のわさなれやむねにけふりのたたぬ日そなき

かへし　目に見にへぬ烟はさらにたのましよかことはかりのおもひなるらん　美石

又
もらさしとけふりたてねはめにみえぬ思ひのみこそしるへなりけれ
人よしれけむりたてねとむねの火のきゆるはかりにおもふ心を

貞良ぬし故郷へ歸り給ふに　遠江たかしの山の松の葉のかはらぬいろを心とはしれ　美石

かへし
松の葉のかはらぬ色を心にてたかしの山にたちかへりこん

人々歌よみてたまはりければ
磯千鳥とほつあふみの波の花つはさにかけてかへる嬉しさ

老戀といふ題をとりて
戀衣そめあへぬまに年をへて糸のみたれそくるしかりけり

久戀
こかれつゝ長き月日をこゆるきのいそのあはひのたくひとはしれ

霜月廿日餘、白須賀の里なる夏目氏の別莊より、富士の山の見にけれは
うらやまし富士の高ねを我ものとみるらん君の庵のあけくれ

高き松ののありければ
ふかみとり常磐かきはの蔭しめてさかへそしるき松の下庵
ちきりおきてけふより千代の月雪にとはは君かまつの下庵

貞良ぬし雪のふりける日かへらんといはるるに　ふりはへてとはんまてこそかたからめ友まつ雪にかへるへしやは　みかまる

戌の霜月末つかた、雪のふりける日かへらんといはるゝに
とふ人の跡たにをしき庭の雪をふみわけてゆく人もありけれ
ふりはへてとかんまてこそかたからめ友まつ雪にかへるへしやは　三か丸
とふ人の跡さへをしき庭の雪をふみわけて行く人も有けり　同
たひ衣かへる袂をいかにせんふりすてかたき庭のしらゆき
いらこ崎ささくあらつは年をへてあひみぬ君にけふあはめやも　龍丸

五三、する墨の巻

三河國大野の里わたりなる、硯川といふ川の邊にて人々つとひて、歌よみ給ふにわれもいざなはれ行きて
する墨の硯の川にかき流す言葉の花の波やたつらん
かき流す硯の川はいかばかりこと葉の花の波やたつらん
ある時季鷹翁をとふらひて　世々かけて君はくむらんかも川のかきりしられぬ清き流を

歌仙堂の歌よみてよとありければ

けふよりは千世もさかえん言の葉の道のしるへと祝ふやしろは

三河の磯丸に始てあひしに、あすなんかへるときゝて　あひみるをけふのみかはと思へともたちわかるゝはわひしかりけり　季鹿

かへし

くらき夜にからすの鳴こゑを聞て　めくみある加茂の川波たちかへり又のあふせをいのる神かき

ふくるまてねくらもしめす山からすおのか心のやみになくらん

ある人旅れし給ふに　住わふる海士のとまやに波枕きみも今宵はものうかるらん

若の浦にて　年をへてふたゝひ和歌のうら波をかへりみんとは思ひかけきや

磯丸ぬしのふる里にかへり給ふに　いとはすは又もとはなんむくら生ふる賤かふせやの道わかすとも　重行

かへし

ある翁のみもとにとふらひて　道しあれはよしやむくらは生ふるともわけてとはまし君かいほりを

磯丸大人を祝ひて　わけいりて見るよしもかなおくふかき君かこと葉の花のはやしを

かへし　ことの葉の名の高砂の松なれやむかしも今もいろはかはらす　重純

旅へたつとてよめる　高砂の松に契りて祝ひつるきみか言葉に千世もさかえん

旅の宿りにて庭の櫻をみて　たひ衣けふたつ袖はうすくとも錦重ねてたちかへりこん

契りおきて又こん年も山櫻花の盛にとはんとそ思ふ

かへし

又

浦春望　かくばかりさける櫻の花みれはとはて過にしことをしそおもふ

ある人子のさつかる歌よみてよとありければ　いく春もあかすとえかし我やとの花のいろかはよしうすくとも　くに子

見ても猶あかぬものゆゑ山さくらさくこの本にけふもくらしつ

たひ衣なれし名殘のおしまれてたちかねつる花のこの本

のとか成ころもか浦を見わたせは霞の袖にかゝるしら波

京都芝山殿にて、千年までもとあふき奉し君の御筆ものをいたさきて　みひとつはむすふの神にいのれかし花の盛は常ならぬ世に

又よみて奉る　見ても猶かゝる惠の深きゆゑ袖こそぬるれ水くきの跡

夏の日、磯丸ぬしをうたゝねの夢にみて、さめつるをりしも久しくなといひてきたりけれは　てる月は雲にかくれてわけまよふやみちの露の身をいかにせん

かへし　あふとみし夢をも夢になさしとやさむる枕に君そきませる　宣信

ある時金毘羅さんへまうでんとて、須摩の浦にてよめる　情ある君か心のまことより夢もうつゝになりやしつらん

古城にえよめる　たひ衣たちよる袖にかゝるかな昔を忍ふ須摩のうら波

須摩寺にまうでて　わけくれは露そこほるゝもののふのむすひし夢のあとの草村

しのへとや青葉の笛のねをたえてのこる若木の花のひともと

ひと木のみ老せてのこるち子さくら花に昔の春をとはゝや

舞子か濱にて　うちはやすこれや舞子か濱ならん波のしらへに松風の音
淡路嶋を見はたして　名ところの須摩や明石のほかに又なくひも波の淡路しま山
明石の浦にて人丸明神の御社にまうでゝ　ことの葉のことしけければわけまよふ道を明石の神にいのらん
手枕の松　下露にかたしく袖はぬれぬともひと夜ねてみんたまくらのまつ
高砂の松の本にて　この本に落葉かく身も千世や經ん名も高砂のうらの松かえ
石の寶殿にまうでゝ　神代よりうこかぬ御世のためしとてつくりおきけん石の御やしろ
高砂のうらより、船にのるとてふな人、親の歌よみてよと乞けれは　さぬきかたおくりむかえの神かせにいとなみやすく渡るふな人
ひゞといふ嶋に船をよせて、ひと夜波の枕をむすぶとて　里の名のひゞに湊はかはれともおなし波まにうきねをそする
金毘羅の御神の御社にまうでて　ひろ前にたむくるぬさのさぬきかた浦々かけてよするしら波
屋嶋へ行て　ひきつゝき治る御世は梓弓やしまの波もしつかなりけり
いのり石　ありそ海の波々ならぬもののふの心や石にいのりおくらん
駒たて石　たちよれはみぬ世のこともしのはれてこまたていしに波そかゝれる
つぎのふの御はかにまうて　世々かけて高きその名をつぎのふのかゝる御はかをあふくとふとさ
へびのゆめを見しとて歌よみてよとありけれは、へびのゆめといふ五もじを句の頭におきてよみて御神に奉る
川　螢　へたてなくひかりのとかにのも山もゆきわたりたるめくみをそ思ふ
蟬　う治川やせゝの螢はいかにして浪のよる〳〵もえわたるらん
旅宿にて朝顔の花をみて　かくばかりはかなきものと思ひてやよをうつせみのねにはなくらん
海邊夏月　めつらしなくさの枕のうさもいまわすれてむかふ朝かほの花
野夏草　久かたの月のみふねのほの〳〵と波にうかへるかけの涼しさ
蓬か嶋にて　このころはふかくそ茂る夏草にわけこそまよへ野へのかよひ路
たつねてもひと本たにもなきものを何をよもきか嶋といふらん

五四、君かすむの巻

君かすむ伊良湖か崎は遠くとも折々浪のをとつれもかな　（夾名）
○　遠くとも浪にまかせてあまをふねきみかみきはによらんとそおもふ
かへし　梓弓いらこの崎のほとときすけふはつこゑをきくそうれしき　長秋
○　はつこゑと君はいへとも年を經てなきふるしたる山ほとときす
かへし　そよそよと千年をかけてわか方にふきかよへかしまつのした風
そよ子の君のもとへ

涼しさは松の下風そよそよとちとせをかけてふきかよふらん
おとめ子によみてまゐらす　ひめこまつ榮えをいはふことのはを千年經ぬともわすれすもかな
龍田といふ乙女によみてまゐらす
秋の色のふかきなりゆく龍田ひめもみちの錦おりかさぬらん
八十六賀　八十せあまり猶むつましくわたりこし君は千年の坂もこえなん
ある人夜おひやかさるとて、歌よみてふとありけれは
ひきとめてゆるすなよ夢おとろかすおのか心のこまのたつなを
旅行女郎花　たひころもひもゆふくれのをみなへしなひくすそのに宿はからなん
野露　わけゆけは草のたもとにかかるかな紫ふかきむさしののつゆ
四月朔日の日の朝、郭公を聞て
おりはへてけふたちそむる夏ころもうらめつらしくなくほとときす
ある御方より團扇を御惠み給ふ
めくまるることそ嬉しき身につもるうき世のちりをうちはらへとて
照射　みにむくうものともしらてあはれかく鹿やともしのかけによるらん
新樹風　しけりあひて照日ももらぬ木の間より咲きくる風そ涼しかりける
このころは照る日もよそに夏こたちしけるこのまの風のすすしさ
とりちりて花の名殘もなつ山の青葉にかよふ風のすすしさ

菅沼松仙院様、こその秋みまからせ給ふと聞てよみて奉る
五月雨　武藏野の月にとはやこその秋くもかくれにし君のみかけを
かきくもり日數かさなる五月雨のふるき軒端はくちやはてなん
わけきても君ゐまさねは武藏のゝゆかりのつゆに袖そぬれける
高嶺　あふきてもあふくにたかき久かたの雲より上に見ゆる富士の嶺
上野にまうてて　ゆきてみん櫻咲きちるはな所秋も千草の花のうへ野に
車坂にて　世にたかき上野の法の車坂こころひかれてめくり來にけり
忍岡　しのはすの池のはちすの花みつつ君は忍ふの岡にすむらん
庭虫　夜もすから庭の千草のねをたえすたれをまつむしなきあかすらん
芝山國典君の御短冊を、ある御方へささくるとて
夏戀　ちりてこそ袖にもとまれ九重の雲の上なるやまとことのは
寄夢戀　契りてもうすきえにしの夏ころもうらみかちなる戀もするかな
ある御方より劍術といこさを、よめとありけれは
寄刀祝　あふとみし夜半の枕の夢さめてのこるは袖の涙なりけり
武士のさすか刀のみをみかきおさむるためのわさことそこれ
御世を祝ひて　たちはさや弓は袋におさまれる御世のさかえはかきりしられし
あふきてもあふけもろ人四方のうみ八嶋のほかもなみたたぬ世を

雨後夏月

夕立のなごりの露のたまささにやとれる月の影のすすしさ

五月廿日あまり八日、菅沼様の御館にめされて、よみて奉る

おもひきや君にめされて及びなき此の高殿にまどゐせんとは

川ひらきのまつりの歌よめと、おほせことかうふりて、川ひらきといふことかくして

川浪のかかるのみかはひらきちるはなひのかけも涼しかりけり

又花火の歌よめと、おほせことありければ

水清みそこも見えて川かせにちらす花火のかけのすすしさ

數おほきともし火みて

浪の上に數々うかふともし火はそらにしられぬほしかとそみる

かしはもち、を御惠給ふとて、かしはもちといふ五もしを折句歌によめと、おほせことかうぶりて

かみかきやしらゆふかけてはらひますもりのさかき葉ち世も榮えん

むしの病をはらふ歌こひ給ふに

千世ふへきすくなる竹のこのきみにわさなすむしはあらしとそ思ふ

菅沼様御拜領の御馬の鞍と鐙に松と鶴壽ありとて、一首のうちによめとおほせことかうぶりてよみて奉る

君かめす駒のくらなるあふみまてまつの千年をいはへつるの書

みな月十日あまり三日、新見伊賀守様若殿様の御ともをかうぶりて、御下屋敷へ行て、御處の池に松かけのうつれるを見て

涼しさはきしの松かけうつり來てこすゑをこゆる池のささなみ

水清み池のささ浪よることに月のみふねもすみわたるらん

御館もる君はみるらん高田なるいなはの浪のよるの月かけ

夏の夜、磯丸とともに樓殿に月見つつ、歌ものかたりしてよめる

まれ人の歌のしらへもたかとのに月見る宵はすすしかりけり

正路君のよみてたまはりければ、いたゞきて御かへし　正路

思ひきやあふくにたかき高殿にめされて君と月をみんとは

高殿にともし火をかゝけ給ふに

よそめには月とやみらんあきらけき此高殿の窓のともし火

長島君より琴の糸を給はりければ

むすへとてめくまるるかなつまことの糸よりかくる長き契を

みこたちによみて奉る

いはふその御館のこまつ千世かけてかけもみさをもたかくさかえん

又高殿にてよみて奉る

さやかなる此高殿の月見つゝ君はすむらん萬代までも

ある方より、水れんをえる歌よみてよと、いひ給ふに

そこしれぬふかきふちにもうかはまし水にうき木の龜にならはゝ

長島君を祝ひて

名にしおふよはひもさそな長嶋のきみか榮えは久しかるへし

夕　立

雲かかる山しなければむさし野のはてなきそらをすくる夕立

かきくもりあま雲ふかくなる神の音にきほひてふれるゆふたち

遠近の山路すき來て時のまにふるさとすすしゆふたちのあめ

里夕立

松風似秋
扇風近秋
蜩

涼しさはさなから秋の心ちしてなつをわするる松のした風
手にならすあふきの風に秋ちかきほともしられてすすしかりけり
すすしさは稍ふきくるゆふ風にみたれておつる日くらしのこゑ

よしまつ君と、名もじ句のかしらにすへて

よもの神しらゆふかけてまつりますつき日の影に君そさかえん
さくらさくたかをの山のゆふけしきてもみなん君をこそまて
をくら山かゝるたかねのはな盛まつ人のためちらすもあらなん

さたゆき君といふことを
をかはまち　折句
あるし山吹をめてたくよめと、こひ給ふによみてまゐらす

世にめつるこかねのいろにさけるかなやとのたからの山ふきの花

みな月十四日の夜、新見様の高殿にめされて月をみて

高殿にのほりてみれはてる月のかけもくまなきむさし野の原

五五、玉藻集草稿

「稿扉に左の文あり」

國風編曲千首月色煙波靜藻傳
英氣凌雲君莫恠蜃樓海上歌仙

贈糟谷老人　竜淵明

「左の長歌は卷末にありしが拔に載す」

雲母山人　松崎明

贈玉藻集於糟谷大人作歌一首

すたかわたる、いらこか崎にならひうき、鰹魚つり舟今もなほ、沖に行かふかけをみて、そのいにしへをこ
との葉に、ならふか中に糟谷なる、氏の翁はうらやまし、いにし年かも九重の、花の都にことの葉を、きこ
にあけつゝなにかしの、君にめされてかしこくも、道のをしへをうけつたへ、その名もともにかくはしく、
このころかつて鳥が鳴、東路とほくことの草の、みちをひろめてもろ〳〵の、國の岩ふりたまものゝ、かす
〳〵たへていちしるき、ほまれも道のひかりかも、そのかへるさに讓葉の、園にしはしとたちよりて、よみ
つらぬつるひと卷は、世にもめてたきことの葉や、家のたからとひめ置て、かしこくもひらきうれしくもみ
む。

神無月十日あまり六日磯丸大人とはれけるに鶯の鳴ければ

鶯の鳴すはしらですきなましかゝることはの花のはやしも

かへし

まれ人のとふにつけてや鶯もことはの花をたつねきつらん　明

ことの葉の花の林にたちよれは冬ものとけき鶯の聲

かへし

霜かれぬことのはの花をたつねてやさゝ鳴わたるそのうくひす　明

宿とひてねくらしむるかくれ竹のよは冬なから鶯のなく

かへし　　明

鶯の鳴音もにほふことの葉をけふめつらしくきくそうれしき

兼題　鶴　　瓦彦

友鶴のあとをしるへにとめゆかんたちなへたてそわかのうら浪

君か代のなかゐのうらにあさりしていくよかさぬる鶴の毛衣　　訓昶

きみか代のゆたけき空に舞ふ田鶴はさぞな心ものとけからまし　　明

千世よはふわかのうらわの友鶴のよはひもなかくかたりつかはや

當坐　麒麟　　明

もろこしのひちりのみ代はむかしにてみ國にいてよたけきけたもの

鳳　凰　　明

くれ竹の實をはむ鳥はからやまとめてたきみ代に鳴わたるらし

亀　　訓昶

よもの海浪もおとせぬみ代にあひて亀もよはひやいとゝのふらむ

龍　　瓦彦

わたつみのちひろのそこの玉をしもひろひあけてやそらかけるたつ

殘紅葉　　良彦

そめ〳〵し露より後のしぐれまて松のこの間にのこるもみちは

はれくもりしくれのそめし色なからしたてるはかりみゆるもみちは

吹かせもさはらぬ宿としられけり冬さへふかくのこるもみちは　　訓昶

夕日かけさすむとみればしくれ行雲間にのこる峯のもみちは　　明

ゆつる葉園をとふらひて　　訓昶

友鶴の聲をしるへにとひよれは千とせをかねてしめさしゝやと

おんかへし　　明

とも鶴の千と世をよはふ聲きけは宿のさかえもたのもしき哉

又のあした鶯の鳴けれは　　明

鶯もこゝろありてやことの葉の花のはやしを過かてに鳴

おんかへし　　明

過かてに鳴鶯はことの葉の花の色香をいかにとむらん

磯丸大人と明かよみかはす鶯の歌をみて

冬なからことの葉の花のにほふとは誰うぐひすにつけやしつらん　　訓昶

おんかへしに　　訓昶

色もなきわかことの葉をかことにて冬の園生にきなくうくひす

當坐　松風入琴　　明

君をけふまちしかひある松かせやひくつまことの音にかよふらん

さよ更てわかつまことの音にかよふあやしきものは軒のまつ風

磯丸大人とうたのものかたりのつひてに　　明

そなれ松そなれて千世もきかまほしいらこか崎の友鶴の聲

おんかへし　　明

そなれ松まつとしきかはわかの浦にあそふ友鶴とくとはましを

又　　明

いらこ崎岩ねの松にゐる鶴の千世のよはひをのはへてよ君

かへし　　明

いらこ崎岩根の松にいはひつる君かことはに千世もさかえむ

護葉園にてよ　　訓昶

ふふかくにほふことはの花園を心なしとてよそにやはみん

かへし　　明

あさからすめくむことはの花の香をふかくそおもふ庭の千草

當坐　名所殘紅葉　　明

あらし山さそひつくしてたゝひと木ふもとの里にのこるもみちは

もる山の梢をみれば神無月しぐれ〳〵てのこるもみち葉

弓弦葉園を祝ひて　　明

返　し　　明

むかしよりいやつき〳〵にゆつるはのそのゝさかえはかきりしられす

親方君とふらはせ玉ひて、磯丸大人とうたのものかたりし給ふを、かたはらにきゝなりて　　明

ゆつる葉にことはの花の香をそへていやつき〳〵に千世もさかえむ

わかのうらやおなし渚の友鶴の千とせの夢をきくそうれしき

友鶴といつしかなれて若浦のおなし渚にあそふうれしさ

かへし　　明

あひおもふ心はかりをかよはせてえもいひいてぬ中そくるしき

當坐　互忍戀　　親方

萬代もうこかぬみ代さとこしめてくちぬ巖に亀はすむらむ

寄龜祝　　親方

月出山　白雪のつゝれるみねをてらし來て光もさむき山の端の月　明
初逢戀　わけそめてまたはつかなる若草をわか手枕にむぶうれしさ　親方
川寒月　まはらなるこの間より來て谷川にうつるもこほる山の端の月　明
松風　まれ人をひきとめかほに琴の音にかよふもうれし庭のまつかせ　明
十八日當坐　寒草　うつり香はわすれぬのへのふちはかま霜の花さくよはそさむけき　明
　なみなへしなまめく色も霜枯て鹿のたちとにひとりふしけり　明
折句みつかゝみ
冬ふかみまれにとひこし人めさへかれてさひしき庭のあさちふ　明
　みめくみのつきせぬみ代はかしこしなかみのみわさの道もさかえゝ
磯丸大人にわかるゝとて
みそき川つみもさはりもかけなかしかみや心にみちやまもらん　明
かへし　七十にちかきいらこの島人よかへさにいとへ八重のしほかせ　明
又　あまころもかへるたもとの汐風も君かことはに吹やたゆまむ
かへし　ことの葉のちきりたかへすわかの浦のしほ〳〵たちもよらなん　明
又　あま小舟わかのうら浪へたてすはまたいくたひもよらんとそおもふ
かへし　ことの葉の玉たたもとにつゝみおきてまたあふまてのかたみともみて　明
○　はつかしなかゝるみきはにかきすてゝちりのことはをのこしおくとは
かへし　音にきくいらこか崎による浪のなみ〳〵ならぬ名をやたつらん　眞彦
いらこか崎にかならすとひてよといひけれは
風わたるいらこか崎の松かえに涙の花さく春はとはまし　明
かへし　いらこ崎かひはなしともそなれ松浪の華さく春はとへかし
○　ことの葉のひかりやかはすゝら人のかきもつ〳〵さぬそこの玉もに　明
かへし　いらこ崎みるめも浪の下草をいかに玉藻と君はみつちむ
○　玉藻かるいらこか崎に舟よせて道の光をいつかとはまし　明
かへし　こきわたるわかの浦舟さをさしていらこか崎によるをこそまて
又　いらこ崎月のみ舟にさほさしてすたかのわたるころそとふへき　明
かへし　いそによるかひはなしともいらこ崎月にとはなむ松のしたいほ
○　みやひ男のやとりは花もにほふやと朝宵さらす鶯のなく　明
返し　色もなきわかことの葉に心ありて鳴音そふるかそのゝ鶯
雲母山人の長歌をよみて給はりけるか、いとかしこけれは
年へぬるいらこか崎の磯馴松まつにかひある君かことの葉
こと玉の神のみたまの玉かつらなかくわかやにもてはやしみん

五六、たふとさの巻

神祇

たふとさは限り知られしあめ地をあまねく照す日のおほみ神

五十鈴川にて

かしこしな我かみな上も五十鈴川遠き流の末をこそくめ

寄鏡祝

朝な夕なみがく心のます鏡くもらぬみ世にすまんとおもへは

寄道祝

いそのかみふるきむかしの路とめてよよにさか行しきしまの道

述懷

しき嶋の道ひと筋のみしめ縄心にかけて祈る神垣

おろかなる身はいたつらにくらすかな月のゆふべも花のあしたも

のかるへきかたこそなけれあま衣うき糸なみのかゝる袂は

寄芦述懷

うきしつむ身はしら波にくちぬともわかの浦わに名をはとゝめん

寄夢述懷

しのはるゝひとふしもかないたつらに年をふるえの芦の村立

わらはやみになやみしゆへ神に祈し歌

いたつらによそちあまりをわたり來てまたさめやらぬ夢のうき橋

秋の頃野へにわけくれて

あめつちのうこくまてこそかたからめ露のおこりはおとせことの葉

野へにてもくれなは宿をかるかやの葉におく露のみこそやすけれ

六根清淨といふことをよみてよと人のこひければ

みかきなはいつか光はあらはれん心のおくのむつのたま川

寄地祝

神代より限りしられしあらかねのつちの惠みにもれぬもろ人

ある人わらはへ子とものためになる歌、よみすてよとすゝめければ

ちりひちのもとの心をわするなよ富士のたかねに名をはあくとも

冬の頃都にのぼりて雪のふりければ

こしかたの山路はいかにつもるらん花の都も今朝はしらゆき

曉といふ題をたまはりければ（文化八年芝山家にて）

なかめてはものをこそおもへうき人にわかれしまゝのあかつきの空

草まくらむすひかへてもおく露に袂しほらぬあかつきそなき

時雨の亭に行き

來て見れは袖こそぬるれをくら山時雨てふ名のふるき軒端を

京よりおくらるゝ人にわかるとて、逢坂山にて

わかれてはいつ逢坂とをしまれてせきの清水に袖そぬれける

野路のたま川にて

とゝめつるあふ坂山はむかしにて治まるみ代は關もりもなし

鏡山を見わたして

しもかれていろなる波はたゝねとも俤うかふ萩のたま川

鏡山むかふ心はくもらねと年へてうつるかけははつかし

鈴鹿山にて都の名殘を惜しみて

かゝみ山たちよりて見ん名にしおふ花の都になれし姿を

鈴鹿山ふりかへり見てをしむかな都の空のあかぬわかれを
たちよりてものかゝぬ身もしのふかなふてすて山のあかぬけしきを
むかしたれ繪にもかけぬとふてすてゝ山の名高くのこることのは
村ちどりむかしなからの音にたててしかの浦波たちかへりなく
心してはらひなはてそ朝清め路たにいとふ夜の白雪
みよし野の花にそまさる神路山ちもとの松の雪の明ほの
さきそめて春のこなたに鶯のさそひかほなる軒の梅かえ
をしめとも流れて早き月日とてよとむせもなくこゆるとし波
三輪の山名にたつ杉もうつもれて雪社ふゆの印なりけれ
眞柴かる峯のかよひ路うつもれてけふもみ雪のふるの山里
庭もせにつもれかしとはおもへともふるのみ見えてきゆる淡雪
關の戸を夜の間に春やこえつらんけさよりかすむ逢坂の山
けさははや行かふ人もあらたまの春の衣の色そのとけき
いつしかと氷もとけて結ふ手に心も清し春の若水
ふるとしの雪かきわけて初春のあしたの原の若菜をそつむ
さく梅の香にさそはれて白雪のふるすを出るうくひすのこゑ
しめゆひて我待はるの初こゑを外にもらすな園のうくひす

湖上千鳥
庭雪
松雪
年内梅
歳暮
山雪
山家雪
春雪
山朝霞
元朝
若菜
雪中鶯
鶯初音

朝鶯

朝日かけ匂ふ稍にうつり來て谷にのこらぬうくひすのこゑ
窓近きねぐらの竹のよをこめてなくうくひすのこゑそあけゆく
千代ふへき君かためにひくものは子の日の野への小松なりけり
野も山も今をさかりに咲花にうつらふものは心なりけり
たひ衣春の日數もふる里に植し櫻の花やさくらん
春來ぬといはうつ波の初花に鳴音を流すうくひすの瀧
家つとにたをらんものをちはやふる神のいかきの花にしあらすは

子日祝
花盛
春の項旅にありし年
鶯の瀧に行て
社頭花
吉野のおくの櫻木明神へまうで、

咲頃はいかに心のなくさまん吉野のおくのさくら木の神

高野の麓なる花坂といふ所にて

もろ人も今を盛りとわけのほるたかのゝ山ののりの花坂
所から名にこそたてれふく風にちる山吹の霧のたま川
いたつらにさきやちるらんかくとたに岩ねかくれの山吹の花
うつもれて花より外のいろもなし八重山吹のさけるまかきは
おしなへてちりにし路に櫻花心ありてや殘ひともと
あめか下もらすくまなき笠寺のみのりの花のかけやたのまん
しのはるゝ月の都のほとゝとす雲のうへよりもらす初こゑ

井手のたま川にて
歎冬
殘花
笠寺にまうでゝ
禁中郭公

熱田大神宮にまうでゝ

寄龜祝

出る日の光りもそひてのどかなるあつたの社の朱のたまかき

寄鶴祝

實ひとつはならすの梅もむすへかし花の盛り常ならぬ世に

寄松祝

限りなきみとりのふちに住む龜とよはひくらへよ君の行末

寄水祝

龜の尾の山の岩ねの松かえに萬代よはふつるのもろこゑ

寄瀧祝

千代ふへき君のためしにひくものは子の日の野への小松なりけり

寄竹祝

萬代に汲ともつきし岩清水のみのめくみの限りなければ

瀧川豐後守の御殿へめされし時よみて奉れる（文化十一年六月朔の朝）

いく千代もくりかへし見ん龜の尾の山の岩ねの瀧の白糸

陰しめて君こそはみめ葉かへせぬ緑の竹のよゝの行末

思ひきやそこのもくすのこひならてなる瀧川にのほるへしとは

伊良湖崎の濱石を奉とて

さゝれ石の岩ほとならん末までもうこかぬ御世のためしならまし

祝言

君か世は豐坂のほるあしひきのやまと言葉にさかえ行らん

五七、伊勢の家つと（乙）

「磯丸の所藏せし歌集に「伊勢の家つと」と稱するものがある。多くの人の單歌長歌をあつめたるものであるが、こゝには其の集の中から、磯丸に直接關係ある歌のみを採錄することとした」

五十鈴川なみ〳〵ならぬ流汲ひとの言の葉見るもめつらし

糟谷ぬしの訪れけるに、前栽なる芽子の花盛なりければ、庭上萩といふことを題にてともによみておなしぬしにおくる。

わかやさにさくや眞萩の色よりもいとならぬ君かことの葉の花

正五位 下度會神主 正兌（まさとき） 橋村彈正

檜垣の某君のもとにはしめてとふらひける時よみてまゐらせたる歌

あたなりと人なとかめそ此やとの言葉の花ををりによる身を

はる〳〵と尋ねきにけりこの宿のことはの花の見まゝほしさに

このやとの言葉の花のといへる二うたをなみておこせたるかへし

あたなりと誰かとかめむこの本に立よる人のふかきこころを

わたらひのせい子　檜垣十彌宣室

磯丸大人へ

さはるるも心はつかし言の葉の花も匂はぬやとの木すゑを

わたらひせい子

かへし

めくみあれは蜑の袖にもつゝむ哉清き渚の玉のことの葉

弘訓　姓名記上

かへし

榮へゆく限しられし神垣の千えたの杉の陰にすむ君

弘訓

—伊勢の家つと—

さかにはよといはふも嬉し神垣の杉の下枝のかすならぬ身を

浪よするいらこか崎のなのりそのの名のりあひたることそ嬉しき

弘魚

—伊勢の家つと—

かへし　人とはゝ浪のもくつとこたへてよ伊らこか蜑の名をなのりそ

涙の音のなかく聞えし君にけふ立ましるこそうれしかりけれ　彌清（京都人小川孔吉千時在千山田）

かへし　よる浪のあはれとはみよ都人いらこか崎の海士のすさみを

彌清か京にかへるときうまのはなむけによみておくりける　別るとも小川の波の立かへりまたもあふ瀬のかはらすも哉

五八、伊勢の家つと（丙）

五百枝の松千枝杉をよめる　常磐なる御世のさかえは千えの杉五百枝の松のかけにてもしれ

青木君の御もとより、位山なる一位の木もてつくれる枝折を、惠み給ふによめる　めくみあれはわけのほれとてくらひ山峯のしをりをえてそうれしき

風の宮にまうでて　夏ころもひとえにいのる心より風の宮ゐにむかふ涼しさ

河邊の里なる大橋の歌よみてよとありければ　むかしよりわたれる人も大はしのかゝる河邊の里そにきあふ

内宮長官の御もとへ、みて奉る　神か勢に雲霧はれて神路やまたかき御かけをあふくかしこさ

外宮長官正三位範彦公の御もとへよみて奉る　つかへます君そさかえん大神の五百えの松のときはかきはに

大宮の千枝の杉のかけたかく君そつかえん萬代までも

大宮司長祥公の御もとへよみて奉る　あふきてもあふくにたかき名にしおふたかくら山の峯の月かけ

御歌たまはりけれは　あまをふねよせてこそみれ伊勢の海のなみなみならぬ玉のひかりを

秋の月を見るに雁鳴わたる　空の海や月のみふねにほの見えてくものなみ間をわたるかりかね

忍逢戀　もちさしと忍ふの露のふかけれはあふ夜も袖のかわくまそなき

競馬　世の中はかくこそあらめこまくらへのりえても猶心ゆるすな

うし　人のためおいてもおのかみのうしとおもはて世をすくすらん

海邊鹿　夕されは浪にあはれをうちそへていそ山かけにをしかなくなり

くる秋ことにといふ句題　軒端なる松にかゝりてつたかつらくる秋ことにいろそまされる

ふちはかま折句　ふく風もちらさてかよへはなさくらかゝるさかりをまつ人のため

兒玉尚弓主によみてまゐらす　くれ竹のよゝのふる道あとゝめて猶おくふかくふみもわけなん

かへし　くれ竹のよよのふる道わけいれとひとふしもなさゐをいかにせん　兒玉

けさこゝにくれは句題　三笠山けさこゝえくれは春日野に霧たちこめてをしかなくなり

—伊勢の家のと—

船中の月
行人秋花中

あまをふねさ夜はふくともこき行て月いるかたをとまりとはせん
秋の野の千草の花をみやこ人つゆもいとはすわけてとふらん
たひ人のわくる袖さへにほふかな秋の千草の花のさかりは

人々にいざなはれ行て西行谷の瀧にうたれんとて

音たかく聞てし瀧のしら糸をよりきてけふはむすふ涼しさ

寄關戀

うちとけてひと夜はゆるせ下ひもの關守神もあはれとおもはゝ
いとはる〳〵戀といふ題をとりて
ひと筋によりこしものをおもひきやかくまて君にいとはれんとは

夕つかた人のもとへ行て朝顔の花のしほみたるを

おそくきて花にあやなくくれは鳥やとりてもみんあすの朝かほ

京へ行人によみてまゐらす

ほとちかくかへりませ君名にしおふ花の都の錦かさねて

あけほのにからすわたる畫かけるをみて

山からすねくらを出て天の戸のあけぬと里につけわたるらん

あつまに長くものしける人ありとて、故郷へとくかへる歌よみてよとこひけれ

かへりませ君まちかねて鳥かなくあつまの夢はさめさらすとも

な林の里なる、伊藤永賴君の御もとにとふらひて、何くれともものかたりなとしけるに、ほとなく夜ふけぬれは

たつねこしまなひの道のふることをきくまも夏の夜そふけにける

涼しさは雲も霞も夏の夜の月すみわたる天の橋立

くれ竹のひとよへたてゝたひ衣きのふもけふも君をこそとへ

おのつから君はみるらんかと田守稲葉の浪のよるの月かけ

契りおきて又もとはましさきにほふことはの花のを林のさと

を林はことのみしけき里なれはこと葉の花の咲宿もなし

かしこしな千枝の杉の木の本にすむらん君は萬代までも

おのつからのとけき宿はひとゝせに花もふたゝひ咲匂ふらん

元功

我宿のゆづとかれとなまゐらすはかれすとへとの心なりけり

礒丸ぬしにかれといふ魚にゆづをそへてつかはすとて

言の葉をそへてたまはるゆづの木のめかれす君をとはんとそおもふ

かへし

雲のうへ人のことの葉たまはりけれは

ふきおろす風のなさけを思ふかな雲のうへなる山とことの葉

出羽の國なる垣礒うしにかきさき君といふことを旬のかしらにおきてよみてまゐらす

かすみたつきその山路のさくら花きゝをわけてや君はみるらん

山家苔

山里によゝふる霜をかさねても苔のみとりは色もかはらす

時雨ふる夜とふ人あり

むら時雨ふるき軒端もふるさしとぬれつゝ人のとふそうれしき

曉時雨　音たてゝふるは涙かむら時雨老のねさめの袖そぬれける

一木の梢を染わけたるをみて　かみな月おなし梢をうすくこくいかに時雨は染わけつらん

心　そこふかき泉の水ははかるとも人の心はくみもしられし

塩合濱　涼しさは夏をわするゝ久かたの月にさしひく鹽合の濱

たち野の御社にまうでて　ゆふたすきかけていのらんけふよりは思ひたち野の神のゐかきに

磯丸ぬしの古里にかへるときゝて　うら浪のたちかへるとも二見かたふたゝひよする契わするな　・弘訓

かへし　たちかへりまたもよりこんたまくしけふたみの浦の浪にまかせて

うら浪に又立かへりたひ衣きよき渚の貝やひろはん

五九、伊勢の家つと　（丁）

ある年檜垣神主の都へてんにんにのほり給ふによみて奉る

けふよりはつかさ位も名にしおふたかくら山に君そのほらん

伊勢の國にものしける年、足代ひろのり君のみもとにて、たまはりける題七首

梅花飛琴上

花の頃久しくとひこぬ人のもとに　ねにかよふ風こそなけれひく琴のひゝきに梅の花やちるらん

ちりたる花を紙につゝみて人におくるとて　さきしよりまつともしらてとはぬかな花にや君はつれなかるらん

うめのはな　折句　ふく風にちりてもにほふさくら花あかぬいろかをつゝみてそやる

ふちはかま　折句　うら人はめかり汐くみのとかなるはるの海へはなみもさはかす

さつきあめ　折句　ふきさそふちらすそをしき春風のかすみし日よりまちし櫻を

鶴亀松竹といふことをかくして、戀の心をよめとありけれは　さかの山つま木こる身もきくの花あかぬいろかをめてゝ見るらん

戀もするかなといふことを　なかめつゝ人まつ袖のあき風に月もくたけておつるしらつゆ

磯丸大人へまみへて　おもひわひ空なかめてはうきくものゆくへさためぬ戀もするかな

いけに生ふるあやめもわかす分まよふこと葉のみちのしるへせよ君　春藻

かへし　はつかしな何をか君にしるへせんふみもならはぬことの葉のみち

さきつとし、はしめてまみえし磯丸大人に、ことしまたあひはへりて　年をへて君をふたみのうらの名にかけてまちこしかひはありけり

かへし　伊勢のうみの清き渚のたまくしけふたゝひ君にあふそうれしき

富士の山と田子の浦の繪かけるを見て　富士のねの雪のいろなる眞帆かたほかけてそわたる田子のうらふね

山川の魚をあみもてすくふ繪かけるを見て　山川のそこにしつめるうろくつをあみもてすくふ人もこそあれ

鶴と梅と繪かける扇に　かすみたつそらとふつるの羽風さへさながらにほふ梅のしたかけ

磯丸ぬしふる里にかへり給ふに　秋はまた初かりがぬともろともにとひこん君をいまよりそまつ　諦智

かへし　ふる里はこし路ならねとかりころもかさねて君をとはんとそ思ふ

磯丸ぬしの道によみたまひし歌とて、數々見せられけれは　旅ころもうらめつらしなつゝみもて數々見するたまのことの葉　衣の里なる諦智

かへし　すみそめの君か衣のうらにこそなみ〳〵ならぬ玉はありけれ

かへし　いとまあらばまたうちよせよ玉藻かる伊良湖か崎のなみの音つれ　清渚

松年久　あらいその波のもくつもいとはすはまたうちよせん清き渚に

海邊夏月　伊勢のうみやひかりことなる玉藻にはなにといらへんとの葉もなし

新樹　かけたかく年こそへぬれいろかへる松や神代の姿なるらん

すゝしさは夏ともさらにしら浪のよするなきさにすめる月かけ

よる浪にひかりもみちてすゝしさは月にさしひく汐合のはま

夏しらぬ眞砂もしもと見ゆるまてみかくしらゝの濱の月かけ

見し花のおもかけにほふ山の端にしける青葉のいろもなつかし

茂りあひて照る日ももらぬをくら山このしたかけそすゝしかりける

たまたれのをすのひまよりかよひきて軒の青葉の風のすゝしさ

とふほたる玉と見るまて夏草のしけきおもひに身をこかすらん

螢　心あるやあつめぬ窓にとふほたるなれもまなひの道てらすらん

窓螢　まとにとふほたるみてもいにしへのまなひの道をおもひこそやれ

蚊中戀　あまをふね風のたよりもなみのうへにいく夜うきねの數つもるらん

寄月戀　月まつと人にはいひてうき雲のそらなかめつゝものこそおもへ

ある人から歌よみてたまはりけれは　からやまと名こそへたゝれ行かよふ心はおなしことの葉の道

花隨風　をしまるゝ心もしらすやま風のふくにまかせて花やちるらん

急早苗　若苗のふしたゝぬまといそきてやとり〳〵うたふを田のさをとめ

明るよりくるゝもしらす手もたゆくいそきてそとるを田の若苗

夕水雞　柴の戸をまたさしあへぬゆふくれに何をくひなのたゝくなるらん

なつなをよそといふこと折句　なつふかみつゆおきわたすをさゝ原よふかくこえて袖ぬらしけり

をはたにて雨ふり出しければ、又山田にかへりて　けふも又山田か原の過かてに豐宮川もえこそわたらね

西行櫻の本にて　しのふかな咲この本にたちよりて花に名たかき人のむかしを

森といふ所にしるへありければ立よりて

なつかしな住居し人はかはれとも音はむかしの森のまつかせ

足代君によみてまひらす　伊勢の海の清き渚にみかきます玉の光は四方にみちなん

ふきあけて四方にきこゆる君か名はたかくら山の峯のまつかせ

磯丸ぬしの故郷にかへり給ふに　かへるとも又うちよせよなみならぬいらこか崎のたまのことの葉　正帥

磯丸ぬし難波に久しくとゝまりて、此たひ歸るとて、立より給ふによめる

故郷にさこそうらみめ住吉のきしに生てふくさやいみしと　有子

かへし　住吉のきしにゆきてもわすれ草つまねはかへる道はわすれし

磯丸ぬしの故郷にかへり給ふ名殘をしみて　こきよせてほともなみ路にかへるかな名殘そをしきわかのうらふれ　義仙

かへし　いとまあらは又もよりこんあまをふねをしむ名殘のなみにまかせて

岡本の里　さ夜衣つまこふ鹿のなくこえに夢おとろかす岡本の里

河邊里　岡本の里さへわかぬ朝きりにまた夜ふかしと鹿や鳴らん

打越濱　うらすゝし夏さへ浪のよる〳〵は河への里にかよふあき風

夏ふかみ河邊の里の河かせにみたるる玉やほたるなるらん

夕されは沖つしら波うちこしの濱かせさむみ千鳥なくなり

六〇、咲句ふの巻

人々つとひたまひて、高殿の二かいより庭の櫻の咲みちたるを

磯丸うしに對して　さきにほふこのたかとのに見るほとはさなから花の雲のうへひと

かへし　幾春にまれなる君かことのはをさくらや花とまつめつるらん　三橋

日くるれば夜の櫻といふことを　ことの葉も及ぬ身にはさきにほふ花のおもはん心はつかし

雨中の花　さくら花なかめくらしてよるも猶にほふこかけをたちそかねつる

毎日花の本にあそびて　梢よりつたふしつくもにほふかなはなの盛のこのめはるさめ

あるしろすなれば　さきそむるころよりなれてこの本にあくまて花をみるかうれしさ

ほとなくかへりたまへは　さきしよりかゝるさかりをみせはやとさそなまつらん花もあるしを

雨かりけるにかへる人に　庭さくらけふはあるしをまちうけていろやまさらんはなもひとしほ

をやみなき雨もいとはすふる里へぬれつゝかへる君をしそおもふ

から衣つましまつとてふる雨に袖ぬらしつゝ君はゆくらん

彌生の頃、ふとして足をいためけれは、あるしいとねもころに、くすしもていろ〳〵とめくみ給ふに、日にそへていたみも治れは、よろこびて　おれふしゝあしもめくみの露うけてつのくむかことしいまそ生ひたつ

何ことも我身のあしをあしとせてよしと思ひしむくひなるらん
日にそへて生ひ立あしのふしの間もつゆのなさけはわすれやはする
よしあしのさはりもいまはなにはかたふみわけゆかんしきしまの道
しき嶋の道ひと筋を神かけて人をわたさんはしとならはや
王君の世は長はまの眞砂なるかすはよむともかきりしられす
いか計すみよかるらんよのうきめみぬ山水のなかれくむ身は
わすらるゝあふきをみても思ひしれかはるは人の心あきかせ
いろみえぬ心を花の香となしてこひしき人の袖にいらはや
谷川やなみの花さへにほふかなきしのさくらのかけうつりきて
ちるかいま根にもとまらて谷川のなかれにうかふ山さくら花
よく守れ君と親とはわかれともつかふるみちにふたすしはなし
君かためふた葉の小松けふことにひきてそ祝ふよろつ代の春
龜のゐる池のみきわのふかみとりよろつ代までに生ひしけるらん
をしまるゝ霞のころもぬきすてゝ春はいつくにたちかへるらん
難波かたかすみも波にたちかへる春のみなとはいつくなるらん

寄道述懐
御世を祝ふて
山家水といふ題をとりて
寄扇述懐
寄花戀
水邊の櫻
川落花
ある人忠孝の歌よみてよとありけれは
根引の小松の繪かきた扇に
岸にみくさ生ひたる池に、龜のむす繪かきたるあふきに
三月盡

六〇、

やまふきによする戀
寄櫻戀
鶯
年よりたり女のもとへ
八十あまりなる翁のもとへ
首夏藤
庭の新樹の本に、人々つとひて酒たふへけるとて、歌このまれけれは
水邊郭公
夏旅

かくとたにいはねとふかきいろに香に猶しのはるゝやまふきのはな
山さくら霞のまよりほのかにもみすは思ひのまさましものを
明くれに身のおこたりをつくるかないたつらならぬくたかけのこゑ
とかへりのためしもあれは老らくの身にも花さく春をまたなん
ひきつゝき千世もさかえんあつさ弓やそちにあまる人の行末
たちかへる春の名殘にさきそめて夏の梢にかゝるふちなみ
見し春のおもかけとめて青葉なるこのまにめくる花のさかつき
さきしより山ほとゝきすかけみつゝ池のあやめのねにやなくらん
心あらはたひねのくさのまくらにもつゆたにもらせ夜のとこなつ
あはれかく見てのみむすふくさ枕人のしめゆふとこなつの花
おもかけをくさの枕に見てもなを心なくさむとこなつの花
庭の池のかきつはたをふかみといふ宿の名によせて
なかめては心計をかけつはた名さへふかみの池に生ふれは
あやめをよめる
あやめくさよりては袖をぬらす哉ひくことかたき池とみなから
ねによれはひかぬ袂もあやめくさみたるゝ露にぬれぬ日そなき
なひけかしわきてもひかんあやめ草池のまこもにましるひともと

わすれしなひかぬたもともあやめ草ゆかりの露のかゝるなさけは
人とはゝいかゝこたえんあやめくさひかぬたもとにかゝるしらゆき
わか袖は露のたま川やまふきのいはぬいろをもくみてしれかし
やまふき
ふかみ大人の田のものかきつはたのさきたるをみて折句
かはつなくきみかたのものつゆふかみはなあやめくさたごもみるらん
又下より上へかきつはたと置きて
たのもなるはなあやめくさつゆふかみきみか袂にかけてひくらん
ほゝとゝきす　折句
ほり江こくとまりの船のとも千鳥きしのすさきにすみなれて鳴
あやめくさ　折句
あしひきのやま櫻花めかれせてくもとみるまてさきにほふらん
よしの山　折句
よもすから時雨〳〵てのきちかきやま風さむしまつのしたいほ
たつたかは　折句
たつねてもつきさへもらぬたにかけのかゝるやとにもはなはさきけり
たまてはこ　折句
たかま山まつのあらしもてる月のはなのくもまはこゝろしてふけ
たまくしけ　折句
たかさこまつふく風にくもはれてしも夜の月のけしきことなる
あすかかは　折句
あつまちやすみた川原のかは波もかすみてにほふはるのはつ花
ちとせ山　折句
ちる花はとまるせもなくせをはやみやま川水にまかすころかも
おふくさま　折句
おほそらのふけ行まゝにくもはれてさやかにてらすまとの月かけ
みつのいちといふまう人に、よみてまゐらす　折句
みとりなるつゆさへふかきのへの松いろもかはらてちよもさかえん
けふもあめといふことを折句
けふも又ふりみふらすみもらすかなあまくもふかくめくむはるさめ
さけさかな　折句
さくら花けふもわけきてさと遠みかすむ山へになるゝうれしさ
さむばいす　折句
さがの山むら〳〵さけるはなみれはいそくかへさもすぎうかりけり
むきみあへ　折句
むすふてにきよくそうつるみづすみてあり明の月のへたてなきかけ
おかよさむ　人の名　折句
おほそらのかすみの關の夜半の月さすかのとけきむさしのゝ原
ざとのほうといふことを　折句
さと遠みと山もかすむのきはよりほのかにもらすうくひすのこゑ
やはぎはしといふ　折句
やまふかみはるや過ぬときてみれはなさへちりてしらくもなし
さなへくさ　折句
さくら花なといろふかみへたてなくくもとみるまてさきにほふらん
すきなさけといふことを　折句
すみよしのきしのひめ松なみならぬさかえそしるきけしきなりけり
卯月廿日あまり四日の日、ふかみのあるしにいさなはれ行て、中村といふ所の中根うしのみりとにて、なかねき
みといふことを、句の頭におきてよみてまゐらす
なみならぬかはへの小松ねをふかみきみとともにやみ世にさかえん

竹の繪かきたる扇を出されければ

風になひく心涼しき竹のこのきみかみよこそ久しかりけれ

松竹梅の繪かきたる扇に

竹のみとりにましるうめのはなちとせへぬともいろはかはらし

松平村にゆきて

かしこしな御世の常盤に治めますこれや御國の神のふる里

大田といふ所の信光寺といふ法海上人の御法を拜聽してよみて奉る

くさも木も西へにしへとなひくかな御法の風のふくにまかせて

かへし　西へなひく草木もあるを法の風ふくをよそなる人のおろかさ　法海

又よみて奉る

あさましやかゝるみきわによりながらくむことかたきのりの池水

さく花のみやこを出て國々を照す御法の月そたふとき

くぎうといふ所まで、御ともして山川のふうけいなる所にて、おとやすみありければ、人々歌ゞよめ給ふによみて奉る

岩こゆる波の花さへさきちりてにほひえならぬ山川の水

しゝかはなといふ岩の、川の中にありければ、ししかはなさいふこと、句頭におきてよめる

しら波のしたにもふかきかけみえてはなの山川なかれにほへる

山川に船さす所

山川をわたるを船もいと波のうき世のうみにかはらさらまし

茅原といふ所の成瀧何かしのもとにひと夜やとりて

音にのみきゝてもきよき山川のなる瀬の波によりてすまはや

梅を繪かきたる扇に

いかてかく花の盛のうめかえをあふきの風にまかせおくらん

出生の女の子を祝ふて

寄巻夢園舊

雨中早苗

ある女きるものによする祝ひの歌よみてよとありければ

たちならふ二木かもとのひめこまつ千年をかけてさかえ行らん

見ても猶むかしをそ思ふたらちねの親のまもりのなてしこの花

五月雨のふるの山田の早苗とるたこのたもとや露けかるらん

卯月の末つかた故郷へかへらんといひけれはあるしとめ給ふによめる

いろふかき君か手おりのからにしきたもとゆたかにたちもかさねよ

五日五日

ちりてたに青葉のかけもたちうきに又うの花や心とむらん

けふといへはむすふ枕のあやめ草かりそめならぬえにしをそおもふ

生ひそむる頃よりなれしあやめ草つまにみるまてたひねをそする

六一、願はくはの巻

ねかはくは出よみ山の岩し水かけひの音のたゆむまもなく

御佛のみのりの山にくさまくらかりそめならぬめくみをそおもふ

御山にこもりて

おほせことかうふりて數々歌かくとてよめる

山かたみ御法の庭にいそちとりふみのこしおくあともなつかし

五月朔の日大野の里なる眞種君のもとにとふらひ侍りて

かへし　むかしこしみちをしるへにたひころもうらなつかしみ君をこそとへ

とくちりて人もまれなり山里に君かこと葉の花をみるかな　眞種

又　春過てなつきてみてもことの葉のはなのはやしはさかりなりけり

草ふかきわか山里をふみわけきよくもいらこの君そきませる　眞種

五月八日新城の里なる赤屋榮俶君のもとにふらひて、御中へ行きて勝行君の御もとをとふらひ奉りけれは、磯丸のとふらひけるをよろこびて

まちわびしこころしりてやほととぎす音つれてなく五月雨のころ　勝行

御かへし　まつ君のめくみそふかきことの葉のはなにきてなく山ほとゝきす

勝行雅公の御もとに、磯丸雅人のとふら給ふと聞て行てよめる　待君のこと葉の花に音信てなくほとときすきくそうれしき　重光

かへし　あしひきの山ほとゝきすことの葉の花にとひきてねをのみそなく

山本君のもとにとふらひ侍りて

たかねなる月ゆき花をなかめつゝこの山もとに君はすむらん

ふみわけてみるそうれしきあしひきの山本にさくことの葉の花

みな人のよみたまへる歌の數々を見て　あしひきの山のふもとの夏こたちしけきことの葉みるそうれしき　花人

磯丸君とふらす給ふに友よひつとひ歌よみけるに　大鳥のこと葉の花にことりらもともよびつとひあそぶたのしさ　桃業

かへし　あそぶかなへたてぬ浪によりつとひわ歌のうらはの千世の友つる

五月雨のふりければ　なしまるる君をとめんとさみだれのふれる軒端につたふいと水　花人

かへし　けふも又たちそかねつるふりつたふ軒のいと水いとまなければ

又　何を君花といふらんはつかしないろも香もなき賤かことの葉　桃業

かへし　うつくしも家つとにせんかくふかき色も香もあることの葉の花

山本ぬしのもとにてはしめて磯大人にまみえし時　時鳥けふあしひきの山もとにはしめて初音きくそうれしき　桃業

かへし　ほとゝきす山本さらぬしのひねをたか世につけて聞にきつらん

又　われも又なきならはましほとゝきす世にめつらしき玉のはつねを　桃業

かへし　はつかしな鳴ふるしたるほとゝきす玉のはつ音と何しのぶらん

磯丸君にわ歌道しるへをたのみて　れがはくわ歌のうら船みなれさをさしてをしへよ數島のみち　花人

かへし　遠くともいささほさしてわけゆかんともによるへのわかのうらふね

人々のよみし歌うつすとて　うつしもて家つとにせんみな人のこゝろこめたることの葉のはな

けふも又たちそかねつるみな人のこと葉の花に心ひかれて

たひころもたちよるばかりありしよりこと葉の花に日數へにけり

磯丸君のかへり給ふ名殘ををしみて　をしまれて袖こそぬるれなつころも君かかへさのけさのあさつゆ　花人

夏ごろもわかるゝ袖をたしまるゝまたいつきます君とおもへば　貴丸

わかれをみしみて

わかれてもあきのこゝろぬまに夏ごろもかさねて君をとはんとそおもふ

かへし

又大野へいさなはれゆきて、眞種君のもとにて、庭のあやめをみて

あやめくさあはれとはみよむらさきのゆかりたつねてわれはきにけり

たひころもきてこそみつれあやめくさむらさきにほふ花のさかりを

紫のいろなつかしみあやめくさ日數かさねてたひねをそする

庭の松のおとろひたるとて、さかゆる歌よみてよと、ありければ

むらさきのゆかりなつかしあやめ草たひのまくらにかるよしもかな

五月雨のふりつゝきければ

花のさくためしもあれはことしよりみとりにかへる春をまつかえ

床の花かめにさしたる花をみてよめる

はれまなくふりかさなれる五月雨の雲のころもを大空そうき

みゆるかな君か心のふかきいろはさしたるかめの花にうつりて

かへし

はつかしな君かこと葉にくらふれは露のなかめもなつくさの花　眞種

岩根にさける口なしの花をみて

咲しより人はとへともかくとたにいはねにほふ口なしのはな

たそかれのみちしるへとてさけるかな賤がふせ屋のゆふかほのはな

夕顔

夏ころもたちよる袖のすゝしさはあきといはねの水のしらなみ

水邊納涼

このころはにきあふ里のゆふけふりたつはふせ屋の蚊遣りなるらん

里蚊遣火

深山郭公

きく人もなき山おくにほとゝきすおのかさ月もしらてなくらん

又蚊遣火の題をりとて

いつくにかやとはもとめん家ごとにふすふりたつるさとの蚊遣り火

窓螢

日をかさねたひねをすれはいふせさもこのころなるゝ里の蚊遣り火

旅宿にて鳥のこゑを聞て

いにしへのまなひのみちをしのふかなふみ見る窓にほたるとふかけ

夏の夜はまた宵なからいたつらにあけぬとつくる鳥の音そうき

庭の松の歌よみてよとありければ

いかてかは鳥のなくらんくさまくらをしむ心はまた夜ふかきに

うつし植し君もろともにかけたかく千世もさかえよ庭の松かえ

朝顔

ことしより千年をかけてとかへりの花さく春を君はまつらん

くりかへしさくあさかほの花かつらいく秋かけて君はみるらん

あすも又とくおきてみん朝顔の花のしたひもうちとけぬまに

これもその名殘とそおもふみし夢のおもかけにほふ朝顔のはな

人々にいさなはれて硯川に行て

硯川なつはなかれて行水のはやくも秋の風やかよへる

きてみれは夏ともさらにいはこゆるこの川なみにあきやたつらん

行水のはやくも秋はきにけらしすゝりの川の風の涼しさ

硯川きしの青葉のかけ見えてこすゑをこゆる瀬々のいはなみ

硯川いはまの浪にかへりきてまたもむすはん清きなかれを
する墨の硯の川のゆふけしき筆も心も及はさりけり

女郎花

わけゆかはうき名やたゝんをみなへし人めもしけき秋のさが野に
をみなへしおほかる野へに草まくらむすはゝあたの名にやたちなん
人とはゝいかにこたえんをみなへしたをらぬ袖のつゆのうつりが
くりかへしみれともあかし庭の面に錦おりなすいとはきの花
した風もふきなみたしそおく露のたまぬきとむるいとはきの花

庭の萩をみて

磯丸うしがひるねして目をさまし給ふに

みやひをかゝちらさておもひねの夢にもみしかことの葉のはな　年卯

かへし

これもその夢かとそ思ふさめあへぬ枕にかほることの葉の花

われもそのかたはらにありて

うたゝねにみるほともなくさめてしも猶しのふらんふる里のゆめ　年長

水邊夏月

涼しさは秋ともさらにいはまもるみつのなかれにうかふ月かけ
すゝしさは雲さへはれてみよしのゝ夏みの川にうかふ月かけ

山の井にかけうつりきておのつからくも手も涼し夏の夜の月　菊子

手にむすふ水さへ秋にかよふかな川瀬にうつる月の涼しさ

山の端にはやくうつりて谷川にかけもやとらぬ夏の夜の月　眞種

月に雲のかかれるを見て

さらぬたにかけみるほともなつの夜の月にかゝれるむら雲そうき

蟬

露ふかき眞木のしたみちわけ行けはすゝしくおつるせみのもろこゑ
涼しさは露さえちりてなくせみのこゑもすみゆく松のしたかけ
露おつる松のした風ふくからにしくれにかよふせみのもろこゑ

秋風のかよふこのまに鳴せみのこゑもすゝしきころも手のもり　菊子

むらさめのはれまをまつのこのもとにもりて涼しきせみのもるこゑ　眞種

夏戀

契りても身にこそそはねなつころもうすきえにしをなにむすびけん
夏むしにもゆる思ひはまされともひかりみえねはしる人もなし
かりにとふ人も夏野の思ひくさいかにつれなく生ひしけるらん

われにのみかくしけらしておもひくさかりくる人も夏の野そうき　竹子

あふことはなつのいづみの水なれやわきかへれともくむ人そなき

今はたゝおもひみたれてなつくさのつゆのなさけもなきそかなしき　菊子

今はただあふてふことはなつこたちなけきのもりとしけりこそすれ　うら子

思ひくさしけれはふかくかよひ路もなつ野の末はとふ人もなし

わすらるゝ心もしらす夏くさのふかくも人は思ひみたれて　眞種

あふことはたえて久しくなつころもうすき袂にもる涙かな

言の葉にそへてそおくるかゝころもなれしわかれのかたみとしみよ　うら子

磯丸君に衣をくるとて

たちかへりいく世へぬともからころも君かなさけはわすれやはする

をみなへし大野のくさのまくらなはささの小萩かつまやとかめん　眞種

かへし　うちなひく野をなつかしみ女郎花たひねはすれとえこそたまらね

磯丸うしの故郷へ歸り給ふに

ふりつゝく空ははれてもわかれちの神の露こそ雨にまさるれ　眞種

かへし　はれてしもふりこそまされわかれ路の空にしられぬ神のむらさめ

名殘をしみて　かくふかくなしむ名殘はありそうみの濱の眞砂の數も及ばし　竹子

かへし　たのもしな濱の眞砂の數々に心こめたる君かことの葉

わかれても君かたよりなまつ風にたくはておくれことの葉の花　菊子

かへし　風ふかは君かみもとえおくらましいろも香もなきことの葉なりとも

はれゆくか雨を涙にふりかへてわかれに猶そ袖しぼりける　うら子

かへし　わかれ路のそらははれても袖しほる雨や涙にふりかはるらん

夏ころもたちわかれても秋はまたかさねてとはん木々の錦を

新城の里より大野の里へよみておくりける

ふく風のなよりもかなとあけくれに名殘大野のそらをなかむる

草まくらむすひかへても思ふかなこり大野の露のなさけを

衣をたまはりしうら子の君のもとによみてまひらす

思ふかなたちゐにつけてからころもうら子の君のあつきなさけを

小川の里なる菅沼君のみもとにとふらひ侍りて鶴亀の繪かきたるがくに歌ふみてよとありけれはよみてまゐらす

所えて千世萬代といはひつるかめと友にや君はすむらん

又玉留庵といふ山亭に行てあるし歌こひ給ふによみてまひらす

おく露のたまのうてなの月はなをみゝつ山へに君はすむらん

三河なる小川の里にて尾張の國大野の里なる武田君にまゐえて

たひころも夢かうつゝか君にけふあはんものとはおもひかけきや

待郭公　はつこゑをとく人つてにきゝしよりまたぬ日そなき山ほとゝきす

新樹　わか宿にまつとはしらてほとゝきすよそになくらんあたらはつねを

磯丸君へ　わけゆけは涼しかりけり夏こたちしけき青葉の露のしたみち

かへし　とはれてもわけこそまよへあしひきの山とこと葉のことしげきみは

世の中にその名もたかくのぼりこしきみにとばゝや山とことの葉　蕎子

はつかしな年のみたかくのほりてもやまとこと葉のみちわかぬ身は

年へても君かおもかけかはらねはいつもわか木のことの葉の花　菊子

又

かへし　なさけあれはあまた年ふる老木にも君かこと葉の花さきにけり

豐川の里なる小林ぬし、稲荷明神へ石の鳥居をあけるとて、人々すゝめ給ふとて、歌ふみてよとありけれは

くわはるゝ人もさかえんたてまつる神の鳥居のあらん限りは

六二、世の中の歌

「この集は、「世の中といふことを一首のうちにいれて、たゝこと歌百首よみてよとありければ」といふ前書ありて、八十五首を輯みてある。其の他は散逸したるものと見ゆ。こゝには重複をさけて前の章に出でたるものを省きて載することにした」

世の中は三筋の道にひく車のりえかたきは人の身のうへ
世の中はいかにわたらんまる木橋ふみそこなへばふかき谷そこ
しあんばしふみまよふなよ人こゝろよくには道も見えぬ世の中
世の中にいきとしいけるものはみなわか身のはしといたはれよ人
いち日もたゝおろそかにくらすなよ神やほとけのめくむ世の中
世の中に神も佛もなきものとむりいふ人の行末を見よ
けふありてあすなきものは世の中の人のいのちと春のあわゆき
むまれより人はすぐなる世の中に心とがむるおのが身のそん
世の中のよくをつゝしむ人はたゝ身のわざわひもすくなかりけり
よくふかくかねもつ人はおほけれと善ある人はまれな世の中
世の中はちゑなきものの淺ましさなにゝつけてもじまんこふまん
つゝしめよてきもみかたもおのかなすよくからおこる人の世の中
世の中のあつささむさはあめつちのしせんとしらていとふおろかさ
しゆう親の目をかすめるなな何にてもあしきむくひははやき世の中
あんらくちありとはきけど世の中の正直さかはこせぬものかな
世の中の道をわすれてうかうかとさんあくどふにまよひいるなよ
かりそめの草のいほりはせばくとも心はひろき世の中にすめ
世の中の人の心のじやけんには神もほとけもちからおよはす
世の中に心をひろくもつひとはなにゝつけてもくらふなきもの
一生ははかりかたなきますのうちうちはにくらせ人の世の中
人心たゝよき種をまきおけよまかなきたねははへぬ世の中
世の中にすぐなるものは神ほとけまがりやすきは人こゝろかな
おのが道すぐにわたれは世の中の人は心のまゝになるもの
心なきかべに耳ある世の中にたゝしなめよ人のかげこと
うらみたりうらみられたり世の中の人の心はあきのくずはら
わが身こそうき世の中のまくず原うらみらるとも人はうらみじ
おしなへて人はたかきもいやしきもまゝろむうちの夢の世の中

目をしのひ人はしらぬとおもふなよあくじせん里をはしる世の中
そらそらにそらねんぶつをもふすよりむりをつゝしめ世の中の人
ゆたんなくねてもおきてもしあん橋心にかけてわたれ世の中
心から人はをにゝもほとけにもじゆふじさひになれる世の中
このむなようき世の中のあだたからもてはもつほどたらぬものなり
世の中は山川遠くめくりてもわが田に水をひくならひかな
錢かねにまさるたからは世の中の人の心のまことにそある
世の中のうきたつ波はこゆるともはうどのあみにもるゝなよ人
世の中の人にわるきはなきものとおもひなほせよおのがこゝろを
世の中に人とむまれて孝なきはとびやからすにおとりこそすれ
世の中のぎりをはかくな人としてわかみのうへのことはかくとも
身にめくむ善をはすゝめすこしでもあくはのがれよ世の中のひと
世の中の人にはおそれつゝしみてわかみのちゑをちゑとおもふな
よる波のうつゝもしばしなにはがたあしのかりねの夢の世の中
世の中の人はなにはのうらおもてよしといふたりあしといふたり
行かへりわたるとすれとおぼつかなうき世の中は夢のうきはし
世の中よよわきものにはじなさけつよきものにはしたがへよ人

行末もかぎりしられじ世の中の親に孝ある人の身のとく
世の中のよくはするともむりするな我身のがひとなるものぞかし
世の中は何かなにはのよしあしもしらで月日をくらす身そうき
世の中の人の思をはわするゝなわがなす恩を恩とおもふな
水のごとすむもにこるも世の中はそのみなかみのこゝろなりけり
とりとめてことこそなけれ日にそへて流るゝ水のあはれ世の中
世の中のめぐみの海にすみながらこゝろとさわぐ波かせそうき
うらみじな人はおろかよ我身さへ心のまゝにならぬ世のなか
水のあわくさ葉にむすぶ露よりもあやうきものは人の世の中
おしむともたれかとまらん水のあわ流れてはやき人の世の中
世の中をいとふ岩ほの中にてもうきはみにそふ峯の松風
いとはねはうきことしらで世の中のちりにまじわる身こそやすけれ
何こともなかばなるこそめてたけれみつれはかくる人の世の中
末の露本の雫をみてもしれおくれさきたつ人の世の中
消のこるかたこそなけれ雪霜とともにふり行人の世の中
世の中は夢かうつゝかうつの山こえ行さきもしらぬ身そうき
人はみなたからの山に住みながらうき世の中と何なけくらん

おのつからすくなる竹の世の中にうきふしたつる人こゝろかな
むら雲のかゝるうき世の中空を月はいとはてすみわたるらん
世の中はかりのやとりの草枕つゆのひぬまのうたゝねのゆめ
世の中の人のいのちはしらつゆのむすふ野原のゆふくれのそら
世の中の人の心のおろかさを神や佛はあはれとやみん
世の中はたのまれかたきつゆの身をあらしの山におくとおもへは
よきあしきわが身のうえにひきくらへ人もかくやとおもへ世の中
うへみれはかきりしられぬあめかしたかさきてくらせ人の世の中
世の中の道をまかふなむりするな人をうらむなうらみらるゝな
けふはけふたのまれかたきあすか川ふちせとかはる人の世の人
人心いつはりおほき世の中にまことをてらす神そたふとき
いとはしなあふもわかれもかりそめのくさのまくらのゆめの世の中
いたつらにかねもつ人はおほけれと善ある人はまれな世の中
なんぎするくわこのやくそくしらずして神やほとけをうらむ世の中
風さはぐうき世の中のまくづ原うらみらるとも人なうらみそ
世の中の人のわるさをみるにつけおもひなほせはおのか心を
遠くとも善にはすゝめ近くともあくはのかれよ世の中の人

世の中の人にははじよつゝしめよちゑあるとてもありかほをすな

六三、露なからの巻

人の母みまかりたるに、おさなき子のありけれは

露なからのこるもあはれなき人のわすれかたみのなてしこの花

渡邊大人、十三回忌をいとなみ給ふに、よみててたまつる

たちよりてかすみの袖にしのふかな十と三とせのけふのむかしを

人の母のみまかりたるに

きてみれは袖こそぬるれちりてなきよそのはゝそのもりのしつくに

古人のつかなりとて峯に茂りたる松を見て

ありし世の人のかたみはいまも猶峯にこたかく殘る松かえ

初秋の頃人の子のまかりたるに

いかはかり露けかるらんなてしこのちりにし跡にのこるはゝそ葉

ふる年の雪と消にし面影をかすみのそてにしのふはかなさ

文政十一年といふ年の五月渡邊氏の老君のみまかりたまひしつひせん心を

草まくらかりのやとりの夢さめてもとの御國にかへりますらん

ある人親のみたまにたむけんとて、子孫の榮ゆる歌よみてよとありけれは、よみてまひらす

こまつ原千世のさかえをまもるらんくさ葉のかけの露のみたまも

初冬のころ、人の親のみまかりたるに、よみてまゐらす

ふきちりていくたの森のこからしにのこるこすゑやうちしくるらん

梓弓やたけ心におもふらんひきとめかたきおやのわかれを

ある人うきことを忘るゝ歌よみてとありければ

つみはやせうきことあらは忘草世にすみよしのきしをたつねて

神かけて明くれいのることの葉はつゆのみをおくよすかなりけり

寄言葉述懐

さかえ行く宿の入江の松かせに波もちとせの聲かはすらん

水樹多住趣

わけのほり又もむすはんとくのりの山よりおつる瀧の白絲

瀧山にまうて丶

たのもしなのりもはちすもこもりえのこと葉の花のかけにすむ身は

述懐

さかりなる世の人草もあきにあひてかるれは野へのたき丶なりけり

無常

文政八年といふ年の初秋の頃、千本君の老君のみまかられたまゐしと聞きて、よみて奉る

この秋はを花か袖もいかはかり露けかるらんむさしの丶原

むすふらんちりても露のたまなれはさそふはちすの花のうてなに

かけたかき老木の松の跡とめて千本のこする千世もさかえん

文政九年といふ年の霜月の頃、尾張の國あつたの里なる高木氏の許にて、母の年忌をいとなみ給ふをりしも、とふらひてよみてまゐらす

面影は雪ときえてもあり明のつきぬみたまをけふまつるらん

おもふらん山下てらす月ゆきもめてしあるしのありしその世を

山下道也君、秋の頃みまかられ給ふともしらす、三とせ經てしはす十日あまり二日の日、とふらひ奉りて

又

秋の野の露ときえにし面影を雪にとふにも袖そぬれける

文政十年といふ年の春、わかはらからの梅心芳林信男の法事をいとなみけるをりしも、鶯のなくたきゝて

思往事

ふく風にちりてかへらぬ跡とえは梅の林にうくひすのなく

古人のつかの邊に鏡石なりとてありければ

しのふともかひやなからんおく霜ときえてかへらぬ人のむかしを

寄時雨懐舊

しのへとや世々にくちせぬ面影を鏡の石にうつしおくらん

井井君の妻の一週忌いとなみ給ふをりしも春雨のふりければ

しのへとや涙あらそふ村しくれふりにし人のけふのむかしを

寄道懐舊

花とのみちりてかへらぬ跡とへはかすみの袖に春雨そふる

古人文を見て

なき人のみかきおきける玉ほこの道をしるへにしのふいにしへ

文政十年といふとしの正月四日の日、我弟のまかりたるに、法名梅心芳林信男のいたみに

みれは猶袖こそぬるれなき人の忘かたみの水くきのあと

やかてさく花もおもはす淡ゆきといかにいそきて消はしつらん

さく花に心よせてやなきたもと法の林の梅にすむらん

一回忌いとなむとて

見し梅の花はさけともこそのけふちりにし人はたちもかへらす
さく梅の花にとはゝやこそのけふちりてかへらぬ人の行へを
ふく風にちりてかへらぬ跡とへは梅の梢にうくひすのなく
さく花を見るにつけても思ふかなちりてかへらぬ人のむかしを

寄花懐舊

文政十年といふ年のみな月のころ、とみの病にてみまかりたまひしと聞つゝ、すこしさはることありしゆゑとふらひ侍らて、よふよふ冬の末つかたとふらひ侍りて

夏くさの露と消にし面影をゆきにとふにも袖そぬれける
埋もれし苔の下にもにほへかしをらてたむくることの葉の花
榮え行こすゑを見ても思ふかなそのはゝきのありしむかしを

秋の頃みまかりた人のもとへ

あたし野の草葉の露をわけこしてなき人しのふ袖そぬれける
香ににほふ露のおきふし思ひ出て昔を忍ふ軒のたち花

寄橘懐

安濃津の里にて、旅人のまかりたるを哀と思ひて

行もあへすかゝるたひなる道かへてひとりよみちになといそくらん

文化十三年子といふとしの霜月十四日の日、母のみまかりたるかなしみのあまりによめる

月の名の霜ときゆとも昨日まてよそにのみ見し野への露けふはたもとにかゝるかなしさ

神となりほとけとなりて守れかしわすれかたみにのこるこの身を
むつの辻みつせの川もやすかれとたのむはみたの御法なりけり

野邊のおくりに名殘ををしみて

いつの世にめくりあひ見んを車のひきわかれ行親のおもかけ
かゝけてもなきおもかけのたちそひて涙にくもるのりのともし火

とほし火をかかけろとて

おもかけはゐますかことくたちそひてとえとこたえぬ法のともし火
かくはかりぬるゝたもとを露ふかき苔のしたにもあはれとやみん

はかにまうてて

さく花におもひ出てはしのふかなちりてかへらぬ人のおもかけ
夢とのみ過しむかしをしのへとやねさめにかほるのきのたち花

寄花懐舊

寄橘述懐

秋の頃人の母のみまかりたるに

たちよれは袖こそぬるれちりてなきよそのはゝそのもりのしつくに

きさらきのころみまかりたる人のもとへ、秋とふらひ侍りて

秋きりの空なかめつゝしのふかなかすみにきえし人のおもかけ
榮えゆくこすゑを見てもはゝき木のありしその世をおもひ出らん

寄橘懐舊

旅にありしとし、七月十三日夕つかたよめる

なきたまに汲てたむけんたひころもいつくもおなし水のなかれを
とゝけかしなきたままつるふるさとへ言葉のつゆのたむけなりとも

秋懐舊

かみな月の比、みまかりたる人の許へ、又の年の秋の末つかたとぶらひ侍りて

露ふかきもみちを見ても袖ぬれて植けん人の秋をしそおもふ

長月の比年忌をいとなみ給ふとて、懐舊の歌よみてよとありければ

むら時雨ふりにし人のあととへはこたえぬ露に袖そぬれける

母のありし世を思出て

めくりあふ月にとはゝや長月の露ときえにし人のむかしを

夏の懐舊

はゝき木の本としきけはしのはれてその原山の名さへなつかし

春みまかりたる人の許にとふらひ侍りて

さきにほふ花たち花をみても猶過し昔のことをしそおもふ

文政十三年といふ年の師走半の比、尾張の國大野の里なる萩原氏の母のみまかりたるを、又の年のきさらきの始つかたにとふらひ侍りて

あたし野の霞に消し俤をしのふ袂に春雨そふる

しら雪と消てかへらぬおもかけを霞の袖に忍ふはかなさ

かたみなりとて着るものをたまはりければ

なき人の忘れかたみのから衣かゝる涙に袖そぬれける

秋の末つかた、人の母のみまかりたるに行てよめる

來て見れは袖こそぬるれちりてなきよそのはゝその森のしたつゆ

七月十三日の夕つかた雨ふり出しければ

おりしもあれけふふる雨は諸人のなきたまゝつる涙なるらん

藤の垣内翁のみもとにて、秋の比法事をいとなみ給ふをりしも、とふらひ侍りて

めくりあふ月にとひきてしのふかなありしその世の人のむかしを

ある人の五十回忌をいとなみ給ふに、をりふし春雨のふりければ

とふ人の袖こそぬるれいそとせのけふの昔をしのふ春雨

きさらきの末つかた、みまかりたる人のもとへ、卯月の比とふらひ侍りて

たちよりてうきうの花にしのふかな霞にきえし人のおもかけ

かみな月の比、みまかりたる人のもとへ、とふらひ侍て

しのふともかひこそなけれおく霜ときえてかへらぬ人のおもかけ

西山氏のつひせんの會にて

きてみれは人はふりにし神な月時雨のあめに袖そぬれける

秋の比人の子のみまかりたるゝよみてまひらす

ふみのこす跡をとめきて友千鳥和歌のうらわにねをのみそなく

秋の頃藤の垣内翁の塚にまうてゝ

きゝてたに袖こそぬるれいかはかり露けかるらんはゝ木々の本

なき玉にをりてたむけん露ふかき山むろ山の秋のもみちは

秋ふかみ山むろ山の露わけてなき人しのふ袖そぬれける

名古屋の里なる白木屋何かしのもとにて、十三回忌をいとなみ給ふをりふし雨ふりければ

なき人の面影しのふ袖のうへにふるはなみたかむらさめの空

寄花懐舊

かくはかりさくにつけても思ふらん花もあるしのありしむかしを

なたせ氏の母のみまかりたると聞て

おもふかなかれ野の霜を見ても猶きえてかへらぬ人のむかしを

無常

なきものと口にはいへと身のほとをかきりありともしらぬおろかさ

人のの親のみまかりたるによみてまゐらす

榮え行こすゑの花のさくも見ずかへらぬ道になといそくらん

師の君の十七年忌をいとなみ給ふに

とゝせあまりはや七年のめくりきて又袖ぬらすけふのいと波

桂山老翁のみまかり給ふに、のへのおくりによめる

心なきをはなか袖もけふは猶わきてつゆけきのへのわかれ路

無常

見てもしれ老も若きもなきさこく海士のをふねの跡のしらなみ

六四、はるはるとの巻

尾張の國なる、田鶴丸ぬし三たりよたりいさなひ給ひて、伊良古崎にものし給ふに、磯のあないすとて

はる〳〵と問こし君もいらこ崎みるめは波の哀とやみん

遠江の國なる龍丸ぬし、伊良湖崎にものし給ふとて

伊良湖崎波の花さへ咲ちりて磯のみるめもたたならぬかな

みるめなき伊良湖の崎の波にしも君かことばの花咲にけり

かへし

佐勢の國にありける、年冬の比友人に別て歸るとて

友千鳥別おしみて百千かへり清き渚を過かてになく

人もとへ見おくるとて

みかきみよ光りは同し玉くしけふたみの浦の貝ならすとも

親しき友人、春のころ故郷に歸り給ふに

寄火戀

咲花に心もとめす行人を鳴てとゝめよ園の鶯

煙たに及ぬかたを泳つゝ心からゆく海士のもしほ火

わか思ひあさまかりたけにもゆれとも煙立ねは知人もなし

寄淮述懷

下もえはけふりの末も及はしな雲より上に見ゆる富士の根

述懷

かそふれは五十に近く鳴海かたよる年波の早くもあるかな

老と成つらさも知らて急こし昔にかへれよするとし波

哀此老と成身を歎てもかへらぬ年の波のうたかた

老の波よりくる年もわすられて花咲春をまつの浦しま

春のころ吉野河にて

吉野河花の露ちる春かせに岩こす波も匂ふ長閑さ

雉子

かり衣ひも夕暮のかへるさに妻とふ雉子恨てやなく

花と柳とは、いかにと人のいゝければ

散やすき花の色には移らしと心柳の糸に社よれ

子日祝

千代ふへき君か例に引ものは子日するのゝ小松なりけり

早春河

吹とけて音こそまされ鈴鹿河氷も波にかへる春かせ

いつくにかのかれても見ん海士衣世のいとなみのかゝる袂を

遁へき方こそなけれ海士衣よのいとなみのかゝる袂は

秋の山といふ題を

露時雨いかに梢を染つらん千入に見ゆる秋の山端

旅宿戀

いつしかと秋の日數も龍田山峯の紅葉の色そ増れる

更衣

甲斐なしや露の情も一夜のみ伏見の里の草の枕は

五月の比、東なる歌人のま見へ侍りて、程なく歸り給ふに

移行時こそうけれ夏衣ひとへに惜き花染の袖

歸るかな花橘のなき宿はきてもとまらぬ山時鳥

曉郭公

時鳥又も問はや我宿に花橘をうへてまたまし

師の君の御もとへ

ほとゝきす曉かけて鳴聲に袖社ぬれる老のねさめは

忘れしな流いくせにへたつともその水上のふかき惠は

月前郭公

水上は哀とや見ん行水の清き流も汲しらぬ身は

寄道祝

さやけさを忍ひてや鳴久かたの月の柱の山ほとゝきす

琴の音を聞て

かしこしな及ぬ雲の上までも心かよへることのはのみち

ぬしや誰思ひしらへて引琴の音による物は心なりけり

衣か浦にて貝をひろふて

濡ぬとも袖に包まん旅ころもうら珍らしき波の花貝

旅宿にて梅の花盛を見て

おのつから手折ぬ袖も香に匂ふ梅咲宿に馴るゝ此比

歸るとて

さき匂ふ園の鶯聞捨て花なき里にかへる身そうき

人の許に立よりて

盛なることはの花の林には絶す木傳ふ鶯の聲

藤河の里なる、大須賀ぬしにま見へて

紫のゆかり尋ねて藤河の花のさかりに問はんとそおもふ

寄草戀

消かへりもゆるさかのゝ若草にいつか結はん露の玉の緒

蹶躅

色深きときはの山の岩つゝしいはて思ひにこかれてやさく

雪中の鷹狩といふ事を

みかりのゝ鳥立も見へす降雪に尾ふさの鈴の音計して

同し旅の宿りにて政春ぬしのかへり給ふに、別れを惜みて

浦波に立かへるとも旅衣日數經すして又もとへかし

返し

隔なき三河尾張の浦なみも立別れてはいつか逢見ん　政春

萩の花の散かたに成けるを惜て

くり返しみるかうちにも散花を結ひも留よ庭の糸萩

萩原氏の母君は朝ゆふ怠なく佛前に手向し給ふをかんし侍りて

御佛も嘸なめつらん法の花朝なゆふなの君か手向を

尉と媼の書きたる扇に歌よめと人のこひければ

もろともに落葉かく身も千代やへん名も高砂の松の下かけ

六五、我も又の巻

みちのくの人とふらひ給ふによみてまゐらす

我も又いつかわけみんみちのくのしのふの山はよし遠くとも
遠くともそのみちのくの神かけていのる心はちかのしほかま

うす霞といふ春の比、香をきゝ給ふに

たきそへてかゝるけふりもうす霞花まつ宿ににほふのとけさ

磯丸ぬしのとふらひ給ふに　　滋惠

かへし

君しまたは卯の花ころもたちかへりかさねてさはん山ほとゝきす
あやめくさねをしのふみはほとゝきす涙計をもらしてゆく

向川原といふ所の川の月をみて

さ月まつ山ほとときす我やとに猶いくたひもおちかへりなけ

よる毎にむかふ川原の涙にうかふ月のみふねのかけのさやけさ

七十賀松によせてよめる

榮えゆく松に契りてなそちのけふより千世を君そかそへん

旅泊

難波かた芦のまろやにたひねしてけさこそみつれうらのけしきを

嶋千鳥

ゆふされはうら風さむみよる波の淡路のしまに千鳥なくなり
風さむみ波のよる〳〵たち花の小嶋のさきに千鳥なくなり

寄松戀

契りてもつれなきものを姫こまついつひくま野の子の日なるらん

網代

いと浪のかゝるわさとていとはれぬ世をうち川にあしろもるらん

磯丸ぬしの故郷にかへり給ふわかれをなしみて

わかれ行君かをふねの網手繩ひきとめかたき名殘をそおもふ　　當久

かへし

海士を船君にひかれて網手なはかゝるみなとを出そかねつる

牡丹

明くれの露のいろさへふかみくさにほひえならぬ花にそありける

海邊歸鴈

程遠くかすむ淡路をかへるかな名殘をしまのあまつかりかね

松聲入琴

櫻田の春をみすてゝわたつみの花もなみ路をかへるかりかね

ふきたてて軒の松風いとまなくたかつま琴のねにかよふらん

岡鹿

いと長く千年をかけてひくことのねにこそかよへ軒のまつかせ

吉野なる櫻木の御社にまうてゝ

つれもなきつまやしのふの岡の邊にひとりを鹿のなきあかすらん

さくころは神も心やなくさまんよし野のおくのさくら木のみや

ある人ふみによする祝ひといふことを、よめとありければ

とめゆかん猶末遠くしるへせよふみ見る道のあらん限は

寄竹祝

うちなひくみとりの竹のよをこめて嬉しきふしを君そかそへん

遠江の國あらぬの里に旅ねするよおりしもよ所よりこかねをもてきたりければたはふり歌よめる

心あらは袖にもとまれたひねする宿にちりくる山ふきの花

熱田の御神の歩射御祭を拜奉りて

世々かけていのる心にひく弓の矢もむつかしきけふの神わさ

松間月

山かせに雲ふきはれて峯に生ふるまつにかひある月を見るかな

木の葉のちるをみて

ふきおろす峯のあらしは手もなくていかにこの葉をこきちらすらん

冬嶺秀孤松

ちりはてゝこのめは春を松計のこるもさひし冬の山の端

東山嶺孤月

さやけさは世にたくひなき富士のねの雪にかたふく夜半の月かけ

海邊に待月といふことを

うな原や波にはなるゝ月かけを見ほの松原まつそたのしき

五十鈴川にて

汲からに心も涼し神風やいすゝの川の清きなかれを

宮川にて

名にしおふ豐宮川にみそきしてこころ涼しき神風をふく

六月祓

もろ人のけふのみそきにうきこともみなつきはらふ風のすゝしさ

母の例ならざる時氏神大明神へ日まひりをするとて

わか心神やうくらん梓弓いかきのうちへいらぬ日そなき

守神のみたらし川のちかけれは清き流をくまぬ日そなき

山のうへの船といふ題をとりて

こゝを帆にあけてこしちの山の端をこきくるふねはかりにそありける

六六、何事もの巻

なむあみだといふ事を句のかしらにおきて

なにこともむなしき事とあきらめてみだの御法をたたのめかし

ふつほさつといふ事を

ふかくみのつもれる罪もほろひなんさこそみのりのつとめつとめは

ある人出世の歌よみてよとありけれは

おこたらすつとめてのほれちりひじもつもれは山となれる世の中

大の里歌世へまいらすとて

里の名もひろき大野の姫子まつ千世の子の日をかけてさかへん

寄松祝

さかへゆく松にちきりてことしよりきみかちとせを祝ふことの葉

年暮

ふる年のちりもはらひてあら玉のひかりのとけき春をこそまて

神鏡

みかけたゞ神の鏡にむかひても心くもらはかけもうつらし

ゆるすなよあかすみるとも月花にいさむ心のこまのたづなを

狂歌　東一といふざとを

いにしへのあこやかことに引かへてわれをは人ぞうたせめにする

同　鶴の市を

なにしをふことになたかき東一京にもなしと人はいふなり

鶴の市へ出世のうた

子を思ふ心はさぞなふかからんやけののきき夜るの鶴の市

位山ひかりみるまでのほれかしつへを月日のかけとたのみて

目あしきときのうた

あふそらの風にかすみをはらはせてこの目ははるの光りこそませ

目居師中嶋を祝ひて

名に高きその中嶋の家の業さかへを神にいのることの葉

大野の里栗太郎肖像に

世世かけてうつしをくらん子を思ふみちをまもりの親のをもかけ

極樂へ道引のうた、かよ子へまいらす

ねかはくはむかへたまへよのちの世はみたのはちすの花のうてなに

かへし　　萬代にまれなる君のおしへにてよろこびねがふみだのほんわぐん　かよ子

あふぎ

たみはほねひらける御代は地がみにて君はあふぎのかなめなりけり

我としをきき給へは

いくつとてかづならぬ身もとしふれはこらいまれなと人はいふなり

我事を

此人をここにまちへて三川なるいらごの神の御玉ぞと思ふ

花ならは折て都のつとにせん難波のこらの秋のよの月

雪つもる天のかくやく山白妙のころもへづして冬は來にけり

山吹よよへどこたへぬ口なしのいはぬいろにはいつならひけん

山吹

御ちそうのおめしについてなすふれい夢になれ〳〵ゆめになれ〳〵

狂歌

さきにほふこの下かげをやどとしてあくまで花を見るよしもかな

花の本にて

半田の里にてこがねを惠み給ふありかたなさに

家つとにせよとて君はめぐむかな御代のたからの山吹のはな

春雨

くりかへしふる春雨のさひしさは忍ふにつとふ軒の糸水

とこなべにて我像をこしらへ給ふに

ねがはくば人もとへかしことの葉の道のしるべにのこるおもかげ

大野より野間の大坊へさんけいぜしときの狂歌　半田豊水

いかにせんおはしはほそし日は長し野間てくわねははらはへりつつ

酒一つ野間でをく田もすぐ通り大根つけでもあらば上野間

雪のうへもしづかふせ家もへだてなく君かたちよることそうれしき

磯丸大人へ

雪のうへもしづかふせ家も行かよふ心はおなじことのはの道

かへし

きる物をめぐみ給ふによめる

たちかへん心涼しき夏ごろもひとへに君がめぐみをそ思ふ

めぐまれよまはれば　おたのみは一兩けんにゆかねともまづにぶ〳〵と君につかはす　濱島

しようぎにはあらねど金もさしつかへけいひようながら壹ぶつかはす　吉川

われへ金壹歩給るとて

ししやならで角ありかたき金銀の御禮はまたも王てまふさん

かへし

心ある人や繪にかくほとときす見ても初音のしのばるるかな

郭公の繪を見て

つれ〳〵にまつに日數はつもれともまた白雪やよそにふるらん

失題

咲しよりひまこそなけれこのころは花にあかしつはなにくらし

友に見し人はこすへの花ばかりありしむかしにかへりさけとは

見てもなほあかぬ櫻のちりゆかは何にくらさんながき春日を

長閑なるはるの衣のうら風をまほにまかせて渡る友船

渡し船を見て

なすのゆめ見しによみてまいらす

たのもしな世にたぐひなきふしとたかみつのうちなるなすのまさゆめ

たのもしななほ行末もよき事をなせとてなすのゆめや見つらん

わけきても花もにほはぬ夏子たち何をたほりて家つとにせん

夏山

春過て花もにほはぬ夏山に何にこがれてもゆるさわらび

琴を聞てよめる

きくからに我玉の緒もゆらくかなしらべたへなる玉琴のこへ

琴の音のしらへかはらぬ糸よりもまさるは君か玉の言の葉

かへし

ねかはくは我玉の緒もなからへて長くきかばや玉ごとのこへ

おもふかなよそのしらべを聞てだに我古里のつまごとのこゑ

失題

しのびねのころにはあれど心あらはなけや卯月の山ほとときす

千代子賀祝ひに

ちぎれなき千とせをかけて住吉のきしにおふてふ相生の松

失題

思ふとち花見る時は春の日もことぞともなくくるゝみじかさ

海ちかき庭の櫻のほかにまた浪の花もや君は見るらん

長月の頃磯丸主訪ひ來ませは

花に思のもみぢにまちし歌人の訪ふそうれしき長月の空　名古屋　保　榮

かへし

世にめづる月花よりもうれしきは我をまつてふ君か言の葉

磯丸大人初て來りけれは

我國のとなりの國の三河なる人にとははやしきしまの道　名古屋　かくろ

かへし

しき嶋の道は何れかしら浪のよするなぎさにすごす身なれば

人

おもへ人人かたてねは身かたゝぬ人は我身の柱なりけり

花さきてみのなるときもありなんと四方にまきをくことの葉のたね

よしさらばもろこしまでゆたねまきてこと葉の花のはやしとはせん

待郭公

天地かちちははなればうみ山も御そらもおなし我身なりけり

萬代によせともつきじことの葉のはなのはやしはかきりしられじ

殘花

いねかてにこよひもふけてほとときすまつにかひなき月を見るかな

同

をしまるる春のかたみと山櫻心ありてやさきのこるらん

花かこの鶯こへをききて（八十一歳）

夏山の青葉わけきて思ひきやかゝる稍の花を見んとは

きくたびに春の初音の心してあく時ぞなき鶯のこへ

ことの葉の花のはやしにうぐひすに暮るもしらでなきあかすらん　ぶん子

かへし

何ごとも酒で事たる世の中を茶にしてくらす人のおろかさ

狂歌

わかれてもまたかさねてと笠のひもなかくむすひて君にまゐらす　かよ子

磯丸君へ笠をまゐらすとて

たひころも君かめくみの笠のひもなかきちぎりをむすふうれしさ

かへし

たひ衣君かめくみのたてをかさかむりてゆかん花のみやこへ

きてゆかば老かくれんたてをかさ君かめぐみもほどをこそ思へ

六七、磯の玉藻

「本集は今まで集をなしてゐないもので、糟谷家を始め各地に紙片、色紙、端册等に記されて散在せるものを蒐集し、新に「磯の玉藻」とは名つけ、春、夏、秋、冬、神祇釋教、呪禁、戀、雜、連歌、折句の拾部の分類をなして載錄したるものである。」

(一)　春

立春

あつさ弓春たつ日より世の中の人の心ものとかなりけり
ふるとしもあけぬとつけて鳥かなくあつまよりこそ春はたちけん
あつま路や春はかすみの關の戸をあけてみやこにたちのぼるらん
みちしあれはあとこそみえね古年のゆきふみわけて春はきにけり
梓弓春とはいへと色わかぬのこる日數に名こもるらん
しら雪のふるとしなからのとかなる空にしられて春やたつらん
梓弓いかにいそきてあら玉のとしよりさきに春はたつらん

年内立春

みちしあれは跡こそみえねしらゆきのふるとしなから春はきにけり
なかめてもあとこそみえねしらゆきのふる年なから春は立らん

元朝

岩戸あけて出る光りものとかなる神世のままの春やたつらん
久かたの天の戸あけてあらたまのひかりのとけき春は來にけり
天の戸のあけぬとつぐくだかけのこゑとともにや春はたつらん
けさはやあふ坂山もかすむなりせきの戸あけて春やたつらん
かとことにたてしめ引く松竹の千代萬代といはふもろ人
みやしろにひくしめなはも長き世の春をむかへて祝ふもろ人
みやしろにひくしめ縄も新玉の年をむかへて祝ふもろ人
神路山さか木葉分きて出る日の光りのとけき春は來にけり
みしめひきけふ奉る門松に千年のかけをこめていはゝん
うらやまし君はむかへてなかむらんさそな難波のはなのあけほの
難波つの君にそおくる新たまのとしをむかへて祝ふことの葉

春をむかへて

あゆちかた霞渡りて寄浪の花咲匂ふさくらたの春
久かたの天の戸あけて出る日のひかりのとけき春は來にけり
たのもしな年こそぬるれ老か身も若葉にかへる春をむかへて

神のますよもきか嶋に萬代の春をむかへんことそうれしき
世にめくむこのめ計かわか目まで春のひかりやみちわたるらん
君か代は限りしられし子の日する野への小松はひきつくすとも
ひかれなはかくまてたかき年はへし子の日よ所成野への松かえ
かしこしな千世萬代ともろひとの祝ふ子の日の神はこの神
梓弓春の子の日のひめこまつたれか千年をかけてひくらん

○
子日祝
○
子の日の祝
○
すまことをひき給ふにあるし子の日のいはひよみてよとありけれは
すまことのねの日の小松ことしより君か千年のためしにそひく
春をあさみ衣うら風さえかへり音せぬ波のあは雪そふる
吹もうしそらは雪けにさえかへり身にこそしむれこれもはる風
吉の山稍にのこるしらゆきもさなからにほふ花の面影
吉野山またき稍の花とみてたをれはかゝる袖のしらゆき
吉の山木木にのこれる白雪を千本櫻さくかとそみる
あかすみん保とめて山さくら咲までのこれ峯のしらゆき
春のこし跡よとそ見る山かつも通はぬみねのゆきのむらきえ
夏くさのつゆときえにしおもかけをしのふたもとに淡ゆきそふる

浦餘寒
餘寒を
木殘雪

○
山殘雪
峯殘雪を
師の君の十七年忌をいとなみ給ふに、淡雪のふけれけれは

春を淺みころもうら風さえかへりよる白なみのあわ雪そふる
さほ姫の衣春風さへかへりかすみの袖に淡ゆきそふる

海邊餘寒雪
餘寒雪
閏正月三日、庭稍に雪のふりかゝれるを見て
春歌とて

○
春をあさみした風さえて稍なる花かとみれはきゆるあはゆき
いとはやも賤はた山におりはへて霞のころも春はきにけり
久かたの空もかすみて出る日のひかりのとけき春は來にけり
あふ坂の關ふきかよふ松風の音羽の山もかすむのとけさ
かくふかくけさはかすみて松風の音羽の山も名のみなりけり
日にそへてふかくなりゆくやえかすみ龍田の山の花やさくらん
富士の峯は霞の衣白妙のゆきにかさねてのとかなるらん
霞のかゝれるを見て
あま雲も及ぬ富士のねをいかて霞のたちかくすらん
高ねなる雪も霞て時しらぬ山もときしる春は來にけり
又
春のいろふかくこそなれわたつみのかすみのころもすそはたつ浪
○
浪路まて春や立らんいろふかくかすむころものうらそのとけき
ゝ邊霞
遠ちこちの山もかすみてこもりくのはつせの櫻いまや咲らん
山霞
名にしおふ麓の里のけふり哉やことの山にかゝる霞は
彌事山にまうでゝ

こまがたけを見わたして　久かたの雲井をかけるこまかたけかすみのひまをこめてこそ見れ

大崎の御館にて梅の花ををりて給はりければ

たをりもてめくまるゝいろ香も深き梅かえにひとしほまさる言の葉の花

めくまるゝいろ香も深き梅かえにひとしほまさる言の葉の花

うは玉のよるさへかせのさそひ來て枕にかほる軒の梅かか

當座夜梅を

日よりの日ふるさとへ立ろかへるとて

旅ころもかさねてとはん咲そむる庭の梅かえうつろはぬ間に

木母寺にまふてて梅若の社を拜して

名にしおひて春は此間に咲匂ふ花にとはれん梅若のもり

雨中の梅

きてみれは梅の花笠もる雨にぬるるたもとともかにそにはへる

雨中梅

ぬれてこし袖にもとまれ春さめのふる屋の軒ににほふ梅の香

梅風にかほるといふことを（一）

野も山もさきにほふらんそことなくふきくる風も梅か香そする

梅風にかほるといふことを（二）

ふきかよひさかはつけてよ里の名のたかき梢の花のした風

梅風にかほるといふことを（三）

かりころも春はきてみん里の名の高き梢の花のさかりを

春川大人のもとより

わか宿の庭の梅かへ咲きそめぬはやとひ來ませ花ちらぬまに

といひおこし給ひけれは

來て見れは咲かぬと告しことのはの花にもまさる庭の梅かへ

武士の馬にのり給ふ所に梅の花をみて

ふみわくる駒もいさまん咲きちりてひつめにかかる花の白雪

ある御館にて庭の梅のよく咲たるとて花の數々みのなる歌よめとのたまうに

咲みつる御館の梅よねかはくはははなの數々みもむすはなん

梅先春開

庭の面にとく咲そめてのとかなるはるまちかほにほふ梅かえ

庭の梅の花はつかにさきけるを手折て歌そへ給はりけれは

手折もて見せすはしらて過なましおくふかくさく宿のうめかえ

遠江の國なる濱松の里、中村氏の御許よりふる里へ、かへるとて梅の花をみて

さきにほふ花のいろ香のをしまれてたちわかれうき宿の木の下

おもひあれは何かをしまん梅の花いさやたほりて君におくらん　りい子

か へ し

家つとにかさして行かんいろも香もふかきなさけの花の梅かへ

又

をしけにも思はす折つてみするかな惠そ深き梅のはつ花

或人へかへし

萩原氏の別莊の梅の盛を見て

さき匂ふ園のあたりはよきてふけ花のさかりの衣うら風

玉たれのひまもる風もかほるかな軒端の梅のさきしこのころ

梅櫻

いろも香も深き惠の梅の花なほ常盤に差てなかめん

衣か浦にて　いろふかき衣か浦による浪の花にかよへる鶯のこゑ

六月五日旅にて鶯の聲を聞く

雪中鶯　めつらしな花もにほはぬなつ山の青葉にこもる鶯のこゑ

舊巣鶯　木の本にふりくる雪を咲花のちるとやみらん鶯のなく

竹鶯　うくひすもふるすながらにあらたまの年をむかへてはつねなくらん

山家鶯　朝またきねくらの竹のよは春とつけの枕に鶯のこゑ

○　朝またきねくらの竹のよは春となくうくひすのこゑの長閑けさ

浦鶯　里遠み花もにほはぬ山さとにこのめ春とてうくひすのなく

咲にほふみ堂の梅の花見つつきくそ長閑きうくひすのこゑ

春たてば霞の衣うら浪を花とやみるらんうくひすのなく

うちよする春の衣の浦浪を花とやみらん鶯のなく

雪中鶯　軒ちかき梢にかゝる白雪を花とやみらん鶯のなく

このまよりふりくる雪を咲花のちるとやみらん鶯のなく

暮春鶯　をしまるゝ花さへちりてゆく春をうらみてやなく園のうくひす

谷鶯　春きてもまた雪ふかき谷の戸を出かてになく鶯のこゑ

鶯は花の名殘をおしみてやちりにし跡の梢にそなく

春たてと猶雪ふかき谷の戸を出がてになく鶯のこゑ

山家鶯　山里は雪こそ消ね世は春とけさつけそむる鶯のこゑ

雪ふかき花もにほはぬ山里にこのめ春とて鶯のなく

天保十二年正月七日熱田の里にて

鶯聲和琴　きくからに心ひかるゝつま琴の色ねにかよふ鶯のこゑ

ひめ小松ひくや子の日のことの音にはつねあらそふ鶯のこゑ

關路鶯　きくからにこゝろとゝまるあふ坂や春の關もるうくひすのこゑ

旅鶯　ふる里にいそくかへさもうくひすのなく木の本は過うかりけり

おしめとも花さへちりて行春をなきてとゝめよそのゝうくひす

待花　かよひ來てさかはつけてよみよしのゝ吉野の山の花の下風

花　花ゆえに春は吉野のおくまても人にしられぬかくれかもなし

たつねてもこそのしをりのみえぬまて花になりゆくみよしのの山

散花　咲きしよりひまこそなけれ山さくら花にあかしつ花にくらしつ

風前花　かよふともあらくなふきそ野も山もいまを盛の花の春風

閑居花（八十歳）　とふ人もなき山里のかくれ家に花もうき世をのがれてやさく

夕落花　初瀬山ゆきとみるまてゆうくれのかねのひゝきに花やちるらん

山路花（八十歳）　さく花にかへさわすれて草枕いく夜山路にたひねしつらん

花下鐘（八十歳）　初瀬山見はてぬ花に心なくくれぬとつくるいりあひの鐘

けふも又花にくらしてきくそうき初瀬の山の入相のかね
初瀬山みはてぬ花のこのもとにひひくもうしやいりあひの鐘
初瀬山風さえいとふ花のもとにまたおとろかすいりあひの鐘
初瀬山みはてぬ花のこのもとにききておとろくいりあひの鐘
あはれかくさけはかつちる花みてもたのみかたきはうき世なりけり
かよふとも春の山風心せよふけはかつちる花のこの本

春櫻によする述懐

風前花

玉造なる御茶屋にて、池の邊の櫻の花をみて

くもるなよいまを盛りとさきにほふ花の鏡の庭の池水
うつりきてかけさえにほふ池水はさながら花の鏡なりけり
よな〳〵の浪にうかべる月はさそ花のかけさえにほふ池水
水清み池のささ浪よるごとに月のみふねもすみわたるらん
惠みあらは池のさゝ浪たちかへり又こん春も花にとはまし

玉造なる御茶屋にて

山かつのたき木に、花をたりそへてかへる所

人のため心ありてや山かつの遠山櫻をりてきつらん
をりそへてくる山人のなかりせは遠山櫻しらて過まし
見る人もなき山おくの櫻花いたつらにのみさきやちるらん

遠山花

藤井の里なる安正寺の夜の櫻をよめる

御佛のたむけにとてや山櫻みのりの庭にうつし植けん
かくふかき心ありてや山櫻御法の庭に咲にほふらん
御佛のみのりの庭の糸櫻よりくる人のたゆるまそなき
世にめつる心くみてや庭さくら花もこかねのいろにさくらん
君かため千年も花の春かけて松の木の間に咲にほふらん
花みんとまれにきませし君かためけふはなふりそ衣はるさめ
櫻花くるゝ返しときくからにまためくりあふ春をこそまて

黄櫻（七十八歳）

松のこの間の櫻を見て

空くもりければ

車返しといふ櫻の本にて

花の本に人々つとひて酒たふへけるによめる

くむからにうつる蔭さへ匂ふかな花の雲間をめくるさかつき
長き日のあかぬ櫻の心なくくれぬとつくるいりあひのかね
この本をたちわかるるもおしけれと返るもよしや花のさくらた
わか宿の庭もせにさけみな人のめつるたからの山ふきの花
九重の花やさくらんいやたかき大内山にかゝるしらくも
隅田川浪の花さへにほふまてつつみの櫻今さかりなり

鐘のこゑを聞て

櫻田にかへるとて

寄花述懐

◎つつみの花をみて

ある御方にせんさいの花見に行けるに、風のはけしくふきけれは

咲匂ふあたら盛をいたつらに吹きなちらしそ花のした風
ちらすなよ吹くとも花に心して香はかりさそへ庭の春風

濱島君のみまかりしち子の植ゑし櫻のよく咲きたるを見て

しまへとて植ゑやおきけんありし世のわすれかたみのち子櫻花
ち子さくらたちよる袖にかゝるかなむかしをしのふ花の下露
ちこさくら花のむかしの面影をしのへとてしも植ゑやおきけん

みめくり稲荷の社にまうでて

行かへり人さへけふはみめくりの神の社の花にむれきて

松間櫻

常盤なる松にましりてやまさくら花も千年をかけてさくらん

故郷へかへるとて庭の櫻の本にて

なるゝほと思ひまさまし櫻花盛こぬまにたちやかへらん

ならの八重櫻をえさせたまひしとて、われにも見せたまふによみて奉る（一）

見ても猶そのいにしへを思ふかなならのみやこの八重さくら花

ならの八重櫻をえさせたまひしとて、われにも見せたまふによみて奉る（二）

いまも猶むかししのへと八重さくらならのみやこにのこりてやさく

けい子の君のもとへ

時をえていまをはるへと里の名もたかき稍にさくやこの花

歌よみてよとありければ

咲にほふ庭の若木のいと櫻よりくる人のたゆるまそなき

春の頃ある御許にとふらひ侍りけるに、先にみまかりたるち子の植たまゐし、櫻のいとよく咲たるを見て

しのへとて植やおきけんありし世の忘れたかみのち子さくら花

又

たらちねは見るにつけてもち子櫻花の雫に袖ぬらすらん

庭花

櫻田にて

○

庭もせに匂ふ櫻の花見れはとはて過にし春おしそ思ふ

○

櫻田の櫻さくらんあゆちかた浪の花さへにほふこのころ

○

たのもしなうきよのかれて咲く花をひとりみ山の房の明暮

上野の花見にまかりて

にほふかな光りもそひて咲花におくしら露のたまの數數

櫻誓願寺御開山上人の植たまひし菊櫻といふの本にて

奥深く咲くやこの花ちりこすはかかる色香もしらて過まし

所から八重ここのえに咲花の雲の上野とたれもみるらん

これもその人のかたみときく櫻花にむかしの春をとはゝや

これもまた世々に流れてにほへかし櫻にむすふ水くきの跡

落花

雲と見し稍は晴てふるさとにつもるよしのゝ花のしら雲

落花深

さひしさはつもる木の葉にうつもれてありかなきかの柴のかり庵

○

埋もれて雪よりさきの木の葉さへふみわけかたき冬の山道

夕落花

初瀬やま嵐ふかねと夕暮のかねのひゞきに花やちるらん

きくそうきちりかふ花ををしむまに日も夕暮のいりあひのかね

三月十一日於又深居各詠山中花夕和歌

みてゆかん歸るやま路はたとるとも又一しほの花の夕はえ

やよひ十日あまり六日の日、蓮光寺にまうでゝ、富士の山の姿をうつしたる、つき山の櫻のちるをみて

庭のおもにうつせしふしの山さくらちりてもにほふ花のしらゆき
さらぬたにひかたきものを浪かかるころもかうらのはるさめのそら
かけてほすひまこそなけれさほひめの霞のころもはるさめのそら
さほひめの霞の袖やしほるらんをやむまもなき春の長雨
涼しさは軒の糸水いとまなくくりかへしふるはるの長雨
旅なれぬ衣春雨ふる里を思ひ出ては袖にぬれける
たひの空ころも春雨ふる里をおもひ出ては袖そぬれける
いとはるゝ心もしらて咲にほふ花につれなくふれる春雨
をしまるゝ花にさはらぬものならは何かいとはんころも春雨

春雨

春雨のふりければ
春雨のふり出しければ
雨ふり出しければ

ある御舘にて、御客のある日、春雨のふりければ、又の日よみて奉る

花みんと昨日きませし君かためけふはなふりてこのめ春雨
さひしさは軒の糸水糸間なくくりかへしふる春雨の空
春までの心をのへの若草よ名殘の袖をしはしとどめん
いつしかとこのめも春の若草に野かひのこまもゆさむろこかな
みや人も春野に出て君かため神のみあへの若草つむらし
うらやましたれかわけきてむすふらんねよけにみゆる野邊の若草
日にそへてふかくこそなれ若くさのつまこもるまて生にけるかな

○

若草
若菜
若草（八十一歳）

○

若草

消のこる雪の下よりもえ出ていまを春へと青む若草
いたつらにもえやいつらん里遠みかる人もなきのへの若草
里遠みのへの若草いたつらにもえ出るともかる人もなし
ふみわけてからんとすれとはつかなる雪まにもゆるのへの若草
ゆき消てのかひのこままいさむまてこかねか原に青む若草
すみた川の邊にてたなやめの若菜つむをみて
いろみてもけにむつましきはゝこ草人につまれんことをしそ思ふ
ものをかくわさにや心つくつくし筆とみるまて身をやつすらん
たちましり霞のころも老の身も君と若菜をつむそうれしき
て我も若菜つむと
八十あまり五つの翁磯丸、七草のかゆの祝ひ（八十五歳）
けふといへは七くさなつ菜つみいれていはふかひある千世の初春
梓弓八十にあまる老か身もつむそうれしき春の若草
○（八十五歳）
きさらき三日の夜當座　野若草
長閑なる木のめもはるのわか草に野かひの駒もいさむころかな
駒とめていさかりかはんもえ出るみとりも深き野への若草
色ふかみ君とふた葉のすみれくさつみはやしつゝ野邊にすまはや
里遠みわけきてみればすみれ草の守のほかにつむ人もなし

野菫菜

○

はるたゝはつまんとそ思ふ旅ねする大野に生ふる千世の若草
春たては若なつまんとかり衣きつゝ大野に旅ねをそする
山かつは春の山邊にもえ出るわらひ折つゝつまきこるらん
こかれつゝもえ出るかな若草をつむ手ににたる野邊のさはらび
おくふかくわけいる人につまれんと山路にもゆる春のさわらび
山ふきにみはならねとも世にめつる花はこかねのいろにこそさけ
みちのくにありし春はしらねともこかね花さく宿の山ふき
わけこすはしらて過ましかくとたに岩根かくれの山ふきの花
山川の水もぬるみて蛙なく今や咲くらん井出の山吹
花盛とへとこたへぬくちなしの色にならひて咲ける山吹
我宿の八重山吹の咲しよりいはぬ色をも人はとひくる
山ふきのいろはこかねにたれともみのなき花と人はいふなり
香ににほふ宿の山ふきさきしよりいはぬいろをも人そとひくる
さき匂ふきしの山ふきうつりきて水さへいろにいてのたま川
新を田の水もぬるみてかはつなくゐでの山吹今や咲くらん
みな人のめつるこがねのいろにかにほふたからの山ふきの花

大野にて

樵路早蕨（七十八歳）

蕨

山吹

冬　歌

題をさくりてよめる　歌冬

山吹

水邊歌冬

山吹

歌　冬（八十四歳）

みな月廿日、愛宕下なる御そのにて、山吹のかへり花を見て

夏ころもうらめつらしなひとせにふたたひにほふ山ふきの花
おく露もいはぬ色なる玉くしけふたたひにほう山ふきの花
口なしの色にならひてかくとたにいはねにほふ山ふきの花
春をあさみ空は雪けにさえかへりおほろけならぬよはの月影

山ふきを見て

春　月

春の夜の月とありければ、予もそのかたはらにありて

さく花の露にやとれる月影をしはし袂にかるそ嬉しき

暮行くままに川の月をみて

隅田川花にくらしてさしのほる月のみ舟の蔭もめつらし
久方の月もよなよな隅田川花の蔭そふ浪にうかひて
月の蔭花の露そふ隅田川流れくみつつ住みよしもかな
ふくまゝの風にまかせてあらそはぬ柳を人の心ともかな
かけたかくたちやさかえんいと柳澤邊の水のすまんかきりは
さほ川や氷もとけて春風にいとまなみよるきしの青柳
とくのりをむすふてひきの糸やなきよりくる人も限しられし
つゝみもていさやたむけんなき玉の君の惠みの言の葉の花
おく露の色さへ名さへふかみ草から紅にさきにほふらん
咲しより名さへ露さへふかみくさにほひえならぬ花のいろかな

柳（八十四歳）

柳　澤

水邊柳

御法の庭の柳を見て

返　し

牡　丹

をとめ子かあかものすそにまかふまて咲にほふらん露ふかみくさ
船よせてあまもみるらん湊江の松にかゝれるふちなみの花
いらこなる君ら熱田にあら玉のとしをむかへんことそたのしき　（失名）

江藤

とよみてたまはりければ

かへし

松上藤

ひろ前に春をむかへて海士ころも熱田の神のめくみをそ思ふ
千世かけて君やみるらん庭のおもの松の梢にかかるふちなみ
いろふかみいかに契りてつれもなき松の梢にかかるふちなみ

名古屋なるすやきといふ所にたひ〳〵しき藤の花を見て

たひ衣たちよる袖も紫の色になり行庭の藤なみ

花園君の庭の池のみきはの藤をみて（七十五歳）

池の面にこき紫のいろみえてそこにもふかくにほふ藤浪

○

春色有山毎

いはひつゝ君かみもとえ初春の風のたよりにおくる言の葉
のとかなる霞渡りてはるの色のいたりいたらぬ山の端もなし、
かくふかく霞わたりて春のいろのいたりいたらぬ山の端もなし
春風に雪けの雲はふきとけてけさよりかすむよもの山の端
野も山も花のさかりに心なくいかてかすみのたちかくすらん

磯丸ぬしのこたひめつら歎とふらひけるを歎ひて

花の香もなき山里をわすれなくおとつれきなくうくひすの聲　文子

かへし

はなならで色香うすきわかやとに君か言葉のはなそ咲ける　仝

山路きてきくそうれしきことの葉の花のはやしのうくひすのこゑ
まれにきて聞そ嬉しきたひ衣うらめつらしきうくひすのこゑ
よりこすはしらて過ましいと櫻かかる若木の花のさかりも
いたつらに過せし宵の山さくら花そ色ますきみかことの葉

三月三日遠藤様へ、御祝の意をよみて奉る

三月三日祝

萬物感陽和

春逝懐

○

けふことに君はくむらん三千年をかけてなるてふ桃のさかつき
けふにあひて流れくむみも三千年のよはひやのびんもものさかつき
けふにあひて汲そ嬉しき三千年のよはひのふてふもゝの盃
空のみかなへて草木もいろまさる春のめくみや四方にみつらん
いかにせん春は若葉にかへれともかへらぬものは老の年浪
家のとにうつしてかへれ鳥かなくあつまの春の花の色香を

磯丸君のかへり給ひければ

おしませてかへらは歸れ春の雁
霞の空に殘す言の葉　二雀

かへし

みな人のめくむ言葉の花かつらつはさにかけてかへるかりかね
そふとてやきみか別を皆人のおしむ泪かはる雨ぞふる　南江

磯丸きみの別を　しみて

春雨にぬれてかへるはいとはねとふりすてかたき名殘をそ思ふ　貴祿

かへし（八十五歳）

なれそめし衣がうらによる浪の袖にかけつゝかへる身そうき

又

春野

長閑なる木のめも春の野に出てすみれつみつつ遊ふたのしさ

けふといへは行かふ人も大のなる小松引らしすみれつむらし

はるははや冬のしるしをみわ山の松のこすゑにかゝる白雪

○

春風のふきわたるより山川の水もぬるみてのどかなりけり

春風春水一時來

鹽ひかた浪かきわけて大崎のあまのこぶのりつまんとそおもふ

大川の里にて

岩こゆる波の花さへさきちりてにほひえならぬ春の山川

山川のふうけいをみて

あさかほのたぬを植給ふによめる（八十五歳）

契りおきてけふ植給ふあさかほの花をさかりに君をとはまし

ふく子上

朝がほの花に契りしことの葉をつき日へぬとも君なわすれそ

かゝへし

かくはかりふみに心をつくゝし筆とみるまて身をつくすらん

春　筆（八十一歳）

あまを舟浪路こゝきて伊勢のうみの清きなきさによるそうれしき

○

難波江の芦の若葉に風そよくをりをすくさて君をとはまし

○

うらやまし君はむかへてなかむらんさそや難波の春のあけほの

○

吉野川流とめきて思ふかな浪の花咲春やいかにと

庭の岩つゝしを　てよめる

ふく風にうこかぬ宿の岩つゝしちりても花は根にやとまらん

くれなゐの色こくにほふいはつゝしいはておもひにこかれてやさく

水谷君の御許にて櫻草を見てよめる

庭のおもにみちて色々さくらそふにほひえならぬ花の下風

雨中蛙

ふる雨にみかさまされはを山田のなみにうかれてかはつなくなり

春日おそしといふ

氷いし水もぬくみてふる雨にを田もるかはつもろこへになく

あつさ弓春の日あしのおそけれは花みなからそくらしかねぬる

赤坂の里にて（八十あまり四つの翁）

さきしよりみてもみあかぬはなくは長き春日を何にくらさん

歸雁

きてみれは名さへいろさへ赤坂のみやちの山のつゝしさくころ

御庭の椿をみてよみ給へる

やかてさく花の都をしら雲のうはの空にやかへるかりかね

川暮春

おくつゆのたましく庭の玉つはき君は八千世をかけてみるらん

山川や花も流れて行春をしはしとゝむるしからみもかな

谷川の花さへちりて流ゆく春をとゞむるしがらみもかな

春欲暮

をしまるる花さへちりてあつさ弓春の日數もうつり行かな

浦暮春

ゆめとのみ花鶯ををしむまに春も暮れ行入相の鐘

かそをれは春の日數も浪とともにたつことやすし浦のゆふくれ

(二)　夏

遅櫻

めつらしな青葉のかけにたゝひと木のこるかひある山櫻花
人のみか又はつ花の心ちして春はこかけにたちやとまらん
思ひきや山路わけきてたゝひと木のこる櫻の花をみんとは

卯花

卯の花の垣根計は月夜にてにほはぬかたはゆふやみの空
みても猶心涼しき月雪の面かけにほふ庭の卯の花

卯月末つかた鶯のこゑをきゝて

めつらしな花もにほはぬ夏山に春の名殘の鶯のこゑ
夏山の青葉にのこる鶯は花に後れてひとりなくらん
きくたひに春のはつねの心ちして夏をわするゝ鶯のこゑ

かきつばた

いろふかくさくか三河のかきつはた水にゆかりのかけをうつして
かきつはたその八橋の跡とめて人もとへとや咲にほふらん
時をえて咲や三川のかきつはたむらさき深く世に匂ふらん

八橋山無量寺に詣てゝ

○中略

かきつばたのさかりなる頃人のとふらひきませは

ゆかりある君まちうけてかきつはたけふはひとしほいろやまさらん
あやめさく軒になく哉きのふまてまちしかひある山ほとゝきす

五月雨

けふいく日をやむまもなく五月雨のふるき軒端はくちやはてなん
かきくもりはれまなけれはけふいくか日かけももらぬ五月雨のそら

いそのかみふるほと出てん言の葉のやむまもあらぬ五月雨のそら　ひしや　たね子

わけまよひ袖こそぬるれ五月雨のふることしのふことの葉のみち
かきくもりふるの高橋水こえて渡りたへぬる五月雨のころ
此ころはわたりとたえてさみたれのふるの高橋浪そこえける
思ひ出てふるき昔をしのふにもあまりてにほふ軒のたち花

朝ゆふにあかすこそみれ咲にほふからくれなゐのやまとなてしこ　のぶ十

いろふかくさく花よりも増るかな君かことはの大和なてしこ

よそに見てたゝになすきそ草枕君かたひねのとこ夏の花　間瀬春川

名古屋本町五丁目

か　へ　し

橋邊五月雨

橋五月雨（八十一歳）

橋

なてしこを

天保八とせといふとしのさ月十二日の日、磯丸ぬしがとふらひをよろこひ、庭のとこ夏を手折て花かめにさしよ

返　し

色ふかくさく床なつの花見つゝ心ゆかしきたひねをそする
ちらすなよ蝶よ花よとたらちねのおやの守りの庭のなてしこ

又

ふる雨のしつくもふかきいろに出てさくや籬のなてしこの花　春　川

ちりをたにすへしと君かなてしこの花には露も心おくらん
まれにきてみるもめつらし眞木の戸を明くれ君かなてしこの花

撫　子

けふといへはかふるををしき昨日までかすなれにし花そめの袖

ふみて奉る

更　衣

更衣（八十一歳）

夏衣

郭公

けふといへはかへまくをしき昨日まて花になれにし春の衣手
いかにせん春のかたみと櫻色にそめし衣はかへまくもをし
いかにせん春のかたみと櫻色に染し衣はかへまくもをし
たちかへてうらこそなけれ夏衣ひとへにかよふ風の涼しさ
なけやなけいつもはつねの心ちしてあく時をなき山ほとゝきす
なれも又昔しのふか古里の花たち花になくほとゝきす
雲井よりもらすはつ音もさやかなるつきの都の山ほとときす
さしのほる三笠の山の月かけをしのひてやなく山ほとときす
ほとときすまつにつれなくさよふけてなくひとこゑも遠さかり行
こゑたかく萬代までもかけたかとなのれ稲荷の山ほとぎす
わかやとの松にかゝれる藤なみによりてなくらん山ほとときす

卯月朔日の日郭公のこゑをききて

めつらしなけふたちそむる夏ころもきつつ鳴なる山ほとときす
さやけさは雲さへ晴て清見かた關守月になくほとときす

關時鳥

見しや夢夜半の枕の初こゑもさめてあやなき山ほとときす

夢中郭公

おもひねの夢の名殘のほとときすさむる枕にきくそうれしき
かひなしや初ね嬉しとおもふまにさむる夢路の山ほとときす

雨中郭公

うたゝねに見るほともなくさむるかな夢のうちなるやまほとゝきす

海邊郭公

あしひきの山時鳥ふり出てなくかさつきの雨のゆふくれ
うら近き山時鳥卯の花のいろなるなみのよることになく
くらをきの山時鳥卯の花のいろなる浪のよることに鳴
ほとときすうらつたひきて卯の花のいろなる浪のよる毎になく
おりはえて波の色なる夏ころもうらめつらしく鳴ほとゝきす

○

ある時鈴鹿山にて

いらこ崎おりたつ波のしらかさね夏きにけりと鳴ほとゝきす
をりもよし此村さめにふり出てなけや鈴鹿の山ほとゝきす

五月時鳥

里ことに出てなくかなさ月とておのか時しる山ほとゝきす

山郭公

時鳥おのか時なる世にも出す何をしのふの山になくらん

待郭公

しのひねのころよりまつのした庵にいまたきなかぬ山ほとときす
ほとゝきす人つてにのみきゝしより夢もむすはていく夜まつらん
わかやとの池のふち浪咲しよりまつに心をかけぬ日そなき
つれなさをうらみてもなほ時鳥まつより外のなくさめもなし
いねかてに今宵もふけてほとときす松につれなき月をみるかな

ある御館にて、軒の玉すたれより月のさしいるをみて

玉すたれひまもとめてやもる月をしはしたにみん雲なかかりそ

御庭の橘をみてよみて奉る　玉たれのひさもる風もかほるかなむかしを忍ふ軒のたち花

返し　稀人の言葉の露をかけそへてけふこそかほれ軒の立花　正路

簾葵

櫻か池にて　明くれにふきいる風もかほるかなかゝるあふひの露のたまたれ

かん原の里にて（八十歳）　名にしおへは面影ふかく匂ふかな夏さへ波の花櫻いけ

夏の河の鳥といふ題をとりて　涼しさは富士の高根のゆきをみて夏をわするゝかん原の里

夏夕風といふ題をとりて　つかはれし手繩もなみにうかひてはよをうの鳥のくるしけもなし

うかひ　冷しさは露さへちりて夏木たちしけれるやとにかよふゆふ風

御殿山にて　あはれかくくるしかるらんいとなみのかゝるう繩のよるのみすきは

武藏ののそらに名たかきこゑたてて名のるみとのの山ほとゝきす

青葉にもおもかけにほふみとの山花のさかりにとはましものを

天保四年といふ年の五月十日あまり二日の日あつまなる富士見茶屋にてよめる

たちよれは夏もよそなるこの間よりすゝしくみゆる富士のしらゆき

うふる田に白鷺のたてるをみて

雪中早苗　さをとめか菅のを笠とみゆるかなみとりのを田にたてるしらさき

時しらぬ富士の山かけうつりきて雪の中なる早苗とるみゆ

新樹　わけゆかん花こそなけれ夏山のしけき青葉のいろもめつらし

花ちりて月のかけさへもらぬまてしけりにけりな庭の葉さくら

とくちりて花こそなけれ陰ふかくにほふ言葉のいろもめつらし

新樹妨月　花はとくちりて色香も夏こたち青葉にかよふ風の涼しさ

生ひ茂る森の下庵もりすてゝつきはいつこにかけやとるらん

夏草　このころは茂る青葉にこかくれて月さへもらぬ森のしたいほ

野夏草　夏草も茂らはしけれふみわけし道ある御世は何かいとはん

樗　道はやきあし毛のこまもなつむまてしけりにけりなのへのなつ草

納涼　入日さすは山の樗さきぬらしこすへにかゝる紫のくも

たちよれは風もかよひてすゝしさに夏をわするゝ松の下かけ

水邊納涼　いねかてに夢もむすはてまつかひもなくなく過る山ほとゝきす

むすふてにかゝるあつさをわすれ井の水にまたき秋やかよへる

くみあけてむすへは涼し山の井の水のそこにや秋は立つらん

樹陰納涼　涼しさはならのひろ葉の音たてこの下風に秋やかよへる

船中納涼　ふな人は夏もよそなる浪まくらうきねなからに月やみるらん

○　あかすみん夏をわするゝすゝしさはこの高殿の窓の月かけ

○　花ちりてをしむなこりもなつの夜のかをふきはらへ木木の下風

六月十三日の當座　螢知夜

くるゝより澤邊の螢もえそめておのか光に夜をしるらん
とふほたるひるは消つゝ川波のよるをしるへにもえわたるらん

庭　螢

涼しさは庭の草葉のしらつゆにひかりかはせてほたるとふかけ

蟬聲秋近

色わかぬ常盤のもりはうつせみのなく音に秋の近きをやしる

ふる里へかへらんと思ふたりしも、蟬のなきければ、名殘ををしみて、（七十九歳）

みな月はらひ

をしまれて袖こそぬるれなくせみのこゑよりおつる眞木のしたつゆ

御　祓

みそきしてつみもけかれもはらひ川みなつきはつる風の涼しき

貴賤御祓

君かためはらひながさんみそき川つみもさはりもなみのまに〳〵

神風の吹くにまかせて祓川身にはのこらしつみもけかれも

みそき川高きいやしきおしなへて祓ひなかさんつみもけかれも

(三)

秋

萩

くりかへし見るともあかしちゝの秋錦おりなす糸萩のはな

なかめても思ひかけきやふる里にみ玉祭れる夕暮の空

咲匂ふ宿をとひきてくりかへしみれともあかぬ糸萩の花

庭　萩

來て見すはしらて過ましし庭の面ににしきおりなすいとはきの花

庭の萩の花を見て

いとはきの花ささきしより庭もせによりくる人のたゆるまそなき

よりきてもたちうかりけりひきとむるものとはなしに糸萩の花

御庭の池の岸なる萩の花をとて

きて見れは錦おりなす心ちして露もあやなるいとはきの花

ささにほふきしの糸はきかけみえて錦あやおる池のさゝ波

名所萩

水の面に影うつりきて色ふかくそこにもにほふはきの玉川

紅　葉

いろ深き紅葉の錦たつた姫いつのいとまにおりそめつらん

露霜にまたそめあえぬ紅葉はをちらしかほなる秋風そふく

名所紅葉

日にそへて露やそめけんけさみれは昨日にまさる庭のもみち葉

いかはかりおしむ名殘は大江戸の深きめくみの浪の數々

こきはちりうすきはそめて高雄山道も稍もにしきなりけり

○木の紅葉の錦はしきなりけり

山の端のひと木の紅葉うすくこくいかに時雨の染わけつらん

庭紅葉

たひ衣きてこそみつれ庭のおもに錦おりなす木々のもみち葉

山路紅葉

柴人のたをりみせすはおくふかきやまちのもみちしらて過まし

いとまあらはきてもみよかし都人山路にそむる木々のにしきを

古寺紅葉

かくふかき染つくすらん露しくれ世々ふる寺の庭のもみち葉

御庭の紅葉を見て

そめそめし御たちの紅葉をりをえて及なき身もみるぞ嬉しき
君かため庭の紅葉も心あらは今ひとしほの色まされかし
千世かけて君は見るらんときはなる松のこのまにそむるもみち葉

御庭の松の間の紅葉をみて

みとりなる松のこのまにあかねさす日かけににほふ木々のもみち葉

松間紅葉をみて

ひと木の紅葉の染わけたるを見て

いかにしてひと木のもみちうすくこくしくれの雨のそめわけつらん
露時雨染つくしてや名にしおふあか坂山にのこるもみち葉

殘紅葉をみて

氣月末の三日の日、品川東海寺にまうでゝ、池邊の紅葉をみて

底にさへもれぬもみちのかけ見へてくれなゐふかく匂ふ池水
池水にきしの紅葉のちりうきて錦をあらふ心ちこそすれ
色深くちしほにそめて磯山の紅葉のにしき浪やなるらん
たちましる紅葉の色に常盤なる松も千年の秋をしるらん
たをりもて君かたまはるもみち葉に深きめくみの色そこほるゝ
かく深き色みてもしれ世の中に名さへ高雄の山のもみち葉
春は花秋は紅葉にそめかへて櫻そ山と錦なりける
わけまよひ名ところおほきもみち葉にますちるものは心なりけり
そむるらん今は紅葉にひきかへて花に名高き吉の初瀬も

又

兼題　見紅葉

松間紅葉

紅葉の枝をたまはりければ

高雄の紅葉を手折て

櫻の紅葉したるを

紅葉所々（七十九歳）

磯丸翁とふらひまさせしに、庭の紅葉の殘れるをみて

稀人ののとふをまちてやあらしにもちらで殘し庭のもみち葉　良靖

御かへし

そめ〳〵し庭の紅葉のからにしき折よく君をとふかうれしさ　良靖

又

散のこる庭のもみちのかひありて言葉の露にいろそまされる　良靖

朝顔

さめ〳〵てのこる紅葉の宿に來るこゝろも色にそまる嬉しさ　清胤

よよかけてさく朝顔の花かつらくりかへしつつ君はみるらん
みたれ髪ときもあへすにむかひみて心なくさむ朝顔の花
あかすみんおくしら露のひるまてもさかりににほへあさかほの花
所からおくしら露のひるまては匂ひえならぬあさかほの花
くりかへし咲朝顔の花かつらいく秋かけて君はみるらん
咲にほふ庭のまかきの菊の露袖にかけても千世をへぬへし

あさかほの花をみて

庭のまかきの朝顔の花をみて

とくおきてみるそうれしさきにほふ庭のまかきの朝顔の花
めくみありてたひの枕をむすはすはしらて過きまし朝顔の花
さらぬたにあかぬやとりのたちうきにとゝめかほなるあさかほの花
いろふかくさく朝顔の花かつらかゝるなさけにたちそかねつる
おきてゆかは心なしとやあさかほの花のおもはんこともはつかし

いろふかきつゆのひぬまにあすも又とくおきて見ん朝顔の花

寛紀大人のもとにて、床の花かめに、植たる朝顔の花をみて

所からおくしらつゆのひるまてもにほひえならぬあさかほの花

植てみる君か千年のなくさめにさくかまかきのしらきくの花

菊

見るからに千年をのふるこゝちして秋のあはれもしら菊の花

菊

いろ深き庭のまかきの菊の花君か千年のかさしにや咲

御庭の菊の花をみて

友とみる君かかさしに千世かけて咲き匂ふらん庭の白菊

御垣もる風のたよりに菊の花やへ九重にさくとはかりを

禁中菊

ゆるせかし雲の上なる菊の花ふきくる風のたよりはかりは

九重に咲にほふてふ菊の花おほ宮人のかさしなるらん

雲のうへに今をさかりときくの花八重九重にさきにほふらん

盛とて見ることかたききくの花やへ九重のうちそゆかしき

九重にさかはつげてよ御垣もるかせのたよりにしら菊の花

吹上の濱よりうつしたまひし、菊の花の盛をみて

ふきあけの濱に咲てふ菊の花さなから浪のおもかけそたつ

庭のま垣に、殘菊の花をみて

まかきもるあるしやいかに菊のはなみても千世へん心ちこそすれ

殘菊花

けふもまたなかめくらしつしら菊の花にうき世のあきもわすれて

たのもしな世のうきこともしら菊の花にわすれてくらす此ころ

月

此まゝに窓の明暮見はやさんたをるはをしきしら菊の花

月をよめる

秋は猶光りもみちてひとゝせをひと夜に照すもち月のかけ

八月十四夜

まちえても又山の端の松かえのさはるそつらき夜半の月影

八月十四日の夜、雨ふれは

おろかなる心のやみにまよふみを照す御法の山のはの月

天保十四年八月十四日の夜、田原の殿の御館にめされて、月をみるとて（八十歳）

すみのほりちりもくもらぬ名にしおふ御世の鏡の山の端の月

すみのほりよものふもとを照すかな御法の山の峯の月かけ

月十五夜

ひととせをこよひ〳〵とまつよひの空にそみつる月も心も

八月十五夜

もろ人の忍ふ涙のまつ宵の月のかつらにかゝるむらさめ

八月十五の日、東なる人の、

めされきてうらはつかしきくすはかまはひまつはりて月をみるかな

とひきませは

とし毎につもれは老と成影も忘てめつるもち月の空

大空に光りもみちてひとゝせをまちしかひあるもち月のかけ

十五夜

武藏のの今宵の月に心なくなにをみかはにたつねきつらん

あふきみるわか心まて大空にみちこそわたれもち月のかけ

十六夜月

あかす見るそらもこよひの名にしおはばふけすもあらなんいさよいの月
あかすみん空もこよいの名にしおはゝふけすもあらんゐさよゐのそら
あき風はよしやふくともくすはかまうらかへしたとつけなたまひそ
くすはかまうらかへすともすなほなる君か心に秋やあるへき　嵐麿
うら風に雲さえはれて難波江のあしまにうかぶ三日月のかげ
ゆきくれて今宵はやとをかるかやの關もる月をみつつあかさん
所から月はさなから住吉のまつかひありて雲もかゝらす
さやけさはしけみもりきてくれ竹の葉末の露にやとる月かけ
さやけさは玉とみるまてむらさめの名殘の露をみかく月かけ
天の戸は明てものこる月かけをしはしたにみん雲なかかりそ
さし出る月のみ舟のほの〳〵と浪にうかへるかけのさやけさ
梶枕うきねなからにわたつ海の月のみ舟をみるもめつらし
さやけさはたくひもなみの玉もかるいらこが崎の秋の夜の月
明石かた照る月蔭に沖つなみよるさへみゆる淡路島やま
旅ねしてみるもめつらし植田なる稻葉の浪の夜の月影
ほのみへて田ごの浦波よること月のみ舟の渡るさやけさ
まれにきてあふきみんとはおもいきや御法の庭の長月のかげ

關路月（八十歳）
名所月
竹林月
雨後月
殘月厭雲
海の上の月をみて

○
月前眺望
或人へかへし
海邊月
九月十三夜

○
○
關月
月見て物思
庭虫

あかすみん雲さえ晴てもなかより照りこそまされ長月のかけ
いねかてになかめあかさんひとせをまちし今宵の長月のかけ
たちよりて月をみんとは思ひきや君かこと葉の花のはやしに
宿とひて言葉の花のほかにまた月をみんとは思ひかけきや
あれはてしふわのせきやの秋の空月かけならてもる人もなし
むかしより影もかはらてむら月にうつる我身のはつかしきかな
庭の面のちくさの花にうつり來ていろ〳〵になくむしのこゑ〳〵
露ふかきあさちか庭に夜もすからたれをまつむしねにはなくらん
この頃は夜さむおほえて庭もせにはたおるむしのこゑそひまなき
常盤なる名にもにすしてかるるかな秋の末のまつむしのこゑ
くれて行秋の末野の露しもによはるか虫のこゑそかれぬる
夜をさむみつつれさせてふ鳴虫もはたおる虫もよわるころかな
山ふかみ柴のいほりによもすからたれをまつむしなきあかすらん
小夜ふけてとふ人もなき庭の面にたれをまつむしなきあかすらん
さやかなる月にうかれて夜もすから友まつ虫のなきあかすらん
さめぬたにつゆけきものをきり〳〵す鳴ねなそへそ老のねさめに

山家虫
深夜虫
月前松虫
曉虫
田原の旅宿にて虫の題をえて

秋の夜のあはれもふかきくさむらにともまつむしやなきあかすらむ
草枕かりねの床の露けきになみたあらそふむしのこゑこゑ
くるゝよりをやむまもなくふる雨に誰をまつむし音にたてて鳴く
いせのあまのこふねならねとこひをほにあけて波路をわたるかりがね
惠みあれは草のたもとにむさしのゝゆかりの露のかゝる嬉しさ
御佛のみ山に生ふる松たけを寺より里へめくまるゝかな
秋ことにめくみたまへと千世かけてこの松たけに契りてそゆく
たなはたの天の羽衣をりをえて今宵ひもとく星あひのそら

七夕

難波の大城守に、行たまひし殿の、御むかひにまかりて

武藏のゝすゝきをはなも打まねききみかゝへさをさこそまつらめ

九月九日のいはひ（八十一歳）

くみかはす君もろともに千世やへん世をなかつきの菊の盃
くみそへんけふより千世の秋かけて世を長月の菊の盃
君かため眞弓月弓たゆみなくいのる心を神もうけなん
わせおくて穂に穂かさきてやつか穂の水ほの國の秋は豐秋
なき玉もきますといへは大そらをなかめつゝまつけふのゆふくれ
足田鶴のかしらはかりのくれないは千年の霜をはらひはてけん

名古屋里に玉祭りの歌

鶴拂霜

大空のくもりければ

或人へ返し

たゝせ給ふ日より、毎日空のけしきも、くもりふさかりてのみあれは

○

御舘の庭にとこはへの、稻の穂に出たるを見て、壽き奉る

なかめても雲の衣も立かさね影さへもらぬ星合の空
天の川ふかくちきりてたなはたの送りむかへつ君にあはまし
わかれ路をおしむ袂のぬれしより名殘たへせぬ秋の村雨
ふる里にかへりても猶あふきみんこの武藏野の月を心に
君かためみたかます田のほかに又御館の庭に出る稻の穂
庭の面に出し稻穂は君かためゆたかなる世のしるしなるらん

千本君の父君、初秋頃みまからせ給ふに

この秋はをはかな袖もいかはかり露けかるらん武藏野の空

或人へかへし

きて見れは月も心もすみよしの岸の松風雲はらふらん

雨夜虫

をやみなき雨夜の虫のなくねにも袖こそぬるれものおもふ身は

竹風

ふきかよふ音そわひしきくれ竹のよさむの風そ身にはしみける
くれ竹のよふかき空にふきかよふ風の音さへさひしかりけり
野をひろみうちまねかれてほのほのとをはなか袖にやとる月かけ

をはなと月をかける繪に

○

かくはかりをしむ名殘は武藏野の千草の露の玉の數數
ことしよりうき世の月をよそに見て花のうてなに君はますらん

秋ついせん

なきたまにたむけそめぬるみそはきの花の露にも袖ぬらすらん
さらぬたに老のねさめのさひしきに又音たつる萩のうは風
秋もやゝふけいの浦の風寒み重ていとへ鶴の毛衣

曉萩風

○

ある御舘にて、おほせおほせ事こふむりて

きのふよりけふは涼しくかよふかなころもが浦の秋のはつ風

天保四年八月、あつまなる上野にまうでゝ

わけくれは心なき身も袖ぬれぬちるかうへのゝ萩のしたつゆ
すまはやな櫻さきそふ春のみか秋も千草の花のうへのに

上人樣より、御くわし料のもの、たまはりけれは

秋ふかみ草のたもとにかゝるかなのりのうへ野の花のしたつゆ
いねかてにきくそわひしきさ夜ふけて夜さむの里は衣うつこゑ

名所擣衣

秋もややふけゆくまゝにたか里もよさむの衣打あかすらん

遠夜擣衣

あまころもうら風さむみさ夜ふけて波とともにやうちあかすらん

浦擣衣

旅にて、母のことを思ひ出て

ふく風にもろきもみちのいろみても思ひこそやれはゝきゝのもと

もみち葉の菓子をみて、よみて奉る（七十九歳）

めつらしな君か御館に紅葉くわし空ふく風のさそひきつらん

秋の懷の心を、よみて奉る

あふきみれは露そこほるゝ秋萩の花のうてなにのこる御かけを

山田の里にて

なかなかに秋きてみれはおしねかる山田のさとはにきわひにけり

暮秋霜

おく霜にあとしなけれはいつくとも行かたしらぬ秋のかわらし

猪鹿のそめをみて

あはれかく稲葉の浪のよるかけて山田のそほつもりあかすらん

橋立きり

時のまにおかも浪路もわかぬまにきりたち渡る天の橋立

みな月十一日の日、胤麿君、あつまへかへり給ふに、よみて奉る

もろ人のをしむもしらすむさしのの月をいそきて君はゆくらん

野露

かゝれかしわけ行草のたもとにも紫にほふ武藏のゝつゆ

岩鏡草の歌よめる

月影もさこそうつらめ夜な〳〵は露にみかける岩かかみくさ

○（七十八歳）

紫のゆかりあれはや武藏野の千草をわけて君をこそとへ

月のさやかなる夜、愛宕下なる御舘にて、歌よめと、おほせことかうふりて

雲の浪よるともみえぬさやけさはつきの御ふねの御影なりけり

空の海や雲の浪間をこき出てゝ月の御ふねのうかふさやけさ

秋の櫻によする述懷

みし春の花のさかりも夢なれや櫻か本に秋風そふく

大風の、いとはしく、ふきければ

風はやみなくやうつらの床のみか草の庵もあるる斗に
四方の海の波も治る世の中をいかてあらしの風はふきけん

秋野

きてみれは千草の花の錦なす秋の野邊にはしくものそなき
秋の野のをはなか袖にまねかれてちくさの花をみるもめつらし
山里はあらしのみかは流れ井のおとさえさひし秋のゆふくれ

夕井

たちのほるきりは霞のこゝちして秋をよそなるうくひすのこゑ

はこねにて鶯のこえた聞て

萩原君の、みもとにて（八十二歳）

きてみれはつゆさえふかくにほふかないまを盛の花の萩原
たび衣たちよる袖も紫のゆかりににほふ花の萩原

山家秋夕

おしなへてひなもの都もさびしきに山里いかに秋のゆふくれ

秋の比、又とふらひ侍て

しら露を袖にかけつつ花すすきまねかぬ野へにけふも來にけり

野鹿

宮城野の萩の花つまいろふかみしからみふせて鹿や鳴らん
みやきのの萩の花つまいろふかみきつゝなくらんさをしかのこゑ
さを鹿はおのかつまとやみやき野の萩の錦をきつつ鳴らん

田家鹿

山田もるかりほの庵のいねかてに夜な夜な鹿のなくねをそきく

月前鹿

なく鹿のこゑもあはれもふかきよの月にかこちてつまやこふらん
かくふかくものはおもはしさを鹿のなく音かよへる里にすますは

寄鹿恋思

さをしかのつまこふこゑに夢さめていとと思ひもふかき夜のそら
めくみあれはよるそ嬉しきおく露のたまのをすゝきまねくたもとに

ある人への返し

野をみなへし

秋風

○

天保十二年といふとしの、秋のころ、おく方様の。かふじられたまおしと聞て、おそれみしゝよめる（七十九歳）

山路

四

いたつらに露もみたすなをみなへし秋の野風はふきさそふとも
きりの葉のひと葉ちるよりふきかへて秋たつ風そ身にはしみける
四方の山の紅葉わけきてむさし野のちくさの花をみるもめつらし
東路や君の御かけをいかにしてうき秋露のたちかくしけん

又

武蔵のは君のなこりにむらさきもあけもみとりもつゆけかるらん
露おもみをはなか袖のひかたきにおもひこそやれむさしのゝはら

難波の宿りにてまみへし、むらた君に、よみてまゐらす。

難波にてなれにし君をむさしのゝ月にとひきてあふそうれしき

北嶋の里なる、みさ子の君のもとに、とふらゐて

秋の野の千草をわけてきた島の里に名たかき君をこそとへ
みちひろみ君かかへさをまつのはにつゝみまひらす露のしら玉

白露を奉るとて

露の白玉を、人々の恵み給ふに、よめる

あめつちのめくみなるらし言の葉に數々むすふ露のしら玉
野へゆかは露そこほるるをみなへしたか袖ふれしなみたなるらん
をみなへしおほかる中にたちよらはあやなくあたの名にやたちなん
色ふかき千草の中のくつかつらうらみかほにやはひかゝるらん

蘭

あけくれに君かめすてふじはかますそのゝ露も心しておけ

藤袴

ふちはかまきてこそみつれ庭の面にたかおりはへてかにゝほふらん

澤

庭の面の千草にましる花すゝきほに出てたれをまねくなるらん

山家秋夕

住わふる深山の秋のゆふくれはかせより外に音つれもなし

寄田祝の歌よみてよとありけれは

わせおくて穂に穂かさきて君かもるかと田の秋はいつも豐秋

又山田によする祝ひの歌

千世かけて秋はたり穂の八束穂に榮えさかえん宿の小山田

○

さえさえし夜半のあらしの音たえてけさめつらしき夜のしらつゆ

ふる里へかへるとて

御館なる庭の紅葉のから錦そめてまたはや又もきてみん

寄露述懷

露そむる庭の紅葉のから錦たち重ね來て君をあふかん

秋懷舊（八十歳）

たのもしなはてはちすのうへにおく我身もつゆの玉とおもへは

山霧

うつら鳴秋のあはれもふか草のあれにし里のむかしをそ思ふ

山夕霧

嶺のほとに秋や立らんけさ見れはきりのかからぬ山の端もなし

蔦懸松

たちこめてゆふきりふかきをくら山もみちは夜の錦なりけり

かゝるかな松にも秋のいろふかく染し千入の蔦のもみち葉

露しくれちしほに染し蔦かつらつれなき松になとかゝるらん

野田の里にて

おしねかる秋來てみれは名にしおふの田の里こそゆたかなりけれ

わせ奥て穂に穂かさきて里の名ののたも山田も秋は豐秋

秋さらは稻葉の浪のよることに野田もる月を君はみるらん

かせわたるいなはのなみのよるかけて野田もる月を君はみるらん

四　冬

初冬

ちりうきし秋のもみちのいろながら氷そめけり山川の水

冬

風さゆる空にしられておく霜にあとこそ見へね冬は來にけり

初冬（七十八）

をしまるゝこの長月の月弓のいるよりはやく冬は來にけり

ばつ冬

けさははや空にしられておく霜にあとこそみえね冬はきにけり

九月初冬

風さむみ空にしられし奥霜に跡こそみへね冬は來にけり

山初冬

あつさゆみいかにいそきて長月の月もかはらて冬はたつらん

冬日

今朝は早冬のしるしを三輪の山杉の稍にかゝる白雪

冬述懷

あつさゆみ春はかすみの駒よりも早きは冬の日あしなりけり

冬懷舊

梓弓はるの霞の駒よりもはやきは冬の日あしなりけり

老ぬれは頭のゆきと冬こもる身にも花咲春をこそまて

冬深み思ひ出てはしのぶかなゆきとふりにし人の昔を

殘紅葉
庭落葉
閑庭落葉
川落葉
庭朝落葉
落葉隨風
殘菊の花を見て
殘菊
夜時雨
初冬時雨
浦時雨
海邊時雨

(四)

思ひ出て忍ふとはかな月の名の霜ときえにし人のむかしを
をくら山いまも御幸をまつかけに心あらてやのこるもみち葉
梢よりちりし紅葉の錦なす庭の面にはしくものそなき
のかれ住む山の麓は木の葉ちる風より外の音つれもなし
冬されは落る木の葉の音ばかりあるかなきかの柴のかりいほ
ふく風におつるこの葉の音はかりあるかなきかの賤かかくれ家
見る人もなきわか宿の庭おもにあたらもみちの錦をそしく
谷川や錦をあらふ心ちしていはまにうかふ本々のもみち葉
けさみれは庭にもみちの錦しく夜半の山風さそひきつらん
露になれしくれにそめて今はまたさそふ嵐にまかすもみち葉
明暮に霜はおけともみし秋の色もかはらて匂ふ白菊
明暮に霜はおけともうつろはて殘るもあはれ庭の白菊
袖ぬれて老のねさめに聞もうきよ半の時雨の音のさひしさ
冬と秋とゆきかふ關の杉むらにのこる露さえ風にしくるゝ
さひしさは浪のよるよる音たてゝ衣かうらにしくれふるなり
あひきするうらのとまやのむら時雨あまもいくたひ袖ぬらすらん
冬ふかみ浪のよるよる風さえてころもかうらに時雨ふるなり

○

時雨告冬

渡時雨（伊賀國うへの御家中十月十五日正明亭にて當座）

旅衣君をとはんとむらしくれふるもいとはすわれはきにけり
夜を寒みつけの枕に音たてゝ冬來にけりとしくれふるなり
冬きぬとつけの枕に音たてゝ夢をとろかすさ夜時雨かな

時雨の松といふことを聞いて

言の葉の色つくまてとたりよりて頼む時雨のまつの下露
そらの海やこほりとみへてさやけさは秋にもまさる冬の夜の月
秋よりもあはれと深き空の海や氷とみゆるよはの月蔭
山川や水は氷てよとめとも流るゝ月のかけはとまらす
さやけさは波のしからみかけとめてしはし網代によとむ月かけ
朝日影さしのほるまて山のはにさえのこりたる冬の夜の月
まはらなるこのまもりきておく霜にさえこそまされ冬の夜の月
見る人も今はあらしの山の端にひとりさえ行冬の夜の月
たま松の此のまもりきて下草の枯葉のしもに凍る月かけ
雲はらふひろの山かせさえ〳〵て月影こほるにほのうみつら

冬月
寒流帶月
月照網代
寒夜殘月
破林霜後月
山冬月
松間冬月
湖上冬月

氷始結

冬きぬと日にもみきはにうす氷むすひそめぬる山川の水

氷

さえさえし夜はの嵐の音たえてけさより氷庭の池水

山川の流れもけさはこほるなりみなかみよりや冬はたつらん

みなひとをこほりてわたすすわの海やかゝるめくみのみはしなるらん

すわの海の氷をよめる

冬ふかみこほらはつけよすわの海の神のみ橋とあふきわたらん

道すくに人わたすとてすわの海や水もこほりて橋となるらん

朝氷を

夜もすからさゆるあらしのほと見にてけさより氷る庭のやり水

岩波のよるのあらしのおとたえてけさより氷る山川の水

春川

湖氷

吹きおろすひえの山風さえさえてなみさへこほるしかの唐崎

うきねする羽音もたえて水鳥のにほの海つら氷るさむけさ

ふきおろすひえの山風さえ〳〵て氷ゐにけりにほのうみつら

初雪

いとはしな路はつくともふみわけて人もとへかし庭の初ゆき

めつらしな庭のまかきにしら菊の面影とめてにほふはつゆき

天保十一子年十一月廿六日、初雪を見てといふことを

消ぬまにとくつけやらんふらはやとともまつ庭につもるはつ雪

いとはしな跡はつくともふみわけて人もとへかし庭のはつゆき

よのほとにふりやじつらん庭の面の竹の葉しろしけさの初ゆき

雪

深雪

海邊雪

とへかしな月にとはれしならはしにゆきにも人をまつの下庵

山風のかなたこなたをさそひきて猶雪ふかし谷のかよひ路

うちよする浪かあらぬか玉くしけふたみのうらにつもるしらゆき

うちよする浪もひとつになるみかた沖のしらすにつもるしら雪

浦雪

さえさえし浦のとまやの風の音もたえて渚につもるしらゆき

いとまあらはきてもみよかし名にしおふ衣かうらにつもるしらゆき

かくふかくみ雪つもりて白妙のころもうら浪よるもわからす

ふるからに海のおもてもみえぬまて衣かうらにつもるしらゆき

濱雪

埋もれて岡も渚もわかぬまてなみにそつゝく雪のしら濱

○

庭の雪とひこし人のあとゝめて道みえぬまてふりつもれかし

○（八十一歳）

ふらはやとひこし人のなくさめにあくまてつもれ庭の白雪

とへかしな君しとはゝや庭の雪あとはつくともいとはさらまし

かへしの心を

君かためあといとはすは庭の雪とくふみわけてとはましものを

庭雪（八十一歳）

庭のおもにあとはつくともゆるせかし雪ふみわけて君をこそとへ

心ある人にみせはや此やとの庭につもれる雪のけしきを

たちよりてみる人もかないたつらにひとりとしふる庭のしら雪

社頭雪

きえきえし夜半のあらしの音たえてけさめつらしき庭のしら雪
心あてのしるしの杉も垣もれて雪に名たかきみわの神山

朝雪

かくふかくみ雪つもりてみわの山しるしの杉も名のみなりけり
かくふかくみわの神杉埋れて雪こそ冬のしるしなりけれ
拂ふへきちりこそなけれ朝きよめあらしの庭につもるしら雪
さえし〳〵夜半のあらしの音たえて今朝よりつもる庭のしらゆき

山雪

ふもとなる里はしくれていつしかと山の峯につもるしらゆき
ふりつみて名のみ計の常磐やま雪にはのこる松もみえねば
月花のをりこそすくれ年をへて雪にとふ身をあはれとは見よ

雪中訪人

心なく花にもとわて月日さへつもれる雪に君はとふらん　くめ子

師走の末つかた磯丸ぬしのとはれけれは

君にけふとはれてうれしかす〳〵のこと葉のはなに冬をわすれてかな

かへし

冬ふかみ霜かれわたる下くさに君かこと葉のはな咲にけり

雪のかゝれる木を人のもとへ

ふる雪のしらたまつはきたをりもて君かみもとへおくるひとえた

古里雪

ふく風もなこ屋の里に草枕冬をわすれてたひねをそする
ふみわけて人もとえかしあれてしもむかしなからの雪のふる里

雪中餞

歳暮雪

雪待人

故郷にかへるとて

雪中餞といふ題を

禁中雪

車雪

旅雪

川雪

雪中眺望

雪老歎

雪のつもれるを見て

木の下にふりくる雪をさく花のちるとやみらんうくひすのなく
をしめともこえてゆくかなかくふかく年はつもれるゆきもいとはで
ふる雪にあとこそみえねとまらてとしはいつくのそらをゆくらん
花にとひ月にとはれしならはしにゆきにも人をまつの下庵
ふみわけて雪につれなくかへるとも春はみやこの花にとひこん
とりてはむこのみも雪にうつもれてましらなくなる冬の山の端
ふり積るみ雪も雲の上ならはなへて世ににぬひかりそふらん
を車のひかるゝほとの音はしてあとみえぬまてつもるしら雪
宮人の雪にひかれて出つるらんくもゐの庭にを車のあと
たひころも昨日けふとはおもへともうつる日數もつもるしら雪
かくふかくつたの下道うつもれて雪にそなやむあしからの山
旅のそらふりさけみれは白菅の笠とり山につもるしらゆき
冬ふかみふちも氷て岩浪のをとなし川につもるしら雪
とくさける花かと見れは雲の上の庭の梢につもるしら雪
夜のほとにふりやしつらんけさみれはやまてふ山につもるしらゆき
四方山にふる白雪をみてもうきおのか頭につもるとおもへは

年月をいかにふりてか天雲のうへまでつもる雪の富士のね
めつらしな富士の高峯をよすかにて雲のうへにもつもるしら雪
いや高くつもりつもりて富士のねの雪には及ふ天雲もなし
軒はなる梢にかかるしらゆきを花とやみらん鶯のなく
さえかえり雪はふれともくれ竹のよは春なれや鶯のなく
ゆるせかし庭の白雪ふみわりて返るなさけのある君のため

快樂庵

降雪よ野山もわかすつもれかし君かかへさのみちみへぬまて

つもるとてかへさの道はいとはねとふりすてかたき庭のしら雪
あとつけてかへらは庭のしら雪を心なしとや君はおもはん
ふみわけんあとはつくともふる里へかへさはゆるせ庭のしら雪
ふみわけていつちゆくらんふる雪に道こそみえね冬のわかれ路
友おなみかゝるわさとて白雪の古江に獨釣たるゝらん
ささ波やしかの山風吹からに木毎の雪の花そちりける
をしめとも心せはしく行としをしはしとゝめんせき守もかな
ふりつもる雪もいとはすふみわけてあとこそみえね春はきにけり
かそをれはことしもいたくくれ竹のひとよふたよとなりにけるかな
桂川流れてはやき年月をしはしとゝむるしがらみもかな

歳暮雪
獨釣寒江雪
雪散風
歳暮
歳暮（八十四歳）

雪中鶯
或人へ返し
かへし

歳暮忙
年暮
夜歳暮
闌歳暮

闌暮
老歳暮（八十三歳）

熱田の里にて春をまつとて
年内梅

すゝはきによめる
すゝはきを祝て
鏡餅をつくとて餅つきといふ事を

くる春をまつとはなしにいそかれて心せはしき年の暮かた
年の矢のいるかことくにあつさ弓はるはまちかくなりにけるかな
いたつらにことしもいたくくれ竹の一よはかりになりにけるかな
をしめともいかなるなこその關守もこえゆくとしはえこそとゝめね
關守もえこそとゝめね暮て行冬と春とのあふ坂の山
老か身も若葉の春をむかえんとおもへはたのし年の暮かな
梓ゆみ八十にあまる老か身も花さく春をまつそたのしき
年へぬる老木も心わか葉なるはるをむかへんことそうれしき
祈りこし熱田の神の廣前に春をひかへんことそうれしき
朝日かけさすかたえよりさきそめて春のこなたにほふ梅か香
庭の面に先さきそめてのとかなる春まちかほにほふ梅かへ
ふる年のちりもはらひて新玉のとしをむかえんことそ嬉しき
けふよりはちりもはらひて新玉のひかりのとけき春をむかへん
あら玉の年をむかえん鏡餅月日のかけにそなへまつらん
餅をつく日をあらためて新玉のとしをむかえんことそ嬉しき

あるをみな年の内に咲梅をあひすとて、歌よみてよとありけれは

梅の花世は冬なからのどかなる人の心をくみてさくらん

冬植物

植おきて雪のうちにも十かへりの花咲はるをまつそたのしき

冬こもる若木の櫻うつし植てはなさく春をまつそたのしき

雪のうちに若木の櫻うつし植ゑて花さくはるをまつそたのしき

寒草

かきわけて雪の中にも植おかはやかてこのめも春にさかえん

ふみわけてかりにたにとふ人もかな霜にかれふす庭のあさちふ

水鳥

夜を寒みこほらぬほとは水鳥の羽風にさはくかも川の浪

いつくにかうきねはすらん水鳥の賀茂の河なみこほるこのころ

いつくにかうきねはすらんおのかなのかもの川水こほるこの頃

をしかもうきねわふらん音たえて浪さへこほるすわの水うみ

白たへの波にあはれをうちそへてころもかうらに千鳥なくなり

ゆふされは友よひつれてよいつきの濱風さむみ千鳥なくなり

ふくからに汐風さむくなるみかたなみのよるよる千鳥なくなり

冬されは汐風さふみとも千鳥衣かうらにたちかへりなく

鹽風もさゆるころものうら千鳥浪のよるよるたちかへりなく

友千鳥ありし昔のあと問えはいまはなきさに浪のみぞよる

旅泊千鳥

寒夜千鳥

梶枕ゆめもむすはてあかしかたうきねなからに千鳥をそきく

にほの海やひえの山風さ夜ふけてこほるみきはに千鳥なくなり

海邊千鳥

風さむみ友よふ千鳥さ夜ふけてころもかうらにおちかへりなく

大崎の里にて

打よする夕波千鳥風さむみ衣ヶ浦に立かへりなく

冬されはかよふ千鳥も大崎の浪のまに〳〵こゑさはくなり

なるみの浦つたう千鳥の繪かけるを見て

むら千鳥汐風さむみ鳴こゑも遠くなるみの浦つたひゆく

浦千鳥

風さむみ衣かうらに立かへりなみのよる〳〵千鳥なくなり

○

そこふかき池に住てふおしとりのつかひはなれぬ契りともかな

おし鳥のつがひはなれぬかけうつす鏡のいけすもこほりゐにけり

寒夜燈火

さゆる夜はかきおこしつゝ友として夢もむすはてうつみ火のもと

さゆる夜のふくるも知らておもふとちかたるにつきぬ埋火の元

寒夜衾

さゆる夜も寒さわすれて思ふかなねやのふすまのあつきめくみを

埋火（吉川氏のみ許にて）

冬ふかみいとゝ夜さむのころもてになれてそたのむねやのうつみ火

霜

みし秋の千草の花のおもかけもうつろひかはるのへのはつしも

樵路霜

さひしさは霜の下草ふみわけてたき木をりつむ賤かかよひ路

鶴拂霜（八十一歳）

おく霜をうちはらひつつおりはへて千世をかさぬる鶴の毛衣

氷ゐし霜うちはらひあかねさす日かけにほふ鶴の毛ころも
あた鶴のかしら斗のくれなゐは千年の霜をはらひたてけん
雪ならて花ともみまし冬かれのきにもとまらぬあられふるなり
冬ふかみ空にしられしふく風もなこやのさとはのとかなりけり
くれて行年と共にや梓弓春よりさきにたちやかへらん

霰

名古屋の里にて

故郷へかへるとて

神無月より霜月の頃まて名古屋の里にものしたるとて

ふく風も名古屋の里の長閑けさに冬をわすれてたひねをそしる

ある人冬の螢といふことをよめとありけれは

夏ころももえしほたるの思ひ草ふゆの野へにものこるおもかけ
夏ころももえし螢のおもひくさかれのにも猶のこる面かけ
たひころも君にあはんとむらしくれふるもいとはすわれはきにけり
山里はひとめのみかはしかのねもかれてさひしき冬は來にけり
さひしさは人めのみかな冬來ぬとしかのねさへもかるる山さと

○（七十九歳）

山家冬

山さとはとひくるひともあらしふく軒はの松の音はかりして　春川

木の葉ちるおとより外にとふ人もあらしの山の松の下いほ

磯丸ぬしかひとよやとりけれは

すき間もる風や春けき紙ふすまうすくは人をおもはさりしを　春川

めくみあれは重ねてあつき小夜ころも寒さわすれて旅ねをそする
ことの葉の花の林にわけ入て冬もよそなる旅ねをそする

又

霜ふり月子の日祝ふ歌よみてよとこはれけれは

春たゝは野への小松にひきそへて千代もいはゝんけふの子の日を

霜降月神つかた磯丸ぬしのとふらひ給ふをよろこひて殘る紅葉をそへて

返し

うすからぬこころのほとは冬ふかく染て木すゑに殘るもみち葉　正陳

旅ころもをりえて君かめくまるるもみちの錦たちや重ねん
めつらしな千しほに染めて錦なす冬かれならぬ庭のもみちは

又

返し

冬來てものとけき宿にことのはの花もさくやと君をこそとへ

嵐のふきのみある〻柴の戸は何とこたへんことのかはもなし　正陳

又わかれなをしみて

冬ながらこころのとけきことのはのはなの林のかけそ立うき
旅ころも錦重ねて立かへりきみのみもとによらんとそおもふ

かへし

立わかれけふは行くとも旅衣ころもへすして又もとはなん　正陳

鷹狩

けふも又狩こそくらせはし鷹のつはさを月のかけに見るまて
御狩のゝ鳥たちも見えすふる雪にしらふの鷹やわけまよふらん
ふみわけてとふ人もかなしら雪のふるの山里さひしかりけり

文化八年十一月の頃、芝山家の御殿に召されて

おもひつつ面影そ忍ふふゆこもり花の都の春はいかにと

名ところのあるか中にもたくひなきみやこのふしの雪の明ほの
さゆるよはかりおこしつゝたのむかな老の友なるねやのうつみ火
うつみ火もあるかなきかに小夜ふけて老のねさめそさひしかりける
さえ〳〵し浪のよる〳〵音たてしあらしもこほる山川の水
音たてゝ夢おとろかす玉あられたま〳〵やとる玉の御館に
名におへは冬きてみれは奥霜におもかけにほふ花の萩原
わけのほりくれなは雪のほかに又比羅のたかねの月も見てまし
うつみひをかきおこしつつ思ふとちかたるにつきぬ夜半のむつこと

埋火

○

言の葉の花の林の長閑さよ冬も木傳ふうすひすの聲

降雪にうもるゝ宿らうくひすの木傳ふ聲に長閑さそしる
言葉の花し折すは鶯の木傳ふ聲をいかに聞めや　直躬

旅館霰

かへし

なへてふる雪もよそなる言葉の花の林に宿るうくひす

荻原を祝て

○

いろいろに匂へる君かことの葉は花よりも實の面白きかな　保行

又

いまはは人めも草も冬かれてのこるさくらかもとそさひしき
湊江にこきくる舟のみえぬまてかれはもしけき芦の村たち
いつしかとをはなが袖も霜かれてまねかぬのへはさひしかりけり

各樓によする述懐

寒芦滿江

枯野

冬天象

なかむれは雲こそかれ常盤なるみとりの空は冬かれもなし
霜かるく草木をみてもしられけり跡こそみへね冬通路
野へはまた露もひぬまにかみな月しくるゝ空に冬はきにけり

地儀

神垣や常盤かきはの柳葉に雪の白雲かけて祈らん
寒からん身を奥山の埋もれて雪ましりのこゑそさひしさ
春は又花をとはんとちきれともふりすてかたき袖のしらゆき
たきすさむ庭火のかけもさよふけて霜にさえ行あさくらのこゑ
冬ふかみみ雪つもりてゆたかなる御世のしるしをみわの神杉
ふる年も祝ひおさめて君か世の光のとけき春をこそまて

冬神祇

冬動物

冬餞別

神樂

冬祝

(五)

神祇釋教

大神宮の御宮にこもりて

年こもりひとかたならぬうれしさよ神のめくみと君のめくみと
天かしたみちや渡らん大般若ひもときむすふ法のこゑ〳〵
たてかへてうつしますらんあらたなるよもきかましの神の御社
法の海に身をまかせてや名にしおふ衣か浦にすみそめのそて
すみそめの衣かうらをきてみれは浪風まてものりのこゑ〳〵

○

○

○（八十四歳）

○　いのるそのわかたまの緒も長かれとかけてそむすふ神のかねの緒
○　いと長くわかたまの緒もよりかけてむすふも嬉し神の鐘の緒

五社明神にもうてゝ、神主の御館にこもりて

あふきてもあふくにたかきみやしろにたひねせんとはおもふかけきや
ひろ前に君そさかえん八百萬神のいかきのあらんかきりは

ほき歌よみて奉る

諏訪大明神にまうてて

諏訪の海や山路はるかにきて見れは心もすすし神の廣まへ
かしこしな御法の池による浪のしらへにかよふ四ツの緒のこゑ

放池辨天

法の花咲や上野に草まくらかりそめならぬ恵みをそ思ふ

上野御寺にこもりて

まれに來てあふきみんとはおもひきや法のうてなの珠の光りを

○（七十八歳）

あきらけき君かこと葉にみかかれてけふより珠のひかりをそませ　梅點

かへし

天保十二丑年三月二十日あまり八日、熱田大宮司、千秋伊勢守様へよみて奉る

千々の秋かけてや君はあふくらんもみちにほふあけのまた垣
いらご崎神のしきますひろ前に浪のしらゆふかけぬ日そなき

うろくすをうかへる歌

なむあみにひきあけられて名にしおふろくちのうちにうかぶうろくす

寄江述懐

にこりえの浪にたゝよふあまを船いつかみのりの海にうかはん

或上人の御法を拜聽して

人わたすちかひの船はありといへとのりえることをしらぬおろかさ
かのきしにすくふあみたのなかりせは身はくるしみの海にしすまん

すくはるる御法のあみのなかりせはそこのみくつのいかてうかはん

三世諸佛の御名を、となふるとて

御佛の御名をとなふる人數にもらしたまはぬめくみをそおもふ

御法船

渡るへき波間もあらはみなれさほさしてをしえよのりのふな人
海士を船たか瀬の波はたかくともいつかのりえて安くわたらん

草も木も、佛心ありと聞て

心なきものとはいはし草も木もかせのかよへはこゑかはすなり
あすありと思ひのばすな何事もたゝけふ〳〵とつとめおこなへ

○

古寺鐘

山寺のかねのこゑきく人はみなかゝるうき世の夢さますらん

三河の國大崎の里なる、み寺にて、じかひのかひし禪師に、よみて奉る

とくのりのふかきめくみは大崎の濱の眞砂の數もをよはじ
かゝる身のまよひのくもははれすともけふの御法の月はくもらし

雪中鐘

ふる雪に道もひはらもこもりくの初瀬のかねの音はかりして

尾張の國なる、於八事山に、法花八卷、一字一石に三禮して、書寫し給ふ聖の御もとへ、よみて奉る

くちせしな苔はむすともうこきなき石にかきおくのりのことの葉

文政十年といふ年の、三月廿一日、常光寺にて、新參のひろうありけれは、我もまねかれて、よみて奉る。

ふもとなるちりをも照せ雲わけてたかねにのほるのりの月かけ

千手寺觀音にまうてゝ

しつむ身をひきあけんと一みほとけは御手の數々のへてまつらん

古寺花

みほとけのたむけにとてややまさくら御法の庭に咲にほふらん

常泉寺にまうでゝ、庭の櫻を見て

おのつからたむけてならん御佛のみのりの庭のやまさくら花

寄花無常

はかなきは何にたとえん朝顔の花よりもろきつゆのたまの緒

法水

そのかみはたか汲そめて萬代に流れたえせぬのりの眞し水

山寺に一夜こもりて

山たかみうき世の外の草枕こよひやのりの夢はむすはん

御法

ねかへたゝ御法の山にうまれきてむなしくかへることやくやしき

しるへなき麓の里にまよふ身を道ひきたまへのりの山守

まよふ身の心の闇を照せかしたかき御法の山のはの月

尊泉禪師の御法を、拜聽して、よみて奉る

とくのりの花のはちすの露うけておろかなる身もそてそぬれける

磯丸大人、我演法のをりから、歌よみて給ふに

かへし

あはれしるたもとや露のむすぶらんむしのねはかりとけるのりにも　尊泉

和歌のうらのそこなきはめはなみならぬ御法の海もほかにやはある

法水

のりの水ふかきあさきはくむ人の心々のうつはにそよる

法花寺にまうでゝ

むかしたれのりのはちすのたねまきて世々にたへなる花のさくらん

ある禪師の、とき給ふ御法を、拜聽して

なみたかきちかひの海の渡しもりいかてのりよき梶をえたらん

禪師御かへし

人わたす名のみ難波のうらとへとあしわけをふねわけもならはす

是心是佛といふことをよめと、ある上人のおほせ給ふによめる

いま見れは心のうちにさく花をしらてたつねしことをしそ思ふ

手にとれす目にもさたかに見えねともみのりの花は心にそさく

御法の花といふことを

ふみわけてのほらは峯の月もみん御法の山の雪ふかくとも

雪山

いや廣く世々に榮えてあふかれん佛の慈悲のふかき山寺

宇利慈廣寺にまうでゝ

かしこしなしたつ岩根にしきましてうこかぬ御世をまもる神垣

萬代もこゝにいなりのますかゝみかけてくもらぬみかけあふかん

法樂

かみかけてしもかしもまて豐川のふかきめくみを世にあふくらん

お多賀大明神へ、鐘の緒を上奉るとて

いのるそのわかたまの緒も長かれと神の御前に結ふ鐘の緒

北斗星へ奉納

明暮に南のためとにし東北の御星をあふく言の葉

玉津島明神

たくひなき光は世々にしきしまの道を守りの玉津島姫

住吉明神

明暮にあふけもろ人名にしおふよに住吉の神のみかけを

人丸明神

草くさの茂きもわけて言の葉の道を明石の神はこの神

神の御前に榊をうふると聞て

萬代も常磐かきはにさかへまし神の御前にうふる榊葉

多賀明神へ、奉納の歌よみてよと、ありければ

宮柱ふとしきたてゝ祝ふかな限りしられぬ御世のさかえを

御祓（八十一歳）

神かけてはらひなかさんみそき川つみもさはりもなみのまにまに

なる神どんけんの御社にて（八十二歳）

かゝる時ねかへは雨となる神のひろきめくみはかきりしられし

やたの里なる御社に奉納（八十四歳）

み鏡のみかけうつしてあふぐかな名におふ里のやたの御社

奉納（八十三歳）

やすかれと大うなはらをひろ前にまもりますらんたとのみやしろ

神頭榊

御社にたてる榊は萬代の霜はおけともいろはかはらす

天保十三年夏、多度大神宮にまうて〻（七十九歳）

はる〳〵と海山こえてきた伊勢の神の宮ゐをあふくかしこさ

住吉明許一法樂

あふけたゝ今此御世に住吉の神の惠みは限りしられす

青木君の御許にて、大御神の御木ひきの御綱、打給ふ日、めされて

めくりきてあきふみんとは思ひきや神の御木ひくみつなうつ日に

たのもしな齡もかくや長からん神のみきひく御綱うつ身は

あざぶる五島君の御屋敷の御社の、御さいれいの祖ひきをとりて、花とあみをとりて

うけつきて世々に榮えんけふよりは神の惠みのくらゐたまへは

わたつ海の神も我身をもらさしと惠のあみにうけやひくらん

法樂

櫻の宮にて

すくはれんことそ嬉しきわたつみの惠のあみのめにもれすして

たわつみの波の數々世をまもる神の惠はかきりしられす

えひすの繪かけるがくに

御世のため火をしつめますこの神の廣き惠をあふけもろ人

秋葉山へ、萬燈をあけ給ふとて、諸人にひろめよと、おほせことかうふりて

まもります神もいさまんなにしをふ櫻のみやはいまさかりなり

野も山もいまを盛と咲にほふいつれ櫻の宮ゐなるらん

常とはにかけてもまつれおのつから德をえひすの神はこの神

世を照秋葉の山のともし火の數に　わはる人そたのしき

奉納

この山のあらんかきりは有明のつきる時なく照らすともし火

地の神を祭とて

八百萬こゝに稻荷のますかゝみかけてくもらぬ御かけあふかん

稻荷の御社にまうてて

人草も茂り榮えん八百萬この地の神のあらん限りは

奉納

茗荷谷あらせたまへと祭かなこゝに稻荷の神の御社

萬代もここに稻荷のます鏡御かけをうつす宿そさかえん

遠州山住（奥山）山住神社奉納のうた

わくるとも猶おくふかき山住の神のめくみはかきりしられす

岩津天神樣へまふてて

思ふこと岩津と祈る心をは神もあはれとうけや守らん

大黒（七十八歳）

この神のゐます所を尋ぬれはわらふてくらす宿にそありける

○ 世をてらすみたのみのりの光明寺かゝるみかけをあふきつゝこし

弘法大師の御衣木の古株をみて

世々かけてかれす老せすさかえゆくこれや御衣木のきとくなるらん

地藏菩薩へ法樂

たのめ人むつのちまたにたち給ふ此の御佛のひろきちかひを

○ あふきてもあふけもろ人世を照らす大慈大悲のひろきみかけを

鬼の念佛といふ事をよめる

もふせ猶鬼の念佛かねしもく地獄のもんをうちやふるまて

奉

まよいぬる心のやみを照せかしかかる御法の山の端の月

○ むかひみてにこる心をすませとやうつしたまはる水の御鏡

○ 人しれぬ心にさけるのりの花いかてうつろふ時やあるへき

不生不滅

出ついりつうき世の中にあり明のつきぬは人の心なりけり

○ 西東きたを尋ねてまよふなよなんなみにある地獄極樂

ある上人 御法を拜聽して

雲ふかき心の闇にまよふ身を照せみのりの山の端の月

石のかろとに、數々御法をかきて、始め給ふに

世々をへて苔はむすともくちせしな石にかきおく法の言の葉

みる人の心をこめてこのむろにおさめおくらんのりの數々

此むろの中に治むることの葉のちきりしられす惠をおそ思ふ

眞砂なる數はよむともこの法のふかき惠みは限りしられし

高泉禪師の御法を拜聽して

剃髪し給ふとて、歌よみてよと、ありければ

法の道我にをしへよ掉さして誓ひの海をわたるふな人

黑髪をおろすけふより心をも猶こくそめよ墨染の袖

ひとしほに心をそめよ墨そめの衣のいろはとにもかくにも

うらやましうき世をよそにふみわけて君は御法のみちもとむらん

冬 釋 敎

のりの山雪ふみわけし御佛のあとはたえせし萬代までも

奉納地藏尊へ

ひと筋にみちひきたまへ地藏尊むつのちまたにたち給ふらん

極樂の道ををしへて月も日もいつれはやかてにしにこそいれ

高木の里なる御寺にまうてゝ

すみのほり世を照らすかな里の名の高き御法の山の端の月

○ 諸人の結ふちかひをたかえしと跡たれたまふあをの峯哉

笠寺にまふてて

天か下身のほとまもるかさ寺の大じ大ひの影やたのまん

御神木五百枝松千枝杉を

あふけ人衆生さいとに立ち給ふこの御佛のかゝる御かけを

しやくきやう

たのまゝしみたのちかひのりの舟うき世の海を渡るまにまに

御寺にまうてて

露ふかきのりの道芝わけゆけはおろかなる身も袖そぬれける

高野山へおくる

なむ大師たすけたまへと高野山風のたよりにおくることの葉

時天保十己亥年二月十二日、芝山様御殿の御庭にて、御歌御當座には、ふしきなるかな、伊勢大神宮御祓、吹き

來て歌差上奉候や。

○

行き寺にまうてて

○（八十歳）

諏訪大明神へまうてて

えびすの神をかきたる繪に

天照御神宮にこもりて

八月二十五日奉納（七十九歳）

天つ風伊勢の御祓さそひきて君の御内に神やとゝまる
のぼりきてけふこそあふけ山たかみかかる御法の花のうてなを
山風にうき世のちりをはらはせてすすしかるらんすみ染のそて
ひかれ行地獄のきつなきるものはなみあみたぶの慈悲のみやうけん
諏訪のうみや山路はるかに來て見れは心もすめる神の御たらし
とことはにかけてもあふげおのづからふくをえびすの神はこの神
ひくしめのおもひかけきやこむ春を神垣にしてまたんものとは
とことはにかけてもあふけから衣きたのの神のひろき御影を

神祇

不生不滅（七十七歳）

○

明暮に神拜すとて、おそれみ〳〵よめる

世にたかきのりの岩屋のねかふことこむる心はうこかさりけり
たのめ人萬代までもうこきなきのりの岩屋のおもきちかひを
神はわがいのる所にます鏡うつるみかげをあふくかしこさ
出つ入つうき世の中に有明のつきぬ寶はみたまなりけり
君かため御世やすかれと明暮にいのるまことは神そしるらん

やよひ二十日の日、みめくりのみやしろにまふてて、雨ふり出しけれは

海のさち山のさちをもそのままにたむけてまつる神もうけなん

ある時大崎の里なる御寺にまうてて

ふることの夕たちならて春雨はいのらんものをみめくりの神

稲荷にまうてて

かゝる身のまよひの雲ははれすともけふのみのりの月はくもらし

機おり井といふに、立寄て

かへりても心にとめて稲荷山よよにあふかんみつのともし火

歌薬山にて歌奉るとて

掛まくもあやにとうとき神山のみねのましみつむすふ涼しさ

常樂寺にまうてて（八十一歳）

ふみのこすあともはつかしいそ千鳥かかる御法のやまのたかねに

極樂はしらねとかゝる常樂寺これやこの世の淨土なるらん

家内和合の歌、よみてよとありけれは

もふせたゝ口にねんぶつ手に珠數の玉のくりきは限りしられし

あらそはてたたむつましく住の江の神の心にまかせてしかな

天保十一年子六月十日あまり四日の日、小松山原山にまうてて

御佛のめくみもふかき小松原けふより千世をかけてたのまん

世々かけていはふ子の日の小松原きみか千年のためしにそひく

奉納

あつさゆみやはたの神のひろまへに心のしめをかけていのらん

○　かみほとけひとつうつはの水と波立つとゐるとのさかひなりけり
よし元明神にまうてて　我身世にあらんかきりはとなへつつよしえの神の御名はわすれし
衆　たたたのめたのむ衆生をすくはんとちかひはおもきいしの御佛
岩津天神へまふてて　思ふこと岩津とゝめる心をは神もあはれとうけやまもらん
○　かしこしなかゝる高根にましまして四方の麓を守神垣
世にみつるかきりしられしからころもきたのの神のひろきめくみは
からころもきたのゝ神のたもとより千里に香をる花はこの花
天満宮をうつし祭給ふに、よみてまひらす　あふくかなたちてもゐてもからころもきたのゝ神をこゝにまつりて
桑名の里なる、三崎大明神、春日大明神の御社に、まうてて　伊勢の海の三崎春日のひろまへになみのしらゆふかけていのらん
奉納（七十九歳）　かしこしなここに稲荷のますかゝみくもらぬ御世にみ影うつして
佛　名　たふとさはとなへてもしれおのつから三世の佛のみなの數々
弘法大師の御衣の、あかめの木なりとて、うき島といふ所に、ありけるを見て　むかしよりかれす老せす榮えゆくこれやみそきのきとくなるらん
重原の里なる、田中山にまうて、見かへりの弘法大師の御像を、拜み奉りて（七十八歳）　御佛も名殘をしみて見かへりの姿をこゝにうつしおくらん

祓
五十年忌をいとなむとて　神風の吹にまかせてはらひなは身にはのこらしつみもけかれも
佛　名　いそとせのけふのむかしのいとなみによりくる人も袖ぬらすらん
神　拜　けふといへは唱へてそしるたふとさを三せの佛の御名の數々
越戸の里に、弘法大師を、うつし給ふとて、歌よめと、ありけれは　扇もてひらけるみよをあふきてもあふくに高き天つ神かき
御社にぬかつき奉りて　あふけたゝ佛の御名も高根なる麓の里にうつすみかけを
奉　納　ふしておもひおきてもあふけ萬代をいはひこめたる神の御社
天保十三年十月廿日あまり一日、法の師に、野田の里よりいきなはれて、雪と夜、旅の枕をむすふとて（七十九歳）　ねかはくは大師遍照金剛と御名をとなへてあふけもろ人
すみ染の袖にひかれておもひきやかゝるみ寺にたびねせんとは
めくみあれはかゝるみ寺にたび枕今宵はのりの夢やむすはん
かへるとて　をしみつゝかへる袂にかゝるかなふかきみのりの道芝のつゆ
御神にねき奉りて　われもよし人もよかれと明暮にいのる信は神そしるらん
地の神をいはひ奉りて　君かため里の榮え世々かけて此地の神をいをのることの葉
奉　納
神　道　たすけます大師遍照金剛とみ名をとなへてあふけもろ人
いつくそとたつねて見れは身をまもる神はまこと、の道にそありける
葉月十八日、岩屋のお寺にまうてて

うこかしな世々ふりぬとも御佛の法の岩屋のおもきちかひは

冬の半過るころ、眞福寺にまうてて

冬こもる梢も匂ふとことはにさくやみのりの花のやま寺
あとゝめてなひく柳の池水に今もみのりの月そすみける
水の音も谷のあらしも鳥のねもみのりのこゑの外にやはきく
みよやすくいのるまことは鳥かなくあつまの神もさこそしるらめ

柳池院にてよみて奉る

山寺にまうてて

御世をいはひて（八十三歳）

奉納　天保七年五月吉日　願主　山本權兵衛

神かきにかけていのらんやま川の清きせによる浪のしらゆふ
きまつる神の御前のぬさとりてうちやはらはんちりもくもりも

○

ある僧の出世の歌こひ給ふに

ひと筋にわけのほらなん法の山峯の雲間の月をみるまて
旅のそら心をぬさとたむけ山神もあはれとうけやまもらん
ひと筋にみちひきたまへ地藏そんむつのちまたにまよひぬる身を
ありかたやわれらかためと地藏そんむつのちまたにたち給ふらん
小坂井の水にも清くうつるらん大慈大悲の照す御かけは
にこりえの波にたゝよふあまを船御法のうみにさそへうらかせ

○（八十四歳）

奉納延命地藏尊へ

觀世音菩薩へ

二月十日餘三日、須佐の里なる、正衆寺にまうてて、よみて奉る

のほりてもをることかたき山寺の御のりの花は及はさりけり

不生不滅といふことをよめと、ありければ、

御佛のひかりはとはに有明の月日とともによをめくむらん

於八事山に、法花八卷、一字一石三禮して書寫し給ふ聖の、御もとへよみて奉る

くちせしな後の世までも數々のいしにかきおく法の言の葉

大般若ひもときにまひりて

大はんにやきやうの御法のいとなみにあはんものとは思ひかけきや
めくみあれは御法のうみのいとなみにあまもよりきてあふそうれしき

つくでといふ所の川しり村の人、もゝめにてまねらすよみてまねらす

奉納

川しりの里の清水のすむからに大慈大悲のかけそうつれる
ともえ川汲みてもあふけ世にめくむ大慈大悲のふかきめくみを
御佛の御手にひかれてのりの道わけくる人も限りしられし

法樂（七十五歳）

小中山の里なる、御寺にて大般若のひもときはしめ給ふをりしも、まふてて

あらたなるひもときそむる大般若けふのくとくはかきりしられし
天のしたにみちやわたらん大般若ひもときむすふのりのこゑ〳〵

いろは歌　南無阿三陀佛入

いそけ人みたのくせふのみ舟なるなむあみた佛にのりなおくれそ
ろめいなるうちにいそきて法の舟なむあみた佛に身こそ安けれ
はてしなき九海に又もしつみなんなむあみたふつのみのりきかすば

日々にごおんほふしやと思ひなばなむあみたふつねてもさめても
ほんのふのうすきあつきをかへりみてなむあみたふに身をやまかせん
へたてなくたすけみちひくせい願はなむあみたふつの大悲なりけり
唱ふれはこゝにいなから極樂になむあみたふの花さきにける
ちえの目もかひきやうの足たゝぬ身はなむあみたふの舟そ嬉しき
りくつおばはなれてみたのせい願のなむあみたふのみのりきくらん
ぬるかうちも心にとめてわするなよなむあみたふのみのりきくらん
るてんするきしんのつみはおもきゆへなむあみたふつのちからおよはす
をよびなきわかはからいをすてよかしなむあみたふにおもゐまかせて
わけのほる麓の道を照すそのなむあみたふつは峯の月かけ
かの國のいけのはちすやひくらんとなむあみたふのこゑのひゝきに
よねんなくわきめふらすに渡り行なむあみたふのかゝる御橋を
たゝたのめむぢやうの風のふかぬまになむあみたふの花のうてなに
れんたいにのりえても猶わするゝなむあみたふの深き惠は
そよ〳〵とふく音つれもなつかしきなむあみたふの國のにし風
つみふかくまよふこの身をあはれみてなむあみたふの御手の糸かな
ねかふへしいきのとゞまりは極樂のなむあみたふの花のたのしみ

なかき世のねむりさむれはおのつからなむあみたふに出る日のかけ
らくらくとねたりおきたりけふよりはなむあみたふのふところに住
むつましく親と兄弟もろともになむあみたふのこゑをよろこべ
うきことの重なる身こそたのしけれなむあみた佛にすかるめてたき
ゐまいとてしなは淨土へまいりなんなむあみたふの聲にまかせて
おくふかきみたのみのりをたつぬれはなむあみたふの口にこそあれ
くさもきもかれしのへにそさかにけりなむあみたふのまつのみのりは
やまさかもなき極樂のちかみちはなむあみたふの六じなりけり
まつ代の五濁あへせに生れてもなむあみたふのみのりきくらん
けたいなく心の内そはつかしきなむあみたふのしひのみやうけん
ふしおかめこの身を救ふものとてはなむあみたふつはかりなりけり
こゝろには忘るゝひまそなかりけるなむあみたふのくしやう三昧
えきもなき雜行さつしふりすてゝなむあみたふをたのめみな人
てきとなる心の鬼をひるかへるなむあみたふやりけんなるらん
あや錦ぬのやつとにもつゝめともなむあみた佛は黄金なりけり
さい方のみたのぢやうとへ生れんとなむあみた佛をふかく信せよ
きえてゆく露の命はこくらくのなむあみた佛の花のうてなに

ゆめのよとさとるけうより極らくのなむあみた佛のこゑそこひしき
めくりくる無常の風はふくとてもなむあみた佛のこゑそ樂しき
みつからもしんじ人をもすゝめてやなむあみたふのごおんほふせん
ゑんありて淨土へ生る身のうへやなむあみたふのめくみなるらん
ひとすしにたすけたまはる本願のなむあみたふの綱そ樂しき
もとよりのこと惡人をおめあてのなむあみた佛のちかひたのもし
せい願に身をうちまかせまゐらせてなむあみた佛を唱へこそすれ
するゑの世に生れなからもあひかたきなむあみた佛にあふそ嬉しき
京々とながれもはやいあすか川なむあみた佛の國そ近かよる
一こふにふた心なく信するをなむあみたぶつのせしんいちきやう
二こ菩薩しやうしゆうもゐにやう〳〵となむあみた佛とともにらいごう
三ほふのめつしんまても留まれるなむあみだ佛のみのりなりけり
四十八いつれもおろかなけれともなむあみた佛の十八の願
五ふしきの中に佛法ふしきとはなむあみた佛のこがんなりけり
六万の諸佛さんだんごねんするなむあみた佛のしんじつのしん
八百万神やまもらんひたすらになむあみだ佛をしする身の上
九重の花の淨土のたのしみはなむあみたふつをとのふ身にあり

百みとて限り知られぬ飲食もなむあみだ佛の利益なりけり
千秋や万世とても限りありなむあみだ佛は限り知られし

(六) 呪　禁

猪よけの歌よみてよとありければ
心あらはうえてししてもみつきものつくる田はたをはみなあらしそ
うさぎでもうえてししてもみつぎものつくる田畑をはみなあらしそ
兎猪除歌
馬あらふろとてうたこひければ
からかはんあらぶることをわすれくさ手なれの駒よこゝろしつまれ
馬病の治る歌
ひつじさる鳥いぬいねもうしとおもひとらうたつみの馬をだすけよ
鼠除
いかてかくねすみおきすみ夜もすから人の住家のものあらすらん
水虫
人の身にかゝるはおろか名にしおふ水むしならは水にすまなん
油虫よけの歌
とぼし火のためにもならぬ油むし出るはむやく消もうせなん
あま火といふ虫よけの歌（八十歳）
あま火ならもゆるとも消よむしならはのへし草葉の根へかへれかし
むかてよけ
いそけ行おのが住家は百足山ゆみ矢の家にいるは身しらず

へびよけ

へびならは蛇の道すくに池か山よるなさわるな人の住家に

かまほこよけ

おのか名のかまほこ持てかりとらんわくとも虫の根のたゆるまて

のみ、蚊、しらみよけ

人をのみくろふはおろか身をしらみ人たる物の身にはやとらし

蟹よけ

人の住家にはよるな穴を出て穴にいるこそ蟹の道なれ

田畑虫祓

みつきもの作る田畑につくむしをはらひたまへよ國津神風

天火虫除

天火ならもゆるとも消虫ならは野邊の千草の根に返らなん

蠅除

ふきはらへこと葉のかせよ夏むしのこかれし跡のはひものこらす

蚊をよける歌よみてよとありければ

花はとくちりにしあとにのこるかをふきはらはなん木々の下風

ありよけの歌

穴を出て穴にいるこそありのまゝ人の住家によるなさはるな

あんとに虫のいらぬ歌よみてよとありければ

夏のむしおのか思ひにもえなからなとともし火のかけによるらん

井戸に長虫のわくとて

いとはるゝ井土をはいてゝ人のため山川にすむ命長むし

井戸に虫のわき出るとて歌よみてよとありければ

いたつらに出るはむやくねかはくは淡と消なん井戸の水むし

かけ井の水のますうた

ねがわくは出よ眞清水君かため思ひかけ井のひきあまるまて

田の井戸の水のます歌こひければ

人のため田かやすよりもたえゝなく流れ出なん田井の眞清水

庭鳥の宵なきするとて、歌よみてとありけばれことふきて

行末も猶よきよふにとりなをしをしやとのさかえをつくるよひなき

柿のあまくなる歌

かきむすふ言葉の花に今年よりしぶけをとりてあまくなりなん

梅にみならぬと歌よみてよとありければ

いたつらに咲けるはかり今年よりみのなることをならへ此花

ある人竹の病を、はらふうたこひければ

いたつらにかるるはむやくめもはるのみとりにかへれ竹のこのきみ

竹のかるゝとて歌よみてよとありければ

いたつらにかるゝはおろか千世かけてみとりにかへれ竹のこの君

屋敷をもとむるとて（八十二歳）

君かためあふきまつらんうけえたるこの地の神のあらんかきりは

屋敷をもとむるとて

君かためあふきまつらんしきませるこの地の神のあらん限りは

ある人住所さたまる歌こいければ

心からまよふはおろかいでゝみよいつくも同しわか里にすめ

養子できる歌

君がため千世を契りて榮え行子の日の小松うつし植なん

ねかわくは千世をかけてひくまつの子の日の小松うつし植なん

春たゝは千年をかけてこの宿に子の日の小松うつし植なん

とくえにしある歌よみてよとこひ給ふに

むさし野になひくふた葉のひめこ松とくひかれなん子の日すくさて

出生子そたつ歌

ねがわくは御館の小松今年より千年をかけて生ひ出よかし

御神に大漁を祈り奉りて

海士をふねあみもてむかふうろくづをたきよせたまへわたつみの神

御神に大漁を祈奉りて（八十歳）

ひくあみのめにあまるまてうろくづをだきよせたまへわたつみの神

大漁満足

うろくすをたきよせたまへ引網の目にも口にも入過るまで

漁

うき波にたたよふよりは大あみにひかれてうかへ海のうろくつ

なむあみにひきあけられてうろくつのいまや六じのうちにうかはん

ある女よるおびえるとて歌こひけれは（七十九歳）

ひきしめてゆるすなよ夢おとろかすおのがこころのこまのたつなをす

明石の神にいのり奉りて（八十四歳）

うすかすみかかる我目もほのほのとあかし神にいのることの葉

ある乙女子か八重歯ぬける歌よみてよとありけれは

ねかはくはわか歯にさはる八重の歯を言葉の風よふきおとせかし

生目の神に祈奉て

ねかはくはかすむ我目も安らかに生目の神よ守りたまはれ

井戸をほるとて歌よみてよとこひ給ふに

年をへてかすむ我目のはるゝまて生目の神をいのりてそまつ

旅え行たる人のはや返る歌

あまるまて出よ眞清水ほる井戸のあらんかきりはくむ人のため

返し

ふる里にはや立かへれ旅衣君まつ風のふかぬ日そなき

家内安全（八十四歳）

音つれて耳にはきけといとはねば心にかゝる浪風もなし

家内の榮る歌こひけれは

むつましく君もろともに住吉のきしの姫まつ千世も榮えよ

あきない繁昌

あらそはてたゝむつましく住の江の松に契りて千世も榮えよ

○

かけねなく賣買事を安くせは徳は升々はかりしられじ

船中安全

あまを舟あすの渡りのやすかれとけふよりいのるわたつみの神

船中安全（八十四歳）

綱手縄たゆむ間もなく渡津海の神の惠をおもへ舟人

いのるそよ清きなぎさによるまては君か舟路のつゝがなかれと

祈るその清きなきさによるまては君か舟路はつつかなかれと

酢の獨のすめる歌こひ給ふによめる（八十四）

君かためにこるはおろか名にしおふすならすまなんならひある世に

田に汐のさすとて歌こひけれは

なこりなら浪路に返れ海ならぬ田にさすしほのみちはあらしな

新田のために井戸をほるとて

君かため出よ眞清水みつきもの造るあらたにひきあまるまて

おはりのてきる　うみつむき立ぬひはりの糸なみを心にかけてわすれすもかな

木のみちのたくみの家の柴ゆる歌よめよとありければ

すみ縄のすぐなるみちをわすれすは末長し家もさかえん

ものかくことに手のふるふとて歌こひければ

ふてをもち硯のうみの神かけてもじをかく手のふるひやまなん

弓のあたる歌よめとおほせことこふりて

梓ゆみまゆみ月ゆみたゆみなく祈はいまもとほらさらめや

ものおほえのよき歌よみてよとありければ

何こともみしめの縄のたゆみなく心にかけてわすれすもかな

うときとてちゐつく歌にひければ

うとき身もかしこき神にいのりなはちゐ枝の杉のかけやそはまし

ある人ものおほゆるよふに、歌よみてよとありければ

鳥の跡とめて覚えよふみみつゝ濱の眞砂の數おほくとも

乳出る歌

あまるまて出よ名にあふちくま川流をくみてそたつ子のため

女の月やくのよくめくる歌よみてよとありければ

月なみの花のした水よとみなくその時々にゆきめくれかし

ある人とくつまむかへる歌よみてよと乞ひければ

春たたはとくもひかなん姫小松子の日する野のをりをすくさて

おもふ人とえにしある歌こひければ

ねかはくはなほ末かけてひたち帶むすふの神の恵みまたなん

ふうふ中あしくとて

つまのためみはゝあはすはいせもよしうらはおもてにうちまかせつゝ

世續の子のてきる歌こひ給ふに

をみなへしはくめるたねは名にしおふ男山にそ生ひいつるらん

祈れかし花の盛に種となる身をはむすふの神に祈らん

尾張の里内海の里にて、產の安き歌よみてよとありければ

うふ神の恵みも滿る汐さひをまちてそ安く出るあまの子

安產歌

子の日する小松か原にまくたねは千年をかけて生ひ出つらん

安產をいのりて

三つのひもとけやすかれとうふ神にかけてそいのる親と子のため

おほせことこうむりて

君かためたゝひと筋にめくりよくまもり治めよちのみちの神

寄風祝

四方の海の浪も治まる時つ風ふくとて木々の枝もならさし

井水すむ歌

蔭やとる月に濁はなきものをなとすまざらん田井のまし水

井水出る歌

ねがわくは出よ眞清水このつゝのつゝがなかれとくむ人のため

大御神に雨を祈り奉りて

天の神ふらせたまへよあめ露をまつの下草かれぬ計そ

ある時御神に雨を乞奉りて

たみ草のうるおふまてに天の川照る日の本えせきくたせかし

雨をこひ奉りて

ねかはくはふらせたまへよ雨つゆのかゝるめくみをまつの下草